俺と幼馴染みの共同生活

左リュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と幼馴染みの共同生活

【Ｎコード】
Ｎ３７２８Ｖ

【作者名】
左リュウ

【あらすじ】
主人公、桐山幸助（きりやまこうすけ）はある日、幼馴染みの天音彩（あまねあや）と共同生活を行う事となってしまう。そして幸助の周りの悪友達とその幼馴染み達も、なぜかそれぞれの理由で共同生活を行う事となってしまう。果たして、彼らは周りの人達にバレずに共同生活を行う事ができるのか！？　色々なネタ満載の、遠距離恋愛ならぬ、超『近』距離恋愛の、共同生活学園ラブコメ！！　※第四章開始しました！　突然生徒会に（無理矢理）入会させられた幸助達。そして直後舞い込んだいきなりの映画製作協力依頼！　その映画のテーマはなんと『幼馴染と

の同居』！？　かなりギリギリの映画製作が始まる！　幸助達は無事に幼馴染との共同生活の事を隠し通したまま乗り切れるのか！？

ＰＶ６万アクセス突破！　ありがとうございます！　【次の更新は十月十一日七時です】

第一話　いつもの日常と変わる日常（幸助ｓｉｄｅ）（前書き）

これからよろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

第一話　いつもの日常と変わる日常（幸助ｓｉｄｅ）

幼馴染みは、君に居るだろうか？

俺には、一人居る。

そいつは美少女で、頭も良くて、スポーツ万能で、スタイル抜群で、あとついでに、胸の発育も良い。

そんな幼馴染みは俺にとっては自慢で、誇らしい。

そいつは頑張り屋さんだから、頑張ってるそいつを見てるだけで、俺はそいつの姿にドキドキしたりもした。

だって、メチャクチャ良い表情してるんだからよ。

そして、今は高校一年。

俺とその幼馴染みは同じ高校に進学し、今ものほほんと同じ時間を過ごしている。

「・・・・・・何よ」

「ん？」

「なに人の事じっと見てんの。気になるんだけど」

「へっ？　い、いや～、やっぱお前ってスタイル良いなあって思って」

「なにエロい目で見てんのよ」

のほほんと・・・・・・

「え、エロい目でなんか見てねえよ！」

「見てたじゃない！」

「見てねえよ！」

「じ、じゃあ、ドコ見てたのよっ！」

「だから、やっぱ良い発育してる胸だなあって・・・・・・」

「なあっ！？　こ、この変態がああああああああああああああああああああああああッ！！」

ごめんなさい。

朝から顔面に右ストレートをくらって始まる日々は、「のほほん」とは言わないと今、気付いた。

☆

「おっ。今日も元気そうだな」

「それは俺の顔を見てから言え」

俺、桐山幸助（きりやまこうすけ）は朝、幼馴染みからいきなり顔面にとび蹴りをくら

ってから学校に登校した。
　今話しているコイツは、白上嵐（しろかみあらし）。コイツは中学から知り合った、いわゆる『悪友』だ。成績は上。憎々しい事この上ない。それに加えて、

「そういえば、今日は直ちゃんは？」

「ん？　途中まで一緒。中学の近くで別れた」

　後輩ツインテールというとてつもなく強力な属性を持った子と、幼馴染みときた。因みに『直』というのは、嵐の幼馴染みの名前だ。本名、加古川直（かこがわなお）。嵐の一つ下の後輩で、（俺の後輩でもある）現在受験生。

「そういえば龍神（りゅうじん）は？」

「まだ来てねーな」

「居るよ」

「「何いッ！？」

　ずざざっ、と俺と嵐が背後を見て、後ずさる。
　そこには、手に本を持って、開いている『悪友その2』の菅田（かんだり）龍神（ゆうじん）の姿があった。
　龍神はいわゆる『本の虫』で、いつも本ばかり読んでいる。
　なのに、

「りゅーじん？」

「何？」

「今日の放課後、空いてる？」

「空いてるよ」

「よかった。大事な話がある」

「解った」

サラサラロングヘアのクールビューティというこれまた強力な属性を持った幼馴染みが居る。

そして今の龍神の幼馴染みは、神戸愛（かみとあい）。龍神の幼馴染みと聞いた時にはそりゃあもう驚いたものだ。

なにせ学年トップがこの『本の虫』と幼馴染みだったりしたのだから。

因みに、俺達と、その幼馴染み達は全員同じクラスだったりもする。（直ちゃんは中学生なので居ないが）

で、その俺の方の幼馴染みは、というと・・・・・・

「・・・・・・（ムスッ）」

なにやらとても不機嫌そうにしてらっしゃる。この不機嫌な俺の幼馴染みは、天音彩（あまねあや）。嵐とは中学からの付き合いだが、彩とはもう幼稚園からの付き合いだ。

この様子は、どうやら朝の事をまだ怒っているようだ。

「ん～？　また幸助は天音を怒らせたか？」

「理由が聞きたいな」

「あ～・・・・・・それは、だな」

どうしよう。「幼馴染みのスタイルに見とれてました」なんて言えるわけがない。

「変態」

「「なるほど」」

「なんで解ったような顔をするんだ！？」

どうやら今の彩の一言で理由が解明されたようだ。

ここまでは、いつもの日常だったんだ。（いや、毎日こんな変態などとよばれているわけではないぞ！？）

でも、この『いつもの日常』が、変化しはじめたのは、放課後からだった。

☆

放課後。

俺は彩と帰り道を歩いていた。俺も彩も、部活動に入っていない。クラスも同じ、帰る方向も同じな俺達は必然的に一緒に帰る事となる。

「なあ。彩」

「ん。何？」

「前々から思ってたんだけど、なんでお前は部活やらないんだ？」

「え、えッ！？」

いや、そこまで驚くような事か？

「い、いや、だってさ、お前、結構運動とか出来るし。部活に入れば結構良い成績でも出せるんじゃないかって思って」

「・・・・・・い、いいじゃない。別に。入らなくても」

ま、そりゃそうか。

「あ、アンタが家に一人で帰るのがさびしいからと思って一緒に帰ってあげるためよ」

俺は小学生かっ！　と言いたくなったが、俺の家には親が現在居ない。毎日毎日世界中を飛び回ってボランティア活動に勤しんでいるからだ。

そもそも、俺の名前の『幸助』も、「人の幸せを助ける事の出来る人間になりなさい」と言って名づけられたものだし。

まあ、そんなわけで、俺の両親はお人よしで、そして俺は家では一人だ。

そこら辺の事情を良く知っている彩なりの配慮なのかもしれない。

「そうか。ありがとな」

「べ、別にお礼なんて・・・・・・」

プイッ、とそっぽをむく彩。

「でも、さ。だからこそ、なんかやっとけよ。部活。もう俺の為に彩に迷惑かけたくないしな」

それに、彩は色んな部活からよくスケットを頼まれるので、（そのたびに俺は応援に行っているわけだが）どこかの部活に入ればある程度落ち着くだろう。

「・・・・・・」

「彩？」

「ばか」

「へっ？」

たっ、とそのまま彩は走り去っていった。

何か、気に障る事を言ってしまったのだろうか。

☆

家に帰ると、彩はすぐさま自分の部屋へと戻った。

「あ～～～～！　もうっ！！　あのバカあああああああッ！！」

なんにも解ってない、とひたすら言い続ける。

そもそも。

彩がわざわざ部活動に入らず、毎日幸助と下校しているのも、幸助と一緒に居たいから、だ。

しかし。

彩は素直にはなれず、あんな回答をしてしまったのだが。

（にしても、あの鈍感っぷりはないんじゃないの！？　ただ、ただ私は・・・・・・）

幸助と、一緒に居たいだけなのに。
そう願い続ける彩なのだが、
それは意外な形で実現する事となる。

☆

「はあ。なんで怒られたんだろ」

俺はあの後、わけが解らないまま、一人で家へと帰った。
そしてあの成績優秀、スポーツ万能、スタイル抜群、の美少女幼馴染みがなぜ怒ったのかを考えていたのだが、一向にその理由が解らずに居た。
そして今はコトコトと夕食のカレーを作っている。
とりあえず、もう解らないからには仕方が無い。
明日、彩にはちゃんと謝ろうと思ったその時だった。
ピンポ～ン、と玄関のチャイムがなった。

「あれ？　誰だ？　こんな時間に」

俺はカレーの鍋の火を止め、玄関へと向かう。
そしてドアを開けるとそこには、

「・・・・・・」

なぜか大荷物を抱えた彩が居た。

「彩？　どうしたんだ。こんな時間に」

「・・・・・・から」

ポツリ、と彩は呟いた。

そして。

「私、今日からここで暮らすから」

なんて事を言い出した。

「はい？」

俺はそのまま突っ立ていた。

こうして、俺の『いつもの日常』が、大きな変化を迎えた。

第二話　幼馴染みと迎えた朝

朝。

開け放たれた窓からそよそよと心地よい風が送られてくる。気持ち良い。これならまだまだ寝れそうだ。

「・・・・・・さい！」

なんだろう。

「・・・・・・なさい！」

声が聞こえる。この家には俺一人だけのはずなのに。

「起きなさい！　幸助ッ！！」

ドガッ！！　と俺は朝からいきなり、文字通り叩き起こされた。具体的に言えば、蹴飛ばされた。

「痛ってえええええええええええッ！？」

「いつまで寝てんのよっ！！　遅刻しちゃうでしょ！？」

朝叩き起こされた俺の眼前に、制服姿の幼馴染みの彩が居た。

・・・・・・あれ？

「彩？　なんで居るの？」

「は、はあっ!?　昨日説明してたでしょうがっ!!」

そうだった。昨日、彩が突然家に来たと思ったら、「今日からここに暮らす」なんて事を言い出したんだ。

それというのも・・・・・・

☆

これは、昨日の事だ。

「私、今日からここで暮らすから」

「はあっ!?」

な、何言ってんだ!?

「あ～、まあ、そんな反応を示すのも解るけど・・・・・・」

話しづらそうに彩はゴソゴソとカバンから一枚の紙を取り出す。

そこには手書きで、

「ごめ～ん、彩ちゃん。パパとママはちょっと世界一周旅行に行ってきます♪しばらくの間戻らないから、こうちゃんの所にでも泊まっといてね♪

P．S．お金はちゃんと銀行に振り込みして仕送りしておくから♪」

「な、なんじゃこりゃあああああああああああああああああああああああああッ！？」

「うるさい・・・・・・私も今頭痛いのよ」

確かにこれは俺も頭が痛くなってきた。

普通、大切な一人娘をほったらかして世界一周旅行に行くか！？

しかも人の家に押し付けて！

「と、いうわけで、その、あ、あああ、アンタの家に今日から住むから」

「いや、ちょっ、」

「だ、ダメ？」

と彩は上目づかいで俺に懇願する。

ぐうっ！　く、くそっ！　元がかなり可愛い分、この上目づかいはキツイッ！！

「あ～、ま、まあ、仕方が無いな」

荷物も持ってきているようだし。

これは仕方が無い。

・・・・・・つーか、普通に泊まる気まんまんじゃねーか。

「じ、じゃあ、決定ね」

そのままトタトタと家の中に入って行った。そういえば、昔は良く彩は俺の家に来て遊んでくれてたな。

今思えば、家では一人の俺のためだったのかもしれない。

「ありがとな、彩」

「？　何か言った？」

「いや、なにも。そうだ。今カレー作ってたんだよ。一緒に食うか？」

「そうね。私も夕食はまだだったし」

そして、彩と一緒に夕食をとった後。

「じゃ、お風呂借りるね」

「ゴフッ！？」

盛大にむせた。

「何むせてんの・・・・・・」

「い、いやっ！　だって！」

いくら幼馴染みとはいえ、なあっ！？

「はっ？　・・・・・・な、ななな、何変な妄想してんの！？」

ばしんっ！！　と思いっきりカバンを顔面に叩きつけられた。そのまま俺は気絶し、意識を失い、ラッキーイベントは起こりませんでしたとさ。

少し残念、なんて言ったら彩に怒られるんだろうなあ。

その夜。

俺は意識が回復し、風呂にも入り、ふらふらと自分の部屋へと入る。

そして部屋を空けると、俺のベッドには・・・・・・

すーすーとなんとも可愛らしい寝顔の、彩が居た。

「・・・・・・はいッ!?」

いやいやいや!!　ワケが解らん!　ワケが解らないぞ!?　そもそもなんで俺の部屋で寝ているの!?　しかも、その、ね、寝顔がなかなか可愛いし・・・・・・つーか、このままじゃ俺の理性が保たないんですけど!?

「んっ・・・・・・?」

パチッ、と彩が目を覚ましてしまった。

「「あっ」」

一瞬の沈黙。

そして。

「ななな、何見んのよ!?」

「ここは俺の部屋だぞ!?」

「う、うるさいっ！！」

その後、彩の右ストレートで完全に俺の意識は途絶えた。

☆

「もうっ。このバカは・・・・・・」

気絶した幸助を見つつ、彩は呟く。

彩がなぜ幸助の部屋で寝てしまっていたのかというと、久しぶりに入る幸助の部屋。

昔を思い出して懐かしみつつ、ベッドに座っていると、ついウトウトとしてしまい、そのまま寝てしまったワケだが。

「あんなに怒らなくても、よかったかも・・・・・・」

自分のさっきの行動を思い返して、少し反省する。

「ごめん・・・・・・」

声が聞こえるハズもない幸助に、一言謝る。

すると。

「・・・・・・彩」

「え？」

何かを呟く幸助。

そして。

「彩・・・・・・」

彩（じぶん）の名前を呟く、幸助。

「あっ・・・・・・・」

少し嬉しくなった彩は、そのままベッドで眠り続けるのだった。

幸助と、同じ部屋で。

顔を真っ赤にしながら。

「彩・・・・・・右ストレートは痛いからマジで止めてくれ・・・・・」

幸助がこんな事を呟いている事も知らずに。

☆

そうだそうだ。

たしか俺はあの後、彩に意識を刈り取られたんだった。（『刈り取られた』という所がポイント）

「あっ。そういえば朝食の準備・・・・・・」

「大丈夫よ。やっておいたから」

そう言って、彩はトテトテと下のリビングへと降りていった。

俺は制服に着替えて、カバンに学校の教科書を入れ、リビングへと降りた。

そこにはテーブルに揃えられた朝食。

「遅いっ！！」

「お、おお。わりい」

彩はもうテーブルに着いていた。
どうやらまだ朝食をとっていないようだ。

「悪いな。朝食の準備までしてもらって。しかも待ってくれて」

「ッ！？　べ、別に待ってたわけじゃないわよ！！」

「お、おおう」

なぜだか怒られた。
とりあえず、さっさと朝食をとらないと、学校に遅刻してしまう。
俺がテーブルの席につき、箸を手に取る。目の前には卵焼きや、白ご飯、味噌汁等といったバラエティ豊かな朝食。
いつもは基本トーストで済ますから、こういう朝食は久しぶりだ。

「・・・・・・（じー）」

彩がなぜか、こちらを凝視している。

「な、なんだ」

「へっ？　い、いや。なんでも！？　は、早く食べなさいよ！！」

「お、おう」

俺はとりあえず、卵焼きを一口食べてみる。

・・・・・・

「ど、どう？」

「んっ。美味しい」

「そ、そう。と、当然ね！　私が作ったんだからっ！」

「そうだな」

「♪」

なんだかとてもご機嫌な様子で、朝食を食べ始める彩。

まあ、機嫌が良くなってなによりだ。

☆

「っと、そういえば弁当をまだ作ってないな」

と、言っても、今日は弁当を作るにしては寝坊だ。

パンで済ますか。

そう思っていた瞬間、

「ほら。そう言うと思って作っといたわよ」

ぽんっ、と俺の手に一つの弁当が手渡された。

「おっ、わ、悪いな。朝食から弁当まで」

「べ、別にっ。ただ、ありあわせを詰めただけだし」

朝食のレベルを見ると、どうやら昼食も楽しめそうだ。

「おう。楽しみにしておく」

「ッ！！　じ、じゃあ、さっさと行くわよッ！！」

そして俺と彩は家を出た。

俺はこの時は知らなかったが、俺の他にも、二人の悪友の『いつもの日常』も、大きな変化を迎えていたのだった。

第三話　いつもの日常と変わる日常（嵐ｓｉｄｅ）

嵐は下校する道中、今日はまず本屋に寄った。店内で参考書コーナーへと寄り、中学生用の参考書を探す。それというのも、幼馴染みの中学生に勉強を教えるためなのだが。

「っと、参考書のコーナーは・・・・・・」

きょろきょろと辺りを見回し、目当ての参考書コーナーを探す。立ち寄った本屋は駅前の大型の本屋で、ゆえに店内はそれなりの広さを誇る。普段は漫画や雑誌のコーナーばかり立ち寄るためか、参考書のコーナーを探すのには苦労する。店内の案内板を見つけて、参考書のコーナーを見つける。今の位置から料理本コーナーを通ればすぐだ。そして目的地の参考書コーナーへと向かう。料理本コーナーを通る。

するとそこに、見慣れた中学生が居た。

ツインテールの髪に、自分が通っていた中学の制服。

幼馴染みの、直だった。

（直・・・・・・？）

なにやら本を探している様子だった。

側に近づいてみる。

「よっ、直（なお）」

ぽんっ、と肩を叩く嵐。

「ひゃ、ひゃいっ！？」

ビクウッ！！　と急に肩を叩かれてビックリする直。

「あ、嵐さん、でしたか。ビックリした・・・・・・」

「あ～、なんだか驚かせてしまったみたいだな。わりい」

「い、いえ。そんな事はありませんっ」

そしてそそくさと持っていた本を棚へ戻す。しかし嵐はそれをひょいっ、と手に取る。

「ああっ！？」

「何買おうとしてたんだ？　本ぐらいなら買ってやるぞ？」

ぴらっ、と表紙を見てみると、『手作り料理レシピベスト百！』と書いてあった。要するに、手作り料理のレシピ本だ。

「あれ？　直って料理してたっけ？」

「こ、これから始めてみようかと思って」

「ふ～ん。それならこれよりこっちの方がいいぞ。あっ、でもこっちでもいいな」

ヒョイヒョイと次々と料理本を選ぶ白上。嵐は実家ではなく、マ

ンションを借りての一人暮らしなので、料理も一人でこなしている。
一人暮らし当初は、よく料理本を片手にキッチンで格闘したものだった。

「え、え～っと・・・・・・」

「おっ。やっぱこれがいいかも」

ポンッ、と料理本を手渡す嵐。

「あっ・・・・・・」

パラパラとページをめくると、そこには手順や材料等のが細かく、解りやすく書かれていた。

「じ、じゃあ、これで」

「そっか。じゃあ俺がおごるよ」

「えっ。でも」

「気にすんなって」

そして選んだ料理本を持って嵐は会計へと消えていった。

☆

帰り道の方向は同じなので、二人揃って歩き出す。嵐の片手には、本屋のレジ袋に納まった一冊の料理本。

「にしても、急に直が料理を始めるなんてな～」

「わ、私だってやれば出来ますっ」

「まあそうムキになんなって」

「ば、バカにしないでくださいっ！」

「ははっ。そうかそうか」

「むう～」

ぷくっ、と少し頬を膨らませる直。
そして二人は順調に歩を進める、が。

「そういやあ、おばさんとかは元気か？」

直の足がピタリと止まる。

「・・・・・・」

「直？」

「・・・・・・あの、その件、なのですが」

なんだろ？　と内心首を傾げる嵐。

「どうした？」

「えっと、その非常に言いづらいのですが・・・・・・」

そしてすうっ、と意を決したように、

「あの、その前にそこに・・・・・・」

すっ、と直が指差したのは、近くの喫茶店だった。とりあえず、喫茶店に入る。二階にある手近な席に座る。周囲には、まだ人があまり居なかった。そして直は意を決したように口を開く。

「えっと、実は、急に海外に引越しが決まっちゃって・・・・・・」

「引越し？」

正直に言うと、ショックだった。

それは否定しない。

なぜなら直とは小さい頃からの付き合いだったし、これからも一緒に居続ける物だと思っていたからだ。しかも海外となるとかなり遠い。もうあまり会えないだろう。

しかし、嵐はすぐに調子を整える。

「そうか。で、いつなんだ？」

「あっ。わ、私は引越しはしないんです」

「へっ？」

「えっと、来年はもう受験だし、その、こっちにどうしても居たいって事で私だけ」

「そ、そっか。そうかそうか」

内心、少しホッとする嵐。

「なるほどな～。それで普段料理もしない直が急に、な」

「あっ、今バカにしたですっ！」

「してないしてない」

「したっ！」

「そうだな」

「そ、そんなっ！」

ガーン、という効果音が響きそうな表情をみせる直。場の空気が少し和んだ、ような気がした。

「そうか。ならおじさんとおばさんは引越しか。それならしばらく会えなくなるし、今から挨拶に行ってもいいか？」

「はい。大丈夫だと思います」

白上としては今まで結構お世話になったおじさんとおばさんに挨拶しておきたいという気持ちがあったので、挨拶はどうしてもしておきたかった。

というわけで、二人は直の家へと向かった。

家の前へ着くと、もう引越屋のトラックが来ていて、荷物が大半

運び出されていて、いつでも出発ような体勢だった。

「なんとか間に合ったみたいだな」

「ですね」

すると、玄関から、直の両親が出てきた。手には荷物と思われトランクがあった。

「おや。嵐君」

「嵐君？　久しぶりねえ～」

「お久しぶりです。おじさん。おばさん」

ははっ、と直の父親は微笑み、

「そうか。もう高校生か。大きくなったね」

「はい。おじさんもおばさんも、海外に引越しするならそうと早く言ってくれればよかったのに」

「ごめんねえ～。この人も急だったから」

「オイオイ。仕方が無いだろ。仕事の都合でなんだから急なのは当たり前だろ？」

仲良さそうに話す二人。そんな光景を嵐は昔から見ていて、そして羨ましく思っていた。

「あっ。そーだそーだ。そういえば嵐君」

「はい？」

「私たち、一緒に海外に引越ししようっていったんだけど、直がどうしてもこっちに居るっていうんだけどねえ。それだと直、一人になっちゃうじゃない？」

「はあ。まあ、そうですね」

「だからさ、」

にこっ、と笑う直の母親。

そして。

「だからさ、直と一緒にこの家に居てくれない？」

「は？」

「じゃ、たのんだわよ～。直、ばいば～い♪」

そのまま一瞬にして、二人は車で行ってしまった。

「「・・・・・・」」

呆然とする二人。

こうして、白上の『いつもの日常』も変わり始めたのだった。

第四話　いつもの日常と変わる日常（龍神ｓｉｄｅ）

放課後。

龍神は、近所の図書館に居た。毎日のように図書館に通っている龍神だが、今日は本を借りる為だけではない。

幼馴染みの愛と一緒に、勉強を行う為だ。そもそも、愛の言う大事な話というのも、この龍神との『勉強会』だったのだ。

とは言っても、愛は学年トップの成績を誇るので、龍神はなぜだろう、と思ったのだが、愛が強く言うので了解したのだ。

自分の借りたい本を本棚から取ってから、愛と共に席に着く。

「りゅーじん。勉強はしなくていいの？」

「？　だって愛ちゃんの方が成績は良いでしょ？」

「そう、だけど」

「？」

「（わかってない）」

「？　何？」

きょとんとする龍神。そもそも、愛がワザワザ図書館で勉強しようと言い出したのも、龍神と二人っきりで居たかったからなのだが、当の本人は微塵もそうは思っていないようだ。『好きな人と二人きりで居たい』という辺りは、彩も愛も似ているのかもしれない。

「うん。それじゃ、愛ちゃんも居るし僕も勉強しようかな。解らない所があったら聞けるし」

「・・・・・・うん」

そして二人は勉強を始める。参考書を開き、問題を解く。時折解らない所があれば愛に聞く、のだが、なぜか愛は龍神に聞くことが多い。

「りゅーじん。ここはどうやって解くの？」

なぜか。

「りゅーじん。ここ教えて？」

・・・・・・なぜか、だ。

「えっと、愛ちゃん？」

「何？」

「な、なんでそんなに問題の解き方を聞いてくるの？　（しかもさっきからなんだかかなり密着してくるんだけど・・・・・・）」

「解らないから」

「嘘だよね？　それ絶対嘘だよね！？」

そもそも、幼馴染みの龍神にとって、愛の学力の高さは十分に知っている。龍神自身も、学力はそれなりに高いのだが、学年トップ

の愛の方が遥かに上、だ。

「・・・・・・りゅーじんはわかってない」

「うん。ここの問題は僕、まだ解ってないんだ」

「・・・・・・」

「え？　何？」

「「・・・・・・」」

「りゅーじん」

「・・・・・・はい」

「謝って」

「・・・・・・ごめんなさい」

わけも解らず、龍神は謝るのだった。

☆

帰り道。

二人は家が同じ方向なので、一緒に帰路につくのだった。
龍神の手には図書館から借りてきた本。

（・・・・・・りゅーじんは少し鈍感すぎる。この分だと、彩も苦

労してそう）

鈍感。

その言葉を思い出し、ふと、彩と幸助の顔を思い出す愛。
そしてチラリと龍神を見る。龍神の顔が夕日に当てられて、キラキラと輝いていた。

「あっ・・・・・・」

思わず、見とれてしまった。
ふと、足が止まる。

「どうしたの？」

「あっ、なんでも・・・・・・ない」

「？　そう」

そして再び、二人は歩き出した。

（・・・・・・こうなったら、りゅーじんには強硬手段に出る必要がある）

「りゅーじん」

「何？」

「私、今日からりゅーじんの家で暮らす」

「ゴフッ！？」

思わず、菅田はむせてしまった。

「げふっ、ごふっ、な、なな・・・・・・！？」

突然のトンデモ発言でもはや「な」としか言えない。

「ちちち、ちょっと待って！？　一体、いきなり、なんなの！？
どうしたの！？　第一、親の許可は！？」

愛は大きな財閥の娘であるため、正直親の許可は取れないだろうと踏む龍神。第一、同じ年の男と同居などという事になればなおさらだ。

「ちょっと待って」

ピピピッ、と携帯を操作する愛。

「パパ？」

『どうした愛』

「私、りゅーじんの家で暮らす」

ドストレートに事を告げる愛。

（ま、どうせ無理だろう）

と考えた龍神だった。

しかし。

『おおっ！　そうかそうか！　はっはっはっ！！　いいぞいいぞ！！　よし、許すっ！！』

「へっ？」

「ありがとう。パパ」

『おおっ。そうだそうだ。龍神君に代わってくれるか？』

「うん」

はいっ、と龍神は愛から携帯を受け取る。

『龍神君？』

「・・・・・・はい。ご無沙汰してます」

正直、龍神は少しこの父親が苦手だった。

それというのも。

『娘に手ェ出したらどうなるか解ってるんだろうなあ？』

「・・・・・・はい。重々承知しております」

『それならいいんだ。解ってるじゃねぇか』

ドスの効いた声で確認する愛の父親。これだからこの父親は苦手なんだ、と思う龍神。そして龍神は愛に携帯を返す。

『はっはっはっ！　頑張れよ！　愛！』

「うん。私、頑張る」

「・・・・・・」

ピッ、と携帯を切る。

もはや龍神は何も言えなかった。

そして、家に着くと一人暮らしの龍神の家に次々と荷物が運び込まれていった。龍神は開いた口が塞がらなかった。

そんな龍神をよそに、愛は楽しそうにしているのだった。

第四話　いつもの日常と変わる日常（龍神ｓｉｄｅ）（後書き）

これで序章が終わりました

第一話　自称『天音彩研究家』

学校に、彩と共に向かう。

登下校自体は毎日一緒にしていたので問題ない。というか、これが普通だ。

「ねえ。幸助」

「なんだ」

「えっと・・・・・・その・・・・・・どどど、同居の件なんだけど・・・・・・」

「・・・・・・おう」

「く、くれぐれも、学校で言いふらさないでね！？」

「当たり前だろ」

幼馴染みの俺が言うのもなんだが、彩は学校ではかなりのルックスを誇る。新聞部の裏・アンケート、『美少女生徒ランキング』では神戸さんと並び、同率一位だ。そんな彩と共に生活しているとなれば、俺に明日は無いだろう。確実に。

そう。『確実』に、だ。

「はあ。おばさんとおじさん、いつ世界一周旅行から帰ってくるん

だ？」

「知らないわよ。そんなの」

だろうな。

知っていたら苦労はしない。彩の両親は、彩の親とは思えないぐらい気ままな性格の持ち主だ。もしかしたら旅行に飽きて明日にでも帰ってくるかもしれないし、三年は帰ってこないかもしれない。

「ま、なんとかなるだろ」

「なるのかしら」

「なるようになれ、だ」

実際、そう願うしかない。彩と共に、そのまま何事もなく学校まで着くことが出来た。周りのクラスメイトは何も言わない。そもそも俺と彩はいつも一緒に登校しているので、不信に思われない。最大の不安要素はこっちからボロが出る事だ。その事態だけは必ず避けなければならない。バレたら何度も言うが、俺に明日は無い。

教室に入ると、既に嵐が居た。

「よっ。嵐」

「ん？　あ、ああ」

なぜだろう。少しぎこちない、ような気がする。

「？　どうかしたのか？　嵐」

「イイヤ。ナンデモナイ」

「お、おおう」

これ以上追求すると嵐（コイツ）が壊れそうだ。それに、こっちのボロが出るかもしれないし。そしてそそくさと彩は席へと向かう。う～ん。やっぱ俺達もなんだかぎこちない。

「おやおやあ～？　彩、どうしたあ～？　なんかぎこちないぞお～？」

「り、莉子？」

つんつん、と彩のほっぺを指でつついているのは、新聞部部長、紙絵莉子（かみえりこ）。愛読書は週間少年ジャ○プとしているクラスメイトだ。

紙絵さんとはさっきの裏・新聞部アンケート『美少女生徒ランキング』での取材によって知り合った。

以来、親しくしているようだ。

因みに、『そのネタを取るのは命がけ』、『そのネタはパンドラの箱』とまで言われた彩の取材を成功させた時の功績により、紙絵さんはなんと副部長に昇進したそうだ。

そしてその取材の結晶である裏・新聞部アンケートは瞬く間に男子の間に広がり、しばらくは男子のニヤニヤ顔が止まらなかったそうだ。

因みにその一部百円の新聞部の製作新聞、『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』に『美少女生徒ランキング』を載せた号は、毎回一千部を記録するという。（因みに学校の生徒数は六百人）

そして紙絵さんは新聞部で取材慣れしているせいか、なかなか感

覚が鋭い。
もしかしたら初日でアウトかっ！？

「あれあれえ～？　どうしたどうしたあ？　大切な幼馴染みの幸助と喧嘩でもしたかあ？」

「は、はあっ！？　たたた、大切な、ってなによ！？」

そこかよ。

「ん～、でもなんかぎこちないなあ。喧嘩では、ないと。だって本当に喧嘩してるならこんなに素直じゃないし」

「ッ・・・・・・！！」

おおっ。さすが自称『天音彩研究家』。

しかしいくらなんでもいきなり「君達、同居してるよね？☆」なんて事にはならな・・・・・・

「もしかして、ついに幸助と同居でも始めたかあ～？」

「「違うっ！！」」

やばい。
想像以上にやばいぞ。
自称『天音彩研究家』。

「そそそ、そうだぞ。紙絵。そんな事があるわけないだろう？」

嵐からの援護射撃。意外だな。まさかこんな援護射撃がくるとは。嵐にも何かあったのか？

「ん～、そうだよねえ。そんなワケないか」

「「「そうそう」」」

「そっかそっか。そうだよねえ～」

「「「そうそう」」」

「ま、それはそうと」

ゴソゴソとカバンから何か取り出そうとする紙絵。取り出したのは、カメラだった。

「さあさあさあ！　特ダネの宝庫天音彩！！　今日こそバッチリ取材させてもらうからねえッ！！」

「ちょっ！　また！？」

カメラを構える紙絵から彩は逃走を開始する。

「今度の『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』にはグラビアつけたいんだよね。だから私のおもちゃになってえ～」

「なるかあああああああああああああああああああああああああああああああああッ！！」

なれよ！！　と心の中で叫ぶ男子一同。解るぞ。解るぞ男子諸君。

ぶっちゃけ俺も超見たいぞ！！　彩のグラビア写真。
そして。
ドゴッ、と俺の顔面に綺麗な右ストレートが炸裂した。

「な、なぜに・・・・・・」

「なんか危険な感じがしたから。直感的に」

ニュータ○プかお前は。

「隙アリ☆」

「っきゃあああああああああああああああああああああああっ！！」

そして紙絵が彩の発育の良い胸をもみもみともんでいく。同時に男子のテンションが最高潮に達する。

「ち、ちょっと！　し、取材ってこれ！？」

「そうそう☆スキンシップから始めるのが紙絵流取材術なのだ☆」

「嘘つけえええええええええええええええええええええええええ！！」

見ていてとても微笑ましい光景だ。周りの男子達も微笑んでいる。
すると嵐が、

「お前ら、何ニヤニヤしてるんだ？」

「ちょっと微笑ましい光景が、な」

「み、見てないで助けろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

本日二度目の右ストレートが炸裂。

「な、なぜに俺にばかり・・・・・・」

☆

「いつつ・・・・・・」

「いやあ。朝からにぎやかだねえ」

「「お前（アンタ）のせいだろ（でしょ）」」

紙絵のおかげで朝から右ストレートを二発もくらってしまった。

その代償として素晴らしい物はおがめたが。

「そういえば、龍神が来てないな」

「愛もまだね」

あの二人がまだ登校してきてない？

これは何かがありそうだ。

「うっふっふ。これは何か特ダネの予感☆」

それは俺達にとって幸か不幸か。

「・・・・・おはよう」

噂をすればなんとやら、だ。
しかし、なぜか顔がげっそりとしている。

「おはよう」

と、思ったら、なんと神戸さんまで龍神と一緒に登校してきた。

しかし。

問題はそれだけじゃない。
手を、つないでいた。
男子共の警戒レベルが一気に上がる。
そして紙絵は「特ダネキターーーーーーーーーッ!!」と言ってパシャパシャとシャッターを切っている。
一体龍神と神戸さんに何があったのやら。

第二話　龍神の憂鬱

朝。

僕はいつも通りの時間に起きて、いつも通りに着替えて、いつも通りに朝食を作ろうとリビングに下りると、

「りゅーじん。おはよう。朝ごはん、出来てる」

愛ちゃんがエプロン姿で朝食を作り終えていた。

「・・・・・・」

「りゅーじん。どうしたの？」

きょとんと首を傾げる愛ちゃん。

うん。首をかしげたいのは僕の方だ。

「お、はよう」

しかも良く見るとかなりバラエティ豊かだ。

「頑張って作った」

「う、うん。ありがとう」

しかしマズイ。

非常にマズイ。

朝食はとても美味しいけど、状況的にはかなりマズイ。

もしも「朝食を愛ちゃんに作らせてる」なんて勘違いをあの父親にされたら、僕の命は恐らくないだろう。

「あ、あの、さ。愛ちゃん」

「なに？」

「これからは朝食は僕が作るよ」

「なんで？」

僕の命がかかってるから。

なんて言っても信じてもらえないだろう。なにしろあの父親は愛ちゃんの前ではただの親バカになってしまうのだから。ここはなんとか都合の良い、いいわけを搾り出さなきゃ、本当に命が危ない。

「・・・・・・ぼ、僕の作った料理を愛ちゃんに食べてもらいたいから」

「ほんとう？　嬉しい」

ふう。

なんとかごまかせ・・・・・・・

「でも、私が作る」

てないようだ。

たらり、と僕の頬を冷や汗が伝う。

ぼ、僕の命が・・・・・・・今、終末を迎えようとしているっ・・・

・・・・！！

・・・・・・朝食の権利を得られなかったのは痛い、が。まだ昼食と夕食の権利を得れば、まだ生存の可能性は上がる！！

「昼食のお弁当はもう作ってあるから」

トントン、と弁当を二つ置く愛ちゃん。いきなり、昼食の権利が強奪された。

しかしまだ夕食がっ・・・・・・・！！

「夕食も私が作るから」

「えっ。いや、でも」

「作るから」

「・・・・・・はい」

父親譲りの鋭い視線に圧された僕は、食事の権利を強奪された。僕はなんだか命を少しずつ削られるような感覚に襲われた。

☆

朝食をとり終えると、僕と愛ちゃんは一緒に家を出る。学校まで約二十分。それまでなんとも無ければよいのだが。

「りゅーじん」

「なに？」

「手、つないでいい？」

「てッ！？」

愛ちゃんはどうやら僕を殺したいらしい。

どうしてそこまで僕を殺したがるのだろうか。

「つないでいい？」

「だめ」

ここだけは譲れない。

なにしろ僕の命がかかってるのだから。

「つなごう？」

「だめ」

「つなごう？」

ストン、と僕の首筋に手刀を入れる、愛ちゃん。

「だめ」

そこから、僕の意識は途切れた。

「えいっ」

次に気がついたのは、学校の校門前だった。手は強制的に握られている。ものすごい握力だ。振りほどけない。

そして気がつけば、この状態で教室に着いてしまった。紙絵さんが居るのは不幸だった。本当に不幸だ。

「私たち、結婚します」

「しないよっ！！」

ダメだ。

もう完全に愛ちゃんは自分の世界に入ってしまっている。

そして男子。

なぜにそんな殺気立った目で見てくるんだ。これじゃあ、敵が増えただけじゃないか。愛ちゃんはなぜ僕を殺したがるのだろう？というか、なんとしてもこの状況は学校中に広めてはならない。

「うふふふ。特ダネも～らいっ☆」

ぴゅん、と一瞬にして紙絵さんは教室から消えた。

ひとまず、状況整理。

その一、今の僕の状況は、愛ちゃんと手をつないでいる。

その二、愛ちゃんは新聞部の裏・アンケート、『美少女生徒ランキング』で天音さんと並んで一位。

その三、今の僕と愛ちゃんの状態を新聞部の紙絵さんが激写。

その四、紙絵さんは一瞬にして教室から消えた。

その五、紙絵さんが向かったのは、新聞部の部室、そしてそこで行われるのは『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』の号外の編集、および、発行作

業。

これらの事を整理するのに、数秒。

僕がこれから始まる授業を放り出して教室を飛び出すのには、十分な理由だった。

第三話　弁当

昼休み。

直は友達の斉藤明子（さいとうあきこ）と共に、昼食をとっていた。

「あれ？　直。今日は弁当なんだ？」

「えっ。あっ。うん」

直の母親は弁当を作るときと作らない時がある。それも週三のペースで。学校に通うのは週五日。その内三日も忘れるのだから困ったものだ。そしてもう既に今週は二日弁当を作ってるので、明子は今日はてっきりパンか何かかと思ったのだが。

「直が作った・・・・・・」

「う、うんっ。そうだよ」

「わけないよね」

「・・・・・・それどういう意味」

明子は直が料理をあまりしないのは知っている。

ゆえに、急に弁当を作るという可能性は無いと踏んでいる。

「ん～、あんたのお母さんじゃないとすれば・・・・・・」

頭を悩ませつつ、直の弁当を作った人物を必死に考える明子。

そして。

「解った。嵐さんでしょ」

「そそそ、そんな事ないんですよおおお!??」

「それ、ごまかせてるつもり？　でもまあ、嵐さんも大変ねぇ～。わざわざ作った弁当を届けてるなんて」

（えっ？）

さすがの明子も、どうやら『同居』という発想まで行き着かなかったようだ。

「そ、そうそう。そうなんだよねぇ～」

あははは、とにこやかに笑う直。

（な、なんとかセーフ・・・・・・）

こうして、なんとか危機を回避した直の昼休みは過ぎていくのだった。

☆

「・・・・・・」

「？　どうした嵐」

「なんか。今俺の知らない所で誰かがかなり危ない橋を渡ってたよ

うな」

「なにそれ」

「俺にも解らん」

昼休み。

俺、彩、嵐、龍神、神戸さん、紙絵さんは机をくっつけた状態で、一緒に昼食をとっている。因みに、朝龍神は結局授業には間に合わず、二時間目から授業を受けた。さて、そろそろ俺も弁当を開けるか。パカッ、と弁当のふたを開ける。これは朝、彩が作ってくれた弁当だ。

「おやおや？　お二人さん、仲が良いねぇ」

紙絵さんが俺と彩の弁当を交互に見て、言う。

「「何が？」」

「だって弁当のおかずが全く一緒じゃん☆」

瞬間、俺と彩は空けたばかりの弁当のふたをバンッ！！　と閉める。

く、くそっ！！　まさかこんな落とし穴があろうとはッ！！

ちらっ、彩を見る。

彩も「どうすんの？」みたいな視線を送ってくる。いや、どうするって言われても・・・・・・するとすすっ、と龍神が弁当を隠す。

「ん？　どうした龍神」

龍神には悪いが、話題をそらさせてもらおう。なんで弁当を隠したのかは知らないけど。

「い、いや。なんでもない」

「ほほう。まさか」

紙絵さんが一瞬にして、龍神の弁当箱を取り上げる。そして神戸さんの弁当を見て、

「ほうほう。こちらも全く一緒～☆」

「・・・・・・」

「だって私が作っ、」

「さ、さあ愛ちゃん。僕達は屋上で食べよう」

そのまま龍神は即座に弁当を取り返し、神戸さんと屋上へと向かった。そして、なぜか俺と彩をじっと見つめている嵐が気になった。

☆

放課後。

俺と彩は一緒に下校しようとしたその時、嵐に呼び止められた。

「幸助。ちょっといいか？」

「？　解った。彩、先に帰っててくれ」

「解ったわ」

とりあえず、彩には先に家に帰っててもらおう。待たせるのも悪いし。

「・・・・・・」

そしてまた、嵐がじっと俺達を見つめている。

その後俺と嵐は屋上へと移動した。屋上の真上にはよく晴れた青空が広がっている。

「一つ聞くぞ。幸助」

「ああ」

なんだろう。わざわざ屋上まで来て。それほど重要な案件なのだろうか。

「お前、まさか天音と同居してるのか？」

・・・・・・・えっ？

第四話　幼馴染み×幼馴染み

「は、ははははは・・・・・・嵐、何を言ってるのかなかしらん？」

いかん。

言語バランスが崩壊している。

「お前、それでごまかせてるつもりか？」

く、くそっ！　普通、弁当の内容が被ったってだけで、『同居』なんていう発想までたどり着くか!?　こうなったら・・・・・・殺るしか、ないっ・・・・・・!!

「まあそうあわてるな。何も他のヤツにばらそうってワケじゃない」

「へっ？」

「・・・・・・だからその物騒な拳を収めろ」

なんだ。言いふらすつもりなら、ここで息の根を止めようと思ってたのに。

「つーか、なんで・・・・・・」

「あー・・・・・・ま、こっちにも色々とあってな」

嵐は深くため息をつく。そういえば今日はなにやら朝から不自然だよな。コイツ。

「協力してやる」

ガシッ、と俺の肩に両手を置く嵐。ど、どうしたんだ!?　コイツ!?ってまさか・・・・・・

「実を言うとだな、」

俺は嵐から諸々の事情を聞いた。

簡単に言えば、直ちゃんと同居する事になったと。

・・・・・・

「羨ましすぎるぞコラアアアアアアア!!　あんな後輩ツインテールなんていう強力な属性を兼ね備えた中学三年生と同居!?死にさらせえええええええええええええッ!!」

「待て待て待て!　あまり大声で言うなッ!!」

くっ!　なんて羨ましいッ!!　もういっそこの場で殺してやろうかあああああああッ!!

「落ち着け!　お前も同じだろうがッ!!」

「ぐっ」

た、確かに、彩は性格はともかく、ぱっと見はかなりの美少女だろう。これはこれで、ラッキー、なのか?

・・・・・・性格はともかく。

その時、俺の制服のポケットから着信音が響く。彩からだった。

メールボックスからメールを開く。そこには

『帰ってきたら覚悟しなさい』

と書かれていた。

「だからお前はニュータ○プかっ！　それともあれか、純粋種のイノベ○ターかッ！？」

「何を言ってるんだ」

「いや。なんでもない。っつーか、なんでお前はワザワザ自分からばらしたんだよ」

「そりゃあれだ。見方はあった方がいいからな」

確かに。

こんな綱渡りのような生活を続けるのならば、見方は一人でも多い方が良い。

「それにしても、朝の様子を見る限り、龍神も・・・・・・」

「・・・・・・だよな」

そして俺と嵐は二人揃って深く、はあっ、とため息をつくのだった。

☆

彩は一度幸助の家に戻ると、すぐに近所のスーパーへと向かった。

今日の夕食の食材を買うためだ。

「えっと、野菜はっと・・・・・・」

きょろきょろと野菜コーナーを目指す、彩。野菜コーナーを見つけ、さっそく食材を探す。

（何にしようかな。そういえば幸助（あいつ）、肉じゃがとかが好きだったっけ）

と、色々と今夜のメニューを考えていると、何やら見知った顔があった。

直だった。

「あれ？　直ちゃん？」

「あっ、彩、さん」

トコトコとそのまま彩は直に近づいてゆく。高校に入学してから、もうしばらく会っていない。最後に会ったのは、高校の入学式の直後だろうか。

「久しぶり」

「お久しぶりです」

ぺこり、と頭をさげる直。

「めずらしいわね。お買い物？」

「はい。夕食の食材を買いに」

あれ？　と彩は思った。彩は直とは付き合いは少しばかり長い。よって、直があまり料理をしない事は知っている。それなのに、どうして夕食の食材を買いに来ているのだろう。

「彩さんは？」

「わ、私？　私も夕食の食材を買いに、ね」

考えすぎだろう。もしかしたら料理を始めようと思っただけかもしれない。それに、あまり料理をしていないので、まだ直が料理が下手か否かも解らない。

「今日は夕食は何を作るのですか？」

「えっとそうね。肉じゃが、かしらね」

「肉じゃが、ですか」

じっ、と彩を見つめる直。

そして

「あ、あのっ」

「ん？」

「こ、今度、よ、よかったら料理、教えてくれませんか？」

「えっ？」

突然の直からの申し出。勿論、教えてあげたいのはやまやまだが、現在彩は幸助の家に居候中だ。幸助の家で教えるわけにもいかない。そもそも、現在彩の家は電気もガスも水道も止められている。誰も使わないからと言って彩の両親が止めたのだ。

「い、いいわよ」

「本当ですか？」

ぱあっ、と表情が明るくなる直。

「そ、それじゃあ、また今度、『直ちゃんの家』に行くわね」

ここでキッチリ、『直の家』という部分を強調する事がポイントだ。

「えっ。私の家、ですか」

直は直で、それはそれで困る。なにしろ今は嵐が居るのだ。見つかったらそれはそれでヤバイ。

「えっと、私の家は無理かも、です」

「そ、そうなんだ」

「「・・・・・・」」

二人の間には、しばらく沈黙が続いたという。

第五話　イベント

トントントン、と軽快なリズムで彩は包丁を動かす。

「あ、そうだ」

「ん？」

彩が途中で包丁の動きを止める。

「日曜日、直ちゃんが来るから」

「はあっ！？」

いやいやいやいやいや！！　待て待て待て！！　「来る」ってあれだよな、家（ここ）にだよな！？

「な、なんでそんな急な展開になってるんだよ！？」

「・・・・・・色々あったのよ」

そりゃあ色々あってもらわなければ困る。

「家（ウチ）来る～？」みたいな軽いノリで言われてたのならば正直怒ってたかもしれない（多分返り討ちだが）。

「で、なんの用なんだ？」

「なんか料理を習いたいんだって」

「ふ～ん・・・・・・あっ」

そういえば直ちゃんって、嵐と同居してたんだっけ。
だから料理を習おうとしてるのか？

「『あっ』て何よ『あっ』て」

「うおっ！？」

気がつくと、彩が目の前から俺を覗き込んでいた。う～ん。これは一応黙っておくか。言うほどの事でも無いし。

「なんでもない」

「嘘」

一瞬でバレた。ここは・・・・・・

「ち、ちょっと待ってくれ」

俺はするりと彩から逃げ、廊下に出る。とりあえず携帯をつかみ、嵐に電話する。コール音が三回響き、そしてようやく嵐が出た。

「どうした？」

「いや、なんか色々とあってさ。彩にお前らの事教えていいのか？」

「ダメだ」

即答。

「出来るだけ、知るやつは少ないほうがいい。そもそも俺がお前にばらしたのも、お前が俺と同じ立場だからだ。それ以外のヤツに不用意に情報をばら撒かない方がいい。それにあいつ等じゃあどこでボロが出るか解らないしな。特に天音は紙絵の事もあるし」

「お、おう。解った」

ブツッ、とそのまま通話は切れてしまった。よし、なんとかごまかそう。こういう時はなにか他の話題を振ればいいんだよな。　何か他の話題は・・・・・・・

「何してんのよ」

すっ、と彩が廊下に出てきた。

「で、なんで嘘ついてんの？　何隠し事してんのよ」

くっ・・・・・・！　まずい！　何か話題を振らないと！　ええい！　なんとか働け！　俺の直感力！

「あ、」

「あ？」

「彩のパンツの色が気になって」

「こ、この変態！！」

ズゴオッ！！　と彩の飛び膝蹴りが俺の顔面に炸裂した。
恨むぞ。
俺の直感力。
そして俺のその日の夕食は、魚の骨だったとさ。

☆

「・・・・・・どうしたんだその顔」

「直感力のせいだ」

「？」

次の日。

俺は腫れた頬を押さえながら登校した。嵐が驚くのもムリはない。
それにしてもなぜあの時あんな考えが浮かんだのだろうか。もっと、こう、ピキイイイイイン！！　っと良いアイデアが浮かばなかったものか。
しかも彩があれから少し機嫌が悪い。今日の朝食も魚の骨だったし。いや、まあカルシウムがとれるから我慢するとしよう。
因みに昼食も魚の骨だ。

・・・・・・あれ？　おかしいな。なんだか目から汗が出てきたよ。

「何泣いてるんだ」

「違うこれは涙じゃない。汗だ」

「そ、そうか・・・・・・」

これを涙と認めてしまったら多分昼食になると精神崩壊を起こしかねない。

「おはよう・・・・・・ってどうしたのその顔。しかも泣いてるし」

「ふっ。俺がニュータ○プじゃなかったのがいけないんだよ」

「そ、そう」

龍神。そんな哀れみをもった顔で見ないでくれ。もう人目をはばからず大泣きしたくなる。

「そういえば、今日ってなんか生徒会の方から発表があるみたいだよ」

「「発表？」」

この学校のモットー、というより校訓は『遊ぶならおもいっきり遊ぼうぜ！』だ。こんな推薦入試の時に「我が校の校訓はご存知ですか？」なんて聞かれてもし答えを知っていても言いづらい校訓だが、この校訓に順じ、この学校は様々なイベント事を行ったりする。

正直、年がら年中文化祭みたいな物だ。そのかわり、イベントで抜けた分の授業を補うため、補習地獄が待つわけだが。

「で、肝心な発表の内容は？」

「さあ」

「知らないのかよ・・・・・・」

「僕も今聞いたばかりだから」

「今聞いた？　一応生徒会主催のイベントだから発表までは一般の生徒には情報を隠さなければいけないはずだ。それをどうやって・・・・・・」

「紙絵さんから」

「「・・・・・・」」

ああ。あの人なら新聞のネタの為に生徒会室に無断侵入して盗聴器を仕掛けかねないな。隣を見てみると、嵐も妙になっとくしている。

「多分、そのイベントと同時に号外でもばら撒きそうだな」

「だろうな。多分今教室に居ないのも、その新聞の作成をしてるからかも」

「「「はあ～・・・・・・」」」

俺達三人は自然と、ため息が出た。

☆

ピンポンパンポ～ン、と軽いリズムにのり、メロディーが流れる。放送が始まるという合図のメロディーだ。

「おう！　俺の愛するこの学園の生徒共！　元気にしてるかぁ～！？」

と、元気良く声を出しているのは、二年生にして生徒会長の座についた天才生徒会長「祭盛人（まつりせいと）」さんだ。

「今から生徒会より重大発表をするぜ！　なんと一週間後、あるイベントを行う事になった！　それがコレだ！　みんな、外を見てくれ！」

クラスのみんなが一斉に窓の外を見る。

すると、校庭に

『今年度第一回！　チキチキ！　クラス対抗優勝商品を手にしてウハウハになるのはどのクラスだ！？　宝探し大会！』

と、白い文字で勢い良く書かれていた。おそらくよく陸上競技等で使う白線で引いたのだろう。今日の朝には何もなかったから、多分朝のＨＲ開始直前に間に合うように引いたのだろう。なんという早業・・・・・・！（ゴクリ）

「こんかいのイベントは宝探し！　そして優勝商品はな、なんと！クラス単位で行ける沖縄旅行だ！」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」」」」」

と、学校中が盛り上がる。

「そして諸君らの中には『え？　旅行？　どうせ土日使うんだろ？

土日は家でゆっくりしたいんだよ』みたいな事を言うヤツ等も居るだろう。しかし安心してくれ。勿論！　旅行に行くのは平日だあああああああああ！！」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」」」」」

おいおい。そんなんでいいのか生徒会。

「しかも月曜と火曜だ！　これでだるいだるい休み明けにムリヤリだるい体を引きずって学校に行くことはなくなるぜ！　やったね☆」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」」」」」

「しかもこれで四連休だあああああああああああああああ！！」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」」」」」

何か忘れてないか。君たち。

その代わりに、『補習』という名の地獄が待っているんだぞ？

「さて、肝心の宝だが、どんな物なのか等は一切不明！　時間終了（タイムリミット）時の時にそれを持ってたヤツが所属するクラスが優勝だ！　そして旅行についてだが、現地自由行動、交通費は学校負担の夢のような内容！　友達と楽しむもよし、彼女と楽しむのもよし！　本当に『自由』な旅行だ！」

本当にそんな事でいいのか生徒会！！　つーかこの学校は、本当

に大丈夫か！？

「それでは俺の愛するこの学園の生徒達よ！　今日も頑張って授業に励みたまえっ！！」

ブツッ、とそのまま放送が途切れてしまった。

こうして、『今年度第一回！　チキチキ！　クラス対抗優勝商品を手にしてウハウハになるのはどのクラスだ！？　宝探し大会！』が開幕した。

側では、紙絵さんが号外をばら撒いていた。

第六話　P研部長宅

あの祭さんのトンデモ発表、『今年度第一回！　チキチキ！　クラス対抗優勝商品を手にしてウハウハになるのはどのクラスだ!?宝探し大会!』は、瞬く間に学校中に活気を与えた。
そしてその企画を行うに伴い、その日の分の授業を補うために鬼のような補習があったのだが、みんなあのお楽しみ企画の為に補習もなんのそのと気合で学校中が乗り切った。
まあ、恐らくは生徒のやる気の向上も狙い通りみたいだが。

「なんか、あの生徒会長にしてやられたような気がしてならないわね」

「ああ。それについては俺も同感。でもさ、学校中が盛り上がってるからいいんじゃねえの。活気がある事はいい事だぜ?」

「ん。まあそう、ね」

と俺と彩は帰り道を歩きながらこうして雑談をする。
隣には嵐と龍神と神戸さんも居る。

「にしても、その分補習があるのがいやだよなあ～」

と嵐が腕を頭の後ろに組みながらお気楽そうに言う。

「仕方が無いよ。ウチの学校は一年中イベントと補習だらけのようなものなんだから」

「でも、その分生徒は集中して勉強に取り組んでいるから、全体と

しては学力の向上につながってる」

そうやってみんなで雑談をしていると、

「おっ！　やあやあやあ！　これはこれは皆さんおそろいで！」

紙絵さんが、前方の曲がり角から姿を現した。発言と様子から察するに、偶然居合わせたらしい。

「あら。莉子」

「おおっ。麗しの我が姫、彩ちゃんじゃないかあ」

「・・・・・・やめて。気持ち悪い」

「おおっとこりゃ手厳しい」

とおなじみのコントが一通り終わると、俺はある一つの疑問をぶつける。

「紙絵さん。どうしてこんな所に？」

「ああ。Ｐ研の部長に『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』最新号発行前のアンケートの結果を渡してたんだよ」

Ｐ研というのは、『パソコン研究会』の略称だ。

『パソコン研究会』とは銘打っちゃいるが、実際はアニメオタクの集まりと言っても過言ではない。しかし、一応活動はしているらしく、『全国ガン◯ラコンテスト』に入賞したり、『全国パソコン技能大会』とかなんとかいった、自作パソコンの大会で入賞したり

と、その活躍の幅は広い（？）。
ぶっちゃけ、運動部を差し置いて学園一の功績を持っているといっても過言ではない。

「アンケートって何の？」

新聞部は、独自に様々なアンケートやランキングをとっている。
例えば、『オススメ図書』、『オススメ勉強法』、『オススメ参考書』など等、表向きのアンケートもあれば、『美少女生徒ランキング』や、『最新ゲーム期待度ランキング』等、表向きには出せないようなランキングまで取り扱っている。

「これこれ～」

ピッ、とカバンから取り出した紙には、『P研部長が選ぶ、オススメアニメランキング』とある。

「いやあ～こういうアニメランキングって結構人気でさあ。どうやら学校には隠れアニメ大好き人間が多いみたいでね☆」

うん。
俺もそんなにアニメは嫌いではない。少し興味があるので覗いてみると、けい○ん！、ガン○ムX、インデッ○ス、仮面ラ○ダー等など俺も見たことのあるようなアニメや特撮ドラマがズラリと並んでいた。
そしてアニメのタイトルの下にそのアニメの画像と、そのアニメについての詳細がズラリと解りやすく描かれていた。

「な、なんかスゲエな。紙絵さん、よくもまあこんなに解りやすくまとめたもんだな」

「ああ、いやあ、その、コレ、私がまとめたもんじゃないんだよねえ」

「へっ？」

「なんか、P研の部長に『オススメのアニメのランキング作るからタイトルだけ書いてまとめといて』って言ったら、こんなにも詳しくまとめられちゃって。もうこのまま使うだけだから楽だったよ～」

てへへ、と言う紙絵さんを前に、神戸さんはじっ、とこのランキング用紙を見つめる。あれ？　神戸さんってそんなにアニメ好きだったっけ？

「愛ちゃんどうしたの？」

と、様子が気になったのか、龍神が声をかける。

「このランキングの詳細もそうだけど、読者の考慮やレイアウトも含めて何もかもが完璧にまとめられている。これを作った人は、かなり凄い人。」

確かに、初見で見ても解りやすいように描かれているようには見える。

そしてこれを作ったのはP研の部長。

「そういえば、さ。P研の部長って、誰も知らないよな」

「「「「そういえば」」」」

生徒会長が手渡す事になっている表彰の時も、P研の部長だけは姿をあらわさない。部長の正体をP研の部員は割らないため、これは一つの学園内の都市伝説となっているほどだ。

学年一の成績と容姿を誇る神戸さんにこうまで言わせるP研の部長。一度は見ておきたい、という気持ちがなぜだか湧き出てくる。

「な、なあ、紙絵さん」

「ん～？　なあに？」

「P研の部長って、誰？」

「秘密☆」

予想通りの反応。

まあ、そりゃそうか。

これだけ美味しいネタを紙絵さんがそう簡単にばらすとは思えない。

「私から言う事は出来ないけど、家にまでなら案内してあげようか？」

「「「「「ええっ！？」」」」」

まさかの展開。今まで秘密にされてきたP研の部長の正体が明らかになるっていうのか！？

「行きたい人～！」

と紙絵さんが手を上げる。俺達は静かに、全員手を上げた。

☆

「はい。そうなんですよお～」

紙絵さんはＰ研の部長に携帯で電話をしていた。

「えっ？　ＯＫ？　はあ～い。解りました☆」

ピッ、と携帯の通話を切る。

「ＯＫだって☆」

案外簡単に許可が降りたんだな。

Ｐ研の部長といえば、公には一切姿を現さない、学校一の天才、祭盛人（まつりせいと）生徒会長と肩を並べるぐらいの天才という噂もあるのだ。

そんな謎に包まれたＰ研の部長の家。紙絵さんを除く他のメンバー（俺を含めて）はそれぞれ緊張した面持ちだ。

因みに、今は途中で嵐が呼んだ直ちゃんも合流している。彩と神戸さんは一瞬なぜだろう、というような顔をしたが、嵐の事情を知っている俺としては直ちゃんを家で一人にしたくなかったんだろうな、と思った。

そして、龍神にも事情は説明済みだ。俺と嵐の事情を説明した時に『これで少しは命が守られる可能性が上がった』みたいな顔をしてたのは気のせいだろうか。

「学園で噂の天才、ですか。なんだか凄そうですね」

「ん～、確かに凄いからなあ。Ｐ研の部長って、また後でなんか話をしてやるよ」

と嵐と直ちゃんは雑談をしている。

「な、なんだかドキドキするわね。謎の天才の家に行くのって」

「お、おう」

そこでふと、俺は思う。そういえば、紙絵さんって電話の時に敬語を使ってたような。それはつまり、同級生ではなく、上の学年の人、という事はやはり確定みたいだ。

「ついたよ～☆」

と、紙絵さんが手を伸ばした先には、絵に描いたような大豪邸が広がっていた。

「「「「「・・・・・・」」」」」

俺達は全員文字通り空いた口が塞がらなかった。いや、だってなんか噴水とかあるんだもん！

「部長さ～ん。来ましたよ～」

と紙絵さんがインターホンに向かって言うと、ガコン、と豪邸の鉄格子のような門が開いた。

「おおっ」

「そんじゃ、中に入って入って～」

と紙絵さんが俺達を案内する。門から豪邸のドアまで少し距離があって、着くまでに少し時間がかかった。やっぱり広い。ここはアメリカか？　と勘違いしてしまいそうだ。

「おじゃましま～す☆」

と紙絵さんがドアを開け放つ。中には赤いカーペットが敷かれていて、階段も両サイドに設置されている。これこそまさに、『ＴＨＥ・ＧＯＵＴＥＩ』といった感じだ。

「す、凄すぎです・・・・・・」

うん。直ちゃん。そんな「こんな凄い家、みなさんは慣れてるんですよね？」みたいな顔をしないでくれ。

俺だって驚いてるんだから。

「さあ、こっちこっち☆」

紙絵さんはまるで自分の内のようにひょいひょいと移動している。

そして、そんな紙絵さんの案内でたどり着いたのは、一つの部屋。

「それじゃ、入りま～す☆」

がちゃっ、と軽い感じで一気にドアを開く。ち、ちょっ！　まだ心の準備がっ・・・・・・！

「おう！　来たかっ！」

と、聞いた事のある声が、俺達を出迎えた。そして、部屋の中に居たのは、

「ようこそ。俺の家へ。俺の愛する我が学園の後輩達」

そう。

中に居たのはなんと、学校一の天才、祭盛人生徒会長だった。

第六話　P研部長宅（後書き）

作中で挙げられたアニメはもう作者の趣味全開ですので温かい目で見守ってやってください（笑）

第七話　メイドの明さん

「ま、祭生徒会長、ですか・・・・・・・？」

「おう！　ってなんだ？　その『なんでこの人が居るんだ？』とでも言いたそうな顔は」

「「「「「「・・・・・・・」」」」」」

もはや全員の心は一つだ。そう、言いたいのはまさしく、

「なんでアンタがこんな所に居るんですか！？」だ。

「うおっ！？　お、俺が俺（じぶん）の家にいちゃマズイのか！？」

やっぱり、ここは、この大豪邸はこの人の家なのか。

「っていうか祭生徒会長――『祭でいいぜ』いや、そういうわけにはいきません――P研・・・・・・パソコン研究会の部長も勤めてらっしゃったんですか！？」

すると祭生徒会長は、

「おう」

と簡単に言った。

いや、「おう」って・・・・・・

よくよく考えれば、表彰式に出ないのも、『出ない』のではなくて、本当は『出ているが気づかれていない』だけなのだ。

だってまさか学園のオタクの頂点、P研の部長が天才生徒会長とは誰も思うまい。『学園一の天才と肩を並べる』と言われているのも、実際同一人物なのだから肩を並べているのも当然だ。

「な、なんで隠してたんですか・・・・・・」

がくっ、と思わず膝から崩れ落ちる。

「ど、どうした幸助。俺は別に隠してたわけじゃないんだけどな」

隠してるつもりは無いって・・・・・・確かにそうかもしれないけど・・・・・・ん？　ちょっとまて。

「今、俺の名前言いました？」

「ん？　そうだけど」

おかしいな。

俺と生徒会長の接点なんてほとんど無いのに。せいぜい、たまに廊下を歩いている時にみかけるぐらいだろうか。それ以外は放送で声だけとか。

「なんで俺の名前を？」

「へっ？　名簿と写真みたから」

きょとんとした顔で言い放つ祭生徒会長。

「因みに、他のヤツも知ってるぜ。白上嵐に菅田龍神に天音彩に神戸愛に、えっと、そこの他中の生徒は加古川直、か？　愛する我が

学園の生徒の名前ぐらい、全部覚えてるよ」

簡単に言い放つ祭生徒会長。この学園の一クラス三十人、それが四クラスだから一学年百二十人。それが三学年だから、全校生徒は約四百八十人。

・・・・・・いやいやいや！　四百八十人全員の名前と顔を覚えているって事だろ！？

しかも何気に他中の生徒まで知ってるし！

「ありえねえだろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

「はっはっはっ！　やっぱ面白いなあ！　お前達は！」

「生徒会長。『お前達』というのはやめてください。俺をこんな『おちゃらけバカ』と一緒にしないでください」

「生徒会長。俺ではなくてこの嵐を『くたばれこのバカ』と呼んでください」

「「殺んのかこらあああああああああああああああ！！」」

ガッ！　と互いの胸ぐらをつかむ。

「生徒会長。僕達をこんな野蛮な猿人類達と一緒にしないでください」

と、俺達の殺(じゃれ)しあいを龍神が冷めた目で見ていたのだった。

☆

「「・・・・・」」

俺と嵐はあの後、ニコニコ顔の祭生徒会長に取り押さえられた。
もっと厳密に言うと、ボコボコにされた。よって、今は仲良く頬に痣が出来ている。

「全くアンタ達は」

「本当にバカですね」

彩と直ちゃんからのトドメ。後輩に「バカ」と言われるのはなかなか無いだろう。

「「バカはコイツだ」」

「「どっちもバカよ（です）」」

ゴツン、と彩と直ちゃんからのダブルパンチ。

「「すみませんでした」」

男って、本当に弱い生き物だと痛感した時だった。

☆

「それで、なんでお前等家に来たんだ？」

「「「「「「・・・・・」」」」」」

「P研の部長がどんな人か興味本位で見に来ました」なんて言いづらい。なんとか別の理由を模索しなくては。

「P研の部長がどんな人か興味本位で見に来たんだよね☆」

今まで静かだった紙絵さんが急に爆弾を投下してきた。俺と彩はすぐさまその爆弾娘の口を塞ぐ。

「「あ・ん・た・は・（お・ま・え・は・）バカかっ！！」」

こんな失礼な事を生徒会長に言えるかっ！

「ふっがふがふご？（※訳：だってそうでしょ？）」

しかし祭生徒会長はきょとんとした顔で

「なんだそんな事か～」

とだけ言った。

「あれ？　そんだけですか？」

と嵐が意外そうな顔で言った。

うん。そりゃあ意外だろうな。俺だって意外だと思ったし。

「だって俺がお前等なら絶対見に行くもん」

「「「「「「確かに・・・・・・」」」」」」

なんかすげえ納得。

「でも、ま。このまま帰るのもなんだからゆっくりしていけよ」

「はあ」

「いや、この際泊まってけ！　どうせ明日は休みだしなっ！」

「「「「「はあっ！？」」」」」

俺達の意見を全く聞かずに、トントン、いや、ドンドンと話を進める祭生徒会長。

「遠慮すんなって！　着替えとかも全部用意させるからさっ！　・・・・・俺も暇だし（ボソッ）」

「今本音出ましたよね！？」

あれか。俺達はアンタの暇つぶし要員ですか。

「決定だな！　明（めい）っ！　今日は六人が泊まってくぞ！」

「かしこまりました」

気がつくと、祭生徒会長の近くに急にフッ、メイドが現れた。『メイドは忍者のような身のこなし』というのはよく漫画とかである設定だけど、まさか本当に実在したとは。

見てみると、メイドの明さんは綺麗な人、だった。年は恐らく祭さんと同じで、彩と同じセミロングの髪。メイド服がやけに似合っている。

「初めまして。如月明（きさらぎめい）と言います」

ペコリ、と丁寧にお辞儀をする明さん。やっぱりメイドさんって、礼儀が良いな。あれだよ。彩に足りないのもこういった礼儀が・・・・・

「なんか言った？」

ヒュンッ、と俺の目の前を凶器（こぶし）がかすめた。

「言ってません」

今度からは不用意な思考は改めようと思った。そうでもしないと一ヵ月後、俺はこの世には居ないだろう。

「明は生徒会の副会長もやってくれてるんだよ～。いやあ。助かる助かる」

「「「「「「ええっ！？」」」」」」

普段、祭さんのイメージが強すぎて他の生徒会の人って言われてもあんまり浮かばないけど、メイドの明さんが生徒副会長！？　それじゃあ祭さんと同い年！？

って、同い年のメイドさん！？　学校にも一緒に通ってるって事か！？一気に受け止めた情報量が多すぎてなんだか目眩がおきそうだ。

「き、恐縮です」

再びペコリと頭をさげる明さん。

そんな明さんの頭に手をぽんっ、と置いた祭さん。

「もう少し自信持てって！　お前が居てくれてるおかげでかなり助かってるんだから」

「は、はあ・・・・・・」

おどおどとして、それでもどこか嬉しそうな表情を、明さんはしていた。なぜ明さんがそんな表情をしているのかが少し、気になった。

いや・・・・・・まさか、な。

第八話　セルフサービス

突然、祭生徒会長の家に泊まる事となり、まずはそれぞれの部屋に案内された。

「ま、個室もあるんだけど、皆で居た方が楽しいだろ？」

と、祭生徒会長に案内されたのは、ベッドが四つ並んでいる部屋だ。

「ここがお前ら男子の部屋だ。明。女子を部屋に案内してやってくれ」

「かしこまりました」

女子達は、俺達の隣の部屋へと案内されていった。そしてそれを見送ると、俺達は目の前の部屋の中に入る。

「荷物はまあ、適当にその辺に置いといてくれ」

荷物、というより学校のカバンを隅にまとめて置く。

「それじゃ、後でまた来るな～」

それだけ言い残して、祭生徒会長は部屋を出て行った。パタン、とドアが閉まる。

「なんか、色々と展開についていけねえ・・・・・・」

「でもま、たまにはこういうのもいいかもな～」

確かに、嵐の言うとおりなのかもしれない。こんな大豪邸に泊まれる事なんて、滅多に無いのだから。こういう時ぐらい楽しもう。

「そういえばさ、例えば、だよ？」

「「？」」

龍神がふと、何かを思いついたかのような目をしている。

「もしも、学校のみんなに僕達の状況がバレたら……」

「「殺されるに決まっているだろ」」

「いや、殺されることぐらい解ってるよ。だから、その場合祭さんはどうでるのかな、って」

一体何が言いたいんだ龍神は。しかし、そんな俺をよそに、隣では嵐が「なるほどな」と呟いている。

「？　何が」

「ったく。いいか、龍神が言いたいのは、もしも今の俺達の状況を祭さんにバラした場合、祭さんが、俺達の味方になってくれるかどうかって事だ」

「そうか。確かに、俺達も今まで明さんが祭さんの家のメイドで、それも一つ屋根の下で一緒に暮らしてるなんて知らなかったもんな」

「紙絵さん号外をばら撒いていない所を見ると、恐らく祭さんから口止めされているのだろう。そうでなければ、多分今頃祭さんの命は全校生徒の手によって闇に葬られているだろうし。それはつまり、『全校生徒に知られては困ると自覚しているから』だよ。きっと」

「明さん、可愛かったからな」

「ああ。それに胸も大きかったしな」

嵐。お前とは気が合うよ。

☆

「・・・・・・・？」

「あれ？　どうしたのですか？　彩さん」

「・・・・・・・いや、なんか今もの凄いイラッとした感じがして」

「そ、そうですか」

とりあえず、隣の部屋につながってる壁を拳で叩きつけて警告を与えておこう。ついでに部屋を出た瞬間襲撃しよう。

彩はそう、心に決めたのだった。

対して。

（なぜだか解らないけど、後で嵐さんには歯をくいしばってもらいましょう）

と直は心に誓うのだった。もしも幸助と嵐がこの二人の女子の考えを読み取れてた場合、口をそろえてこう言うだろう。

「「女子って恐い」」

と。

☆

「因みに、明さんは『美少女生徒ランキング・二年生部門』で堂々の第一位だしね」

「やっぱりそうか。明さん可愛いもんな。っつーか、なんだかんだ言って龍神って情報通だな」

と、俺が呟いた所で、隣の部屋からドンッ！！！　と拳を壁に叩きつけたであろう音が響いてきた。なぜだろう。壁の向こうから「アトデカクゴシナサイ」という声が今にも響いてきそうだ。

俺の直感力がこの部屋を出た瞬間、俺の命は無いを告げていた。すると、ガチャッ、と部屋のドアが開いた。出てきたのは私服に着替えた祭さんだ。

「晩飯は食堂で食うから、三十分後には部屋の外に出ててくれよな。そんだけ」

バタン、とドアが閉まる。

さようなら。俺の命。

「・・・・・・なんだろう。俺、後でとんでもない目にあいそうな気がする」

嵐。死ぬときは一緒だぜ？

☆

「おう。お前ら、揃ってるな～って幸助、嵐。顔が腫れてるぞ？どうした？」

「「転びました」」

「いや、でも普通転んで顔に腫れは出来な・・・・・・」

「「壁に顔をぶつけました」」

「一体どうし・・・・・・」

「「ドアに小指をぶつけました」」

「そ、そうか」

言えない。

部屋を出た瞬間、「阿修羅と化した幼馴染みが襲い掛かってきてボッコボコにされました」なんて言えない。

というか俺は何もしてないのになぜ殴られなきゃならんのだ。

「今日の晩飯はセルフだから好きなだけ食って行けよ～」

「「「「「「セルフ？」」」」」」

セルフって、ホテルやファミレスのセルフサービスしか思いつか

ない。あの「ご自由におとりください」みたいな。俺達の部屋があったのは、二階。そして食堂は三階だった。この家は一体何階まであるんだ。

階段を登って、着いたのは大広間のような食堂だった。中には、バイキングのような設備があり、お皿やトレイ、そして和食から洋食までかねそなえた様々な料理の数々。

「好きなだけ食っていいぞ～！　ここの家の料理ってめちゃくちゃ美味いんだ。なっ！　シェフ！」

すると、厨房の方から出てきたのは、シェフと思われる青年。結構若い。年は二十代前半、と言った所だろうか。

これだけの若さでもうこの豪邸の料理人として働いてるなんてウデはかなりの物なのかもしれない。

「ありがとうございます。祭坊ちゃま」

ペコリとシェフは頭を下げる。

「「「「「「・・・・・・」」」」」」

俺達はぶっちゃけ、開いた口が塞がらなかった。セルフって、そのまんまの意味だったのかよ・・・・・・

「おおっ！　これは豪華豪華☆さっそく食べちゃおっと！　いっただきま～す☆」

お皿とトレイをつかみ、紙絵さんはすぐさまセルフサービスと化している夕食へと向かっていった。

「なんか、時々思うけど、あの子の中に『常識』ってあるのかしら？」

と、彩がポツリと呟いた疑問に俺達は何も答えられなかった。

☆

とりあえず、ボーっとしてても仕方が無いので俺達は各々夕食をとる事にした。トレイをつかみ、その上に皿を乗せ、夕食の備え付けられているテーブルへと移動する。俺は、和食が好きなので和食コーナーへと移動する。まずはごはん、味噌汁を乗せる。

「後は・・・・・・」

「はい。焼き魚、でしょ」

ひょいっ、と俺のトレイの上に彩が焼き魚を乗せる。

「おっ。さんきゅっ」

「んっ。いーわよ別にこれぐらい」

見てみると、彩のトレイの上にもごはんと味噌汁。彩は俺と同じ和食派だ。このへんは気が合う。

「彩はコレだろ。卵焼き」

ひょいっ、と彩のトレイに俺の手近な位置にある卵焼きを乗せる。

「あ、ありがと」

「いいって」

「な、なんで解ったの？」

「お前と一緒だよ。幼馴染みだしな、大体解るって」

「そ、そう」

ん。なんだろう。彩の顔がほんのり赤い。

「どーした彩。顔が少し赤いぞ？」

「なっ！　べ、別に赤くなってなんか・・・・・・」

「・・・・・・彩、まさかお前・・・・・・俺の事を・・・・・・」

「は、はあっ!?　別にアンタの事なんかこれっぽっちも・・・・・・！」

あわてても無駄だ。俺には解ってるのだから。今更隠したって無駄だぜ？

「俺の事を散々ボコボコにしたから、その分汗でもかいたんだろ？」

「・・・・・・」

また彩が俺のトレイの上に何かを乗せた。

ってこれは・・・・・・！

「悪魔（ピーマン）・・・・・・だと・・・・・・・！」

「そっ。アンタ嫌いだったでしょ？」

「な、なんという愚行！」

「ふふん。好き嫌いはいけないわよ」

「ああっ！　畜生！　お前の嫌いな物は・・・・・・」

「それじゃっ」

そして彩はすぐさま俺の元を離れ、戦線離脱した。多分、このピーマンの山をどけると、後で阿修羅モードとなった彩にゴミクズにされるだろうから俺は頑張ってこの悪魔（ピーマン）食べる事を決意した。

第八話　セルフサービス（後書き）

訂正箇所があったので訂正しておきました。
「味方」の誤字と、祭と明の設定です。
祭と明は二年生です。

第九話　渾身の告白（？）

悪夢（ゆうしょく）を終えた後、俺達はそれぞれの部屋に戻る。ぶっちゃけ俺は龍神と嵐に担がれて戻ったが。

いや、本当にピーマンが苦手なんだって。

「うぷ・・・・・・あ、彩の野朗・・・・・・」

「そろそろ食べられるようになったら？」

「無理だ。もうこの世の悪魔共（ピーマン）を全て駆逐しなければ、俺は今日の悪夢から解放されないだろうな」

ボフッ、と俺はベッドに顔をうずめる。家のベッドよりもふかふかだ。思わず寝てしまいそうなぐらいに。

「まだ寝るなよ。たしかもうすぐ風呂だから」

と、嵐がさっき明さんが持ってきてくれた俺達の分の着替えを確認しながら俺に言う。

明さんに聞いてみると、大浴場　（この呼び方の時点でもう家の風呂じゃないだろ）を使える時間が今日は限られているようだ。

なんでも、大浴場のメンテナンスとかなんとか。

「確か、大浴場には九時集合みたいだな」

「そうみたいだね」

「今は八時半か。そろそろ準備するか」

「いやあ～。こうしているとなんか中学の時の修学旅行を思い出すな」

話をする俺達の間に、気がつくと祭さんが居た。

「「「どうやって入ってきたんですか！？」」」

こ、この部屋って確か鍵がかかってたはずだぞ！？　どうやって入ってきたんだこの人はっ！！

「あっはっはっ！　まあ細かい事は気にするなって！」

「気にしますよ！」

簡単に人が侵入してくる部屋に居たくはない。

「鍵！　鍵はどうしたのですか！？」

「ああ。そりゃあれだよ。俗に言うピッキング」

祭さんの右手には、キラリと黒く光るヘアピンが光っていた。ピッキングって・・・・・・アンタは一体何になるつもりだ。

「そうだそうだ。コレ持ってきたんだった」

ゴソゴソと祭さんが手に持っているスポーツバッグから何かを取り出してきた。ゴトッ、という鈍い音を立てて床に落ちたのは、ビデオカメラとその他多数。

ざっくり言ってしまえば、『ＴＨＥ・盗撮グッズ』の数々。

「・・・・・なんですかコレ」

「男湯と女湯は隣り合わせだ。・・・・・この言ってる意味が、解るよな？」

「「「それでいいのか生徒会長（アンタ）は！！」」」

こんな生徒会長は見たこと無いぞ！？いや、これから未来永劫祭さんと同じような生徒会長とは会わないだろうけど。

「そもそも祭さん。俺達はそんなおろかな事はしませんよ」

「意外と真面目だな」

「いや、真面目とかそんなんじゃなくてですね」

そうだ。俺達は別に真面目ってわけじゃない。
そもそも。

「そんな事をすれば、確実に死が待っているからですよ」

フッ、と俺は悲しげな表情で事実を述べる。本心を言うと、正直覗きたい、が。覗き＝死あるのみ、なのだ。
普段の彩の暴挙を見れば解ると思うが、こんな事をしようものならば恐らく俺に明日はない。ぶっちゃけ、自殺を行うような物なのだ。
そんな死（リスク）を犯してまで俺達は覗き（じさつ）を行うつもりはない。

「あー・・・・・なんとなく理解したわ」

「ご理解していただけて、なによりです」

その後、祭さんは部屋を出て行った。心の底から同情してくれていた目がなんだか悲しかった。

俺もね、結構苦労しているんですよ。

☆

集合時間には、もう全員大浴場の前に集まっていた。勿論、俺達はバスタオルと着替えのみ。自殺行為をする気は全く無い。その事を理解したのか、彩は最初はじろじろと俺達を警戒心で満ち溢れたまなざしで見ていたが、その警戒も解かれたようだ。

無実が証明されてなによりだ。

このままありもしない罪のレッテルを貼り付けられたままだと、その内襲い掛かってきそうだからだ。そして、男子と女子はそれぞれの大浴場へと別れた。

☆

大浴場、という単語は中学の時の修学旅行で聞いた事がある。要するに、『旅館にある大きなお風呂』ぐらいの認識だった。

実際、修学旅行の時に入っていた旅館はそのイメージのまんまだった。

しかし。

俺達の目の前に広かる大浴場は、『大きなお風呂』どころではない。高級感溢れるようなその光景。旅館のお風呂を『十』という数字で評価するなら、この家の風呂は『千』だ。

「癒される～・・・・・・」

湯船につかると、ぽかぽかと体の芯まで温まってきそうだ。頭の上に、畳んだタオルを乗せて湯船につかる。

これこそ、日本人の風呂の入り方だろう。たぶん。

「お前ら～。こっちこっち」

広大な湯船につかっていると、同じく湯船につかっている祭さんが壁際の方でなにやら俺達を呼んでいる。なんだろう、と思って近づいてみる。同じく、嵐と龍神も来る。

「集まったな。よし、少し静かに・・・・・・」

しっ、と人差し指を口の前に当てて、祭さんが静止を促す。

その指示に従い、しばらく静かにしていると、

『彩～』

こ、この声は、紙絵さん？

ってまさか・・・・・・！

『り、莉子！？』

これは彩の声。間違いない。この向こうは女湯だ。上を見上げると、この男湯と女湯を隔てる壁は天井まで届いてないらしく、声がバッチリ届く仕様となっている。

『うっふっふっ。大浴場（ココ）なら逃げ場は無いわよ～♪』

『逃げ場って何する気よ！？　それにその不自然な手の動きを止めろ！　嫌な予感しかしないのよっ！』

『問答無用！　覚悟～☆』

『ちょっ！　や、やめっ・・・・・・・！』

・・・・・・

この先から響いてくる彩の悲鳴からして、何が行われているかが解る。美少女二人が何をしているのか。

・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・

「幸助。鼻血が出てるぞ」

嵐が言う。体って正直だな。

『なに聞いてんのよっ！』

上からオケが降ってきて、見事に俺の頭に直撃した。恐らく彩が向こう側から放り投げてきたのだろう。正直、悔いは無い。俺は今とても満足だ。

『この変態ッ！！』

満足な俺に、もう一撃オケがプレゼントされた。

☆

「痛(いて)え」

すりすりと後頭部をさする。風呂で彩からの襲撃で受けた後頭部が痛む。今、俺は部屋の前にあるベランダに居る。一足先に風呂から上がった俺は、風に当たろうとベランダに出たのだ。夜風が頬をさする。風呂上りなので、ほてった体には夜風は心地良い。

「ったく。彩のヤツ、もう少し加減って物を・・・・・・」

「しなくて悪かったわね」

ベランダの仕切りの向こう。そこから、彩の声が聞こえた。そうだ。忘れてた。俺達の部屋と彩達の部屋って隣り合わせだったんだった。

「なんだ。お前ももう上がったのが？」

「莉子が色々と変な事してくるから」

ああ。要するに逃げてきたんだな。

「逃げてないっ」

お前はエスパーか。つーかあれか。女はみんなエスパーか？

「・・・・・・」

「・・・・・・」

しばらく、俺と彩はだまったまま夜空を見上げる。いや、彩は実

際どうしてるか仕切りのせいで解らないけど、恐らくは俺と同じで夜空を見上げているだろう。

「明日の朝食って、何が出るんだろうな？」

「さあね。夕食がセルフサービスだから、朝食もそうじゃない？」

「う～ん。ここの肉じゃが結構美味しかったからな～。また食べたいよ」

「そ、そう」

「あっ。でも前お前が作ってくれた肉じゃがも美味しかったな～。また作ってくれよ」

「へっ？　あ、そ、そうね。また作ってあげる」

「そうか。じゃ、楽しみにしてるよ」

そしてまた沈黙が訪れる。しかし、それは意外にもすぐに、そして彩の方から破られた。

「アンタって、肉じゃが、好きよね」

「そうだな。結構好き」

「・・・・・・わ、私、」

「？　どうした？」

「私は、大好きよ」

「何が？」

彩にしてはめずらしく歯切れが悪い。彩はもっとこう、結構ズバズバとハッキリと物事を言うヤツなんだけどな。

「肉じゃが・・・・・・が、好きな人」

・・・・・・・？

全く意味が解らない。この言葉の意味の説明が入るのかと思いきや、それっきり彩はずっと黙ったままだ。

「え～っと、彩さん？　何の意味だかさっぱり・・・・・・」

「ッ！　も、もう知らないっ！」

ドンッ！　と窓を乱暴に閉める音がした。いやいやいや。何の事だかさっぱり解らないって。俺はしばらく、わけも解らずその場に立ち尽くすのだった。

☆

（い、言っちゃった言っちゃった言っちゃった言っちゃった言っちゃった・・・・・・）

一応、『渾身の告白』、だった。

前々からそろそろ告白はしようとは思っていた。

しかしなかなかチャンスが無く、共同生活を始めてからも、その

チャンス、というより良いタイミングが回ってこなかった。
そして今日のこの『お泊り』だ。これはチャンスだ、と思った。
そして風呂場から上がって、まだ他の人が上がっていないこのタイミング。
幸助も部屋に一人っきりときた。
絶好のチャンス。
そしてぶつけた渾身の告白。
しかし問題は。

(あ、あのバカ、なんっっっっっっっっっっ、にもっ！　気づいていないっ！　普通、あのタイミングであのセリフと言ったらアンタの事を指してるに決まってるでしょうがっ！　ああ鈍い！　本当に鈍いっ！)

確かにあのバカのセリフを普通の状況で言ってもわけが解らないだろう。というより、素直になれない彩にはドストレートに告白なんて無理だ。
彩は当然それを計算していて、わざわざ話題をふったのだ。
それなのに。

(な・ん・で！　あのバカは全く気づいていないのよおおおっ！！)

こうして、恋する乙女の渾身の告白は空しくもからぶりに終わったのだった。

第十話　第一のヒント

宝探し大会当日。

学校全体が、異様な空気に包まれていた。後に全校生徒に通知された内容によれば、なんと旅行には学校外の人間も連れて行けるらしい。

よって、学校外に彼氏、もしくは彼女が居るような人も連れて行けるというワケだ。

この通知によって、特に学校外に彼氏、もしくは彼女が居るような連中もメラメラと闘志を燃やしている。

クラス単位、と言っても旅行自体は自由そのものだからカップル二人っきりの旅行となるわけだ。そして、生徒会長からの開会宣言が始まるまであと五分を切った。

大半の生徒は運動場に集まっていて、俺達も例外では無かった。

「いやあ～。解ってはいたが、やっぱスゲエな」

「まあこの学校はイベントが多い上にその一つ一つのイベントの規模が他の学校とは比べ物にならないからね。皆が必死になるのも無理はないさ」

などという会話を、嵐と龍神がしている。そして側には彩、神戸さん、そして紙絵さんも居る。なぜか紙絵さんの手にはなぜかカメラが。

「うっふっふっ～。こういう場はシャッターチャンスが溢れているからね～。バシバシ撮りまくるよ～☆

それに、『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』の記事にもなるんだから」

「そ、そう・・・・・・」

彩、一応言っておくが気をつけろよ。

いやホント、マジで。

『おうっ！　俺の愛する学園の生徒共！　元気にしてるか！？』

「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお～～～～ッ！！」」」」

祭さんの声に反応して、雄たけびを上げる全校生徒。本当に、この学校の連中はノリが良いと思う。

『さあて、かったるい話は無しにして、さっそく宝の第一のヒントを上げちゃうぜ☆　次のヤツに宝のヒントが隠されてるからな～！』

そう言ったと同時に、バサッ、と校舎の屋上から白い垂れ幕が落ちる。白い布には、黒い文字でこう書いてあった。

『ｖｅ\ｋ：ｙｇ８４』

「んじゃ、これで開会宣言を終了し、『今年度第一回！　チキチキ！　クラス対抗優勝商品を手にしてウハウハになるのはどのクラスだ！？　宝探し大会！』を開始する！」

開会宣言が終了し、パパンッ、と校舎の頭上に三色の花火が上がる。

こうして、『今年度第一回！　チキチキ！　クラス対抗優勝商品を手にしてウハウハになるのはどのクラスだ！？　宝探し大会！』

が始まった。

☆

「さっぱり解らない」

白い垂れ幕に黒く輝くヒントの文字。しかし、何がなんだかさっぱりだ。そもそもなんだよ。『ｖｅ＼ｋ：ｙｇ８４』って。しかも第一ヒントって事はまだ他にもヒントがあるって事だろ。冗談じゃねえ。

「そもそも、宝自体がどんな物か解らないからね。ヒント無しで探すのは難しいと思うよ」

「それじゃあやっぱりヒントを解かなきゃならないのか・・・・・・」

むうう、と俺は白い垂れ幕とにらめっこを続ける。しかし、そうしてもヒントが解るわけも無い。周囲を見てみると、他の生徒達もあの白い垂れ幕とにらめっこを続けては頭を抱えている。

「それじゃ、行くよ」

「へっ？　行くってどこに？」

「パソコン室」

と龍神と神戸さんが俺達を先導する。

「パソコン室・・・・・・そうか。なるほどな」

「なんとなく解ったわ」

「ああ。なるほど～」

俺以外のメンバーはどうやらみんな解ったようだ。という事は解ってないのは俺だけ！？

「他の生徒に気づかれないように移動するよ」

と、龍神が他の生徒に気づかれないようにみんなを引き連れて校舎へと向かう。

「っつーか。なんでパソコン室に行くんだ？」

「まあ、確認みたいな物だね」

「確認って・・・・・・」

ダメだ。さっぱり解らない。

「もしかしてアンタ、まだ解けてないの？」

「鈍いな。相変わらず」

「やっぱり鈍い」

「ドンマイ☆」

次々と俺を貶めるコメントの数々。

・・・・・イヤだなあ。涙なんて出てないぜ？

「ワンワン！」

と、校舎へと向かう俺達に、突然犬がほえる。種類はゴールデン・レトリバー。祭さんが（なぜか）この学校で買っている犬、『ヨッシー』だ。

なぜか目から汗が止まらない俺を慰めに来てくれたのだろうか。

「うわっと、悪いなヨッシー。今相手してる暇は無いんだ」

なぜだか俺はヨッシーになつかれている。本当に謎だ。初めて会った瞬間からいきなり突撃されて顔をべろんべろんになめまわされたものだ。

ヨッシーと別れ、校舎へと入る。

そして俺達は校舎の三階にあるパソコン室に到着した。

「で、何を確認するんだ？」

「勿論、コレだよ」

と龍神は一台のパソコンを指差す。

「？」

「まだ解ってないようだから説明するけど、あのヒントの『ｖｅ＼ｋ：ｙｇｇ４』っていうのは、いわゆる『キーボード暗号』ってヤツだよ」

「『キーボード暗号？』」

「そう。あのヒントの文字を、このキーボードに当てはめていくんだ。この場合、ひらがなにね」

「あの暗号の文字を、キーボードに当てはめる・・・・・・」

確かヒントは『ｖｅ＼ｋ：ｙｇ８４』。俺はパソコンに設置されているキーボードに目を通す。

ｖはキーボードで言うと、『ひ』、ｅは『い』、＼は『ろ』、ｋは『の』、：は『け』、ｙは『ん』、ｇは『き』、８は『ゆ』、４は『う』。

「ひいろのけんきゅう・・・・・・ひいろのけんきゅう・・・・・・『緋色の研究』って事さ」

と龍神はニヤリとする。

「緋色の研究？」

なんだそれ。聞いた事ないぞ。

「コナン・ドイルが執筆したシャーロック・ホームズシリーズの第一作目」

と神戸さんが俺の様子を察して答えてくれる。

「本、っつー事は図書室にある『緋色の研究』の中にヒントがあるのか？」

「違うよ。よく思い出してよ。祭さんは言ったよね。『次のヤツに

宝のヒントが隠されてるからな』って。コレも、ヒントの一部なんだよ」

そして神戸さんに説明をバトンタッチする龍神。

「シャーロック・ホームズシリーズの『緋色の研究』の次の作品は『四つの署名』。だから図書室にある『四つの署名』に多分ヒントが隠されてると思う」

「な、なるほど・・・・・・」

種がわかってしまえばなんとも簡単なヒントだ。初見ごろしにも程がある。こんな簡単な（俺は解けなかったが）問題を祭さんが作るはずが無い。大方、明さんに押し付けたのだろう。

「この程度のヒント、多分もっと多くの人が解けてると思うよ。さあ、僕達も急ごう」

俺達はパソコン室を後にして、図書室へと向かう。パソコン室は三階だが、図書室は一階。移動に少し時間がかかる。

「龍神と神戸は一番に解ってたみたいだが、いつから気づいたんだ？」

と嵐が走りながら質問する。すると龍神と神戸さんが同時に、

「「見た瞬間から」」

とだけ答えた。どんだけ頭の回転が速いんだ・・・・・・この二人は。

そして、途中で特に他の人にも会う事も無く、俺達は図書室にたどり着いた。

ここに、第二のヒントがある。

第十一話　第二のヒント

図書室に入ると、中にはまだ人がほとんど居なかった。しかし、図書室のカウンター席に、ポツンと眼鏡をかけた女子生徒が、一人で本を読んでいたぐらいだ。

「あっ。初書(そめがき)先輩じゃないですか」

と紙絵さんがカウンター席で本を読んでいる女子生徒に話しかける。

「あら。紙絵さんじゃない。どうしたの？　こんな所に」

初書葉子(そめがきようこ)先輩といえば、図書委員長じゃないか。見たところ、暗号が解けた・・・・・・というわけでも無さそうだ。

そもそも、本当に暗号が解けたのならもうとっくに次のヒントの場所に向かってるだろうし。

「初書(そめがき)先輩。私達の他に図書室に来た人達って、居ますか？」

「ん？　そうね。アナタ達が来る少し前に、生徒会長が来たわよ」

「祭さんが？」

「そう。どうやら今回の宝探し、企画したのは生徒会長だけど、ヒントや目標の宝とかを設定したのは副生徒会長らしいし。あの生徒会長はなんだかんだで楽しい事が大好きだからね～。自分も参加したかったんじゃないの？」

「「「「「「ああ～・・・・・・・」」」」」」

納得。

確かにこんなイベント、生徒会長（あのひと）なら喜んで参加しそうだ。しかしこれは相当マズイ事になった。天才生徒会長と競争とは。これはかなり手ごわい敵だ。

・・・・・・つーか勝てる気がしねえ。

「と、とりあえず、『四つの署名』を見に行こうか」

俺達は、『ミステリー』のコーナーへと足を運ぶ。この学園の図書室は広く、そして大きい。それゆえに収められている本の種類や量も膨大で、パソコンでの検索機能を儲けなければいけない程だ。

そもそも、こんなイベントを何回も行うぐらいの資金もあるのだから、当然だろう。

「あった。これだ」

『四つの署名』だけでも本棚に十冊あった。そして、その内の一つを手に取り、開く。本が納められているスペースは、二つの本棚に挟まれているので、ぎゅうぎゅうだ。

そんな所でみんな一つの本に視線を集中させているので、正直狭い。

「次のヒントは何処にあるんだろう？」

パラパラとページをめくる龍神。

「これは？」

と神戸さんが本の間に挟まっているしおりに手を伸ばす。

「うっ」

と龍神の手に、神戸さんの手が当たる。

「ごめん」

「い、いや。別に、いい、よ」

と照れる龍神。全く。手が当たったぐらいで照れるなよな。俺なんかいつも手どころか顔面に彩の拳が当たるんだから。

「悪かったわね」

げしっ、と彩が俺の足を蹴る。もう彩のエスパーには驚かないぞ。というか、蹴りが通称、『弁慶の泣き所』と呼ばれている場所にヒットしたのが痛くて、驚く所では無いのだが。

「痛えッ！！」

よろっ、とよろける俺。思わず彩にぶつかってしまう。

「ちょっ、ぶつかってこないでよ！　狭いんだから！」

「い、いや。今のは不可抗りょ・・・・・・」

むにゅり、と腕になにやらやわらかい物が当たって・・・・・・

「きゃっ！？　ち、ちょっと！？　何処触ってんのよっ！？」

「ま、待て！　今のは全部お前が悪い――――」

「問答無用！」

「そりゃねえだろおおっ！！」

ドゴシャッ！！　と、彩の右ストレートが俺の顔面にヒットした。
やっぱアイツは胸がデカイな、と思った。

☆

「じゃあ、そろそろ見ていい？」

「「はい・・・・・・」」

あの後、とりあえずあのスペースは狭いので、読書スペースのテーブルへと移動する事にした。俺に残ったのは、足の痛みと、ズキズキと頬が腫れる痛みと、そして初書先輩の「図書室では静かにしましょう」という注意だけだった。時間を少しロスした。とにかく、早くヒントを解いて次のヒントの場所に行かないと。どれだけヒントがあるのか解らないのだから。

「愛ちゃん。しおりは？」

「ちゃんと確保してる」

ぴっ、としおりを指で挟んだ状態でみんなに見せる神戸さん。

「これに、ヒントが書いてあった」

すっ、とテーブルにしおりを置く神戸さん。

そこには、こう書いてあった。

『言う会初日』

「い、意味解らねえええええええええええええええええええええええええ！！」

何!?　何コレ!?

言う会初日!?

そもそも『言う会』ってなんだあああああああああああああああっ！！

「あれだ。言う会の初日だ」

と嵐が冗談交じりに言う。

「そのまんまじゃんっ！」

すると、じーっ、としおりを見つめる龍神が、唐突に口を開いた。

「これ、アナグラムかも」

「アナグラム?」

「うん。言葉あそびの一つだよ。言葉の配置を変えて、別の言葉を作る遊びのような物だよ。ただ、このヒントの場合はちゃんとした

文になってないからかなりずさんだね。アナグラムだと簡単に解る」

そして龍神はポケットからメモ用紙とペンを取り出し、メモ用紙にサラサラと文字を書いてゆく。

「まずはこの文をひらがなに直してみよう」

『言う会初日
　←
いうかいしょじつ』

「『しょじつ』？　『しょにち』じゃなくて？」

と彩が質問をする。

「うん。一度解いてみた結果、『初日』は『しょにち』では無く、『しょじつ』と置き換えるのか正しいかもね。そして、この文の配置を変えてみると――――」

龍神が更に文を書き加えてゆく。

『言う会初日
　←
いうかいしょじつ
　←
ついしかいじょう』

「「「「「追試会場！！」」」」」

「多分ね。この学校に関係する言葉の組み合わせ（パターン）がこれぐらいしか

無かったし」

この学校には、『追試会場』と呼ばれる特別な教室がある。『追試会場』には携帯電波が届かないようにしてあるし、そして携帯等を探知するための金属探知機、そして会場内で使う筆記用具を完備、会場内あらゆる物の持ち込み禁止等、追試する際のカンニング行為を防ぐための設備がある教室だ。

次のヒントは、その追試会場にある。

☆

直と斉藤明子（さいとうあきこ）は現在、二時間目の授業にのぞんでいた。しかし、二時間目は担当教師の体調不良により自習となっているのだが。直の席の目の前が明子の席なので、二人は配られた自習中の課題をすぐに終えて、おしゃべりに精を出していた。

「へえ～。やっぱ楽しそうね～。嵐さん達の学校って」

「その分、補習が大変らしいけどね」

と直は苦笑いする。宝探しのイベントの為に補習で苦しむ嵐をすぐ側で見てきたからだろう。

「でもさ、優勝したら沖縄旅行でしょ？　いいなあ～」

「なんでも、その旅行って学校外の人でも招待出来るらしいよ」

「うそっ！？　じゃあもしも嵐さん達が優勝したら私も連れてってもらおうかな」

「良いんじゃない？　多分連れて行ってくれると思うよ。まあでも、優勝出来たらだけど」

「あっ、でも～」

と明子はちゃかすように微笑む。

「お二人の邪魔しちゃ悪いから遠慮しておこうかな～♪」

「なっ！　じゃ、邪魔って何の事！？」

「またまた～♪」

と明子は直をからかう。そして直は明子にからかわれつつも、『もしも』の展開を考える。

（もし・・・・・・もしも優勝したら、嵐さんと沖縄旅行・・・・・・それも一泊二日のお、お泊り・・・・・・）

ぽ～、と直は『もしもの沖縄旅行』に思いをはせる。もうすでに毎日一緒に暮らしているにもかかわらず旅行先でのお泊りにドキドキするのはやはりもう今の生活に慣れつつあるからなのかもしれない。

こうして、自習時間が過ぎてゆくのだった。

第十二話　お宝見つけた→その後のピンチ

追試会場はなんと四階にある。
今までで一番遠い。というか、これ校舎の中ばっかり移動しているぞ。ヒントを解く事を諦めて必死になって校舎の外を探してる連中は一体なんなんだ。
でも、ゆっくりはしてられない。
図書室にも人が集まりつつあるし、なにより祭さんが先行している。
モタモタしていられない。

「何してんの幸助！　急ぎなさいよ！」

「わ、解ってるって彩！　っつか、なんでそんなに必死になってるんだよ！」

俺の場合はただ単に楽しんでるのと、学校を休みたいがためなのだが、彩はこんなに必死になるとは意外だ。
アイツ、そんなに学校を休みたいのか？

（お、沖縄旅行・・・・・・幸助（アイツ）との沖縄旅行・・・・・・ふ、二人きりで・・・・・・）

なにやらブツブツ言っては時折顔が赤くなっている。これはそっとしておいた方がよさそうだ。
階段を登り、四階に到達。『追試会場』と書かれたプレートが付けてある教室に足を踏み入れる。中には無数に広がる机。変わった所は何も無い。

「おっ。これがヒントかな～？」

紙絵さんが追試会場のホワイトボードに目を向ける。俺達も黒板を見てみると、そこには次のヒントが記されていた。

『もうネタ切れなう（´・ω・`）

最後のヒントは”シ”』

「「「「「「ネタ切れかよ！！」」」」」」

一つ目二つ目と暗号の連続だったのに、最後の最後でネタ切れとは。相当悩んだんだろうな。明さん。

・・・・・つーか顔文字がやけにイラつく。しかし、これだけでは何も解らない。

「あれ？　まだ何か書いてあるよ？」

紙絵さんが更なる発見をする。あのネタ切れヒントの真下に、『全ての頭を取れ』とだけ書いてあった。

「どうやらこれも暗号みたいだね。いや、今までのも暗号と言えるようなレベルの物じゃなかったけど」

それは言ってやるなよ。明さんだって必死に考えたんだよ。

「全ての頭を取れ？」

彩が首をひねる。意味が解らない――――のは俺にとって恒例だが、これも本当に意味が解らない。

「頭・・・・・ああ。そういう事か」

もはや探偵と化した龍神はもう解ったようだ。

「多分、これは今までのヒントの答えの頭を取ればいいんだよ」

「今までのヒントの？」

「そう。最初のヒントは『四つの署名』、そしてその次のヒントは『追試会場』最後のヒント（？）は『シ』。で、第一と第二のヒントをひらがなに直して、最初の文字だけ取って順番に読むと、『よつし』となる」

「よつし？」

「よつし・・・・・ヨツシ・・・・・ヨッシ・・・・・ヨッシー」

「「「「「ヨッシー！？」」」」」

ヨッシーといえばあの祭さんのペットの名前だ。さっき外で見かけたが、まさかヨッシーがお宝（ターゲット）！？すると、軽やかなメロディーと共に校内放送が入る。

「時間終了（タイムリミット）まであと十分です」

これは明さんの声だ。

まずい。早く急がないと・・・・・！

☆

俺達はヨッシーを探すため、急いで校舎の外へと出た。
先ほど見かけた場所にはもうヨッシーは居なかった。

「とりあえず、手分けして探すか」

嵐の提案により、それぞれお宝（ヨッシー）を探すためにそれぞれ四方へと散る。

（ヨッシーを見つけて、りゅーじんと一緒に沖縄旅行・・・・・・絶対に見つける）

（絶対見つけてやるんだから！　そ、そして・・・・・・あ、ああああ、幸助（アイツ）と沖縄旅行・・・・・・）

なんだろう。
物凄い気迫を感じる。一体二人に何があったというのか。
しばらくして、残り時間がラスト五分となった。くそっ。このままだと、答えは解ってるのに取り逃してしまう。でも、よく考えればもう祭さんにヨッシーは確保されているのかもしれない。そんな事を考えていた時だった。

「ワンワン！」

遠くの方から、聞きなれた犬の鳴き声が響いてきた。そして泣き声が響いてきた方向を見てみると、まぎれもない、ヨッシーが走っているではないか。

「見つけ・・・・・・」

見つけた。と言いたかったが、その言葉は出なかった。

――――物凄いスピードで獲物(ヨッシー)を追いかける彩を見て。

「待てえええええええええええええええええええええええええええ!!」

恐い！　なんか恐いぞ彩！

もはや阿修羅だよ！　阿修羅すら凌駕する存在だよ！

「あっ！　幸助！　ヨッシーを見つけたわよ！　さっさと捕まえなさい！」

と言われたって、犬のスピードに俺が反応出来るわけないじゃないか。しかしここまで来たんだ。もうヤケクソだ。

「よ、ヨッシー！　止ま『ワンワン！』ぐおっ!?」

ドスッ、とヨッシーが俺の腹部に直撃する。そして俺の顔をペロペロとなめている。どうやらヨッシー(むこう)の方から来てくれたらしい。

「ほ、捕獲完了・・・・・・？」

「あんた、本当になつかれてるわね」

と、彩があきれたように呟くのだった。そしてその瞬間、

「タイムア～ップ！」

と祭さんの声が学園全体に響き渡った。

「現時点でお宝を所持しているのは、一年四組の『桐山幸助』だ！　よって、優勝は、一年四組！」

こうして、『今年度第一回！　チキチキ！　クラス対抗優勝商品を手にしてウハウハになるのはどのクラスだ！？　宝探し大会！』が幕を閉じた。

☆

教室に戻った瞬間、クラス中は祝杯ムードだった。

クラスメイト達からは「よくやった」と言われまくり、それぞれ沖縄旅行への思いをはせ、まさにお祭り状態だ。

しかし忘れてないか君達。俺達は学校を休んだ分、補習が待ってるんだぞ？なんて俺はこの時、のんきに考えていた。

教卓の前に紙絵さんがダンッ！　と立ち、そしてクラス中に向かって、叫ぶ。

「よし！　パーッ！　と打ち上げやろうよ！」

紙絵さんからの突然の提案。うん。まあ打ち上げぐらいは別にいいんじゃないかな。　でも俺、今お金が無いんだよな。割り勘だとどれぐらいになるんだろ。

「場所は勿論、優勝者、桐山君の家で☆」

「「・・・・・・へっ？」」

思わず彩と声が被る。い、いやいやいや。それはいくらなんでも

クラス皆が納得しな・・・・・・

「おう！　いいぞ！　やろうぜ！」

「優勝者の家に殴りこみだあ～！」

となんだか乗り気なクラスメイト達。どうやら決定のようだ。

「おい。やばくね？」

「そりゃそうでしょ」

思わず彩と顔を見合わせる。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

そして俺と彩は同時に呟く。

「「どうしよう」」

俺と彩の共同生活以来、最大の大ピンチだ。

第十三話　ミッション（前書き）

沖縄旅行編までまだもう少しお付き合いを。

第十三話　ミッション

俺の家は、ただの、ごくごく普通のありふれた一軒家だ。
彩と二人で暮らすぐらいなら、数人の友達を呼んで遊ぶぐらいならスペースは有り余ってるだろう。
しかし。
決して三十人もの人間が打ち上げを起せるスペースではない。とうに定員オーバーした俺の家は、一年四組のクラスメイトで溢れていた。なんとか説得に成功し、大半のメンバーはなんとか庭の方に待避してもらえた。がやがやとクラスメイト達はそれぞれ沖縄旅行に向けて思いをはせる。だがその裏で、俺はとてつもなく大変な状況におかされていた。
いや、決して家にクラスメイトが勝手に上がりこんできたからじゃない。あいつ等は勝手に打ち上げ道具やら食い物やら勝手に持ってきて勝手に騒いでいる。だから放置していて問題は無い、のだが、この家は今朝まで俺と彩が二人きりですごしていた家だ。
不意に俺達の同居がバレるような証拠が出てきた日には打ち上げ会場は瞬く間に公開処刑会場へと変貌する事になるだろう。
俺のミッションは、『彩との同居がバレるような証拠を出さずにバカ共（クラスメイト）を退ける』事だ。
そして現在はみんな庭でがやがやと騒いでいる。異常無し、だ。
ふう、となんとか一息ついていると、不意に、肩がぽん、と軽く叩かれる。嵐だった。背後には更に龍神まで居る。

「まあ、なんとかバレないように協力してやる」

「その代わり、僕達のピンチの時にも協力してね」

持つべきものは共犯者だ。なんとも心強い。

「でもまあ、一番警戒しなきゃいけねえのは・・・・・・」

チラッ、と嵐が目線を移す。その視線の先に居たのは、カメラを持ってせわしなく動きまくる紙絵さん。

「さあて、撮りまくるわよ～。明日の大見出しは『一年四組、宝探し大会制す！』で決まりね！」

因みに、我が学園の新聞部が発行する新聞、『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』は週一のペースで発行している。

『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』は有料で、一部百円するのだが、紙絵さんが取り上げてくるネタは学外の物があったり、面白いネタが多かったりするので、発行すればたちまち売れに売れ、最近では新聞部の利益はうなぎ登りだそうだ。

その上、紙絵さんが取り上げてくるネタの量と速度が半端ではないため、よく号外が出される。因みに号外も有料だが、出すたびにやはりよく売れる。

そして嵐の言うとおり、一番厄介なのは紙絵さんだ。いつどこでこの家をガサゴソと探りまわすか解らない。一応証拠となる物は全て隠しはしたが、正直紙絵さんの前では焼け石に水、だ。

「ねえ、ちょっと」

密かに対策を練ろうとした俺達に、彩が背後から話しかけてきた。そしてするりと自然に嵐と龍神がその場から離れる。

そうだ。彩は嵐と龍神には俺達の同居がバレてるって事、知らないんだっけ。

「どうするの？　正直莉子はかなり厄介よ？」

「う～ん・・・・・・どうするって言われてもお前、紙絵さんに家をあさるのを止めろって言ったらどうなるか解ってるか？」

「絶対に漁りだすわね」

「だろ？」

やはり仲が良いだけあって解ってる。

そう。

紙絵さんに不用意な発言をすると逆効果だ。嬉々として家をゴキブリのごとく徘徊し、カラスのようにあさりまくるだろう。

「お前の生活用品一式、どこに隠した？」

「アンタの部屋」

なんてこった。

「なんで俺の部屋!?」

「し、仕方が無いじゃない！　それ以外特に思いつかなかったのよ！」

まずい。俺の部屋なんて一番危険なポイントだ。

「なら俺の部屋には誰も近づけさせないようにしないと・・・・・・」

まさに俺の部屋は今、地獄の門と化している。見つかった瞬間、俺は一気に地獄へと直行だ。チラリと紙絵さんを見ると、無邪気な笑顔で写真をパシャパシャと撮ってはガリガリと手帳に何やら書き込んでいる。

しかし、その無邪気な笑顔は俺にとっては死神の笑顔にしか見えない。手に持っている一眼レフとあらゆる情報が詰まっている手帳ははまるで死神の鎌だ。

あの鎌がまさに今、俺の首をちょん切って俺を地獄へと連れ出そうとしている。

「さーてと、そろそろ優勝者の自宅でも取材しようかな☆」

くるっ、と俺の方をみてにこりと笑う。恐い。恐いよ紙絵さん。トコトコと紙絵さんは家へと入ってゆく。ここで遮ったら怪しまれる。なんとか俺の部屋に行かせないようにするしかない。

「それじゃあさっそく、幸助君の部屋でも・・・・・・」

「な、なあ紙絵さん？　まずはリビングでお茶でも」

「ふふん。取材は一分一秒が勝負なんだよ。覚えておきたまえ」

これはまあ、普通の状況ならばカッコイイんだろうけど、今の状況だととてつもなく厄介だ。

「何言ってるんだ幸助。さっさと取材ぐらい済ませてしまった方がお前も楽だろ？」

こんな爆弾発言をしたのはなんと嵐。まさかの裏切りだ。

（お、お前、裏切るのかあああああああああああああ！）

（安心しろ。天音の生活用具一式は今龍神が別の場所に移動させておいた）

（えっ？）

な、なるほど。さっきそそくさと移動した後にさっそく行動に移したのか。さすが嵐と龍神。

（それに、バレそうになった瞬間に俺達の事もバラされて道連れにされたくは無いしな）

バレてたか。

（それで、彩の生活用具一式は何処に移動させたんだ？）

（天音の家だ。まあ鍵は無いから庭辺りに置くだけだが）

そこならなんとか見つからずに済むだろう。因みに彩の家は俺の家から近い。走れば一分ほどの距離にある。だから龍神もすぐに戻ってくるだろう。

「桐山。白上」

「ん？　神戸さん？」

「りゅーじん知らない？」

うっ。ごめん神戸さん。龍神は今ある重要なミッションの途中な

んだ。俺達の命がかかっている重要な。

「さあ？　多分、食料の買出しじゃないかな」

「そう」

少し悲しそうな顔をして、神戸さんはふらっ、と再び庭へと戻って行った。なんか神戸さんに悪い事したな。今度お詫びに龍神を生贄にささげよう。

「ねえ、大丈夫なの？」

今度は彩が話しかけてきた。

「大丈夫だ。安心しろ。荷物は別の所に移動させたから」

「そ、そっか」

ほっ、と彩は一安心する。その後、俺の部屋を一通り見学した紙絵さんだったが、結局何も出てこなかったようだ。そして時間が過ぎてゆき、ついに打ち上げもお開きとなった。

「幸助～。今日はありがとな～」

「また来るよ」

いや、来るな。にしても、今日はある意味とてつもなく疲れた。しかし何事も無く無事乗り切れてよかっ・・・・・・

「あ。そうだ幸助君。君の家の洗濯物の中に、こんな物があったん

だけど（ピラッ）」

紙絵さんが真上に掲げたのは、彩の制服のブラウス。他のみんなはそれが彩の物とは気づいていないのが幸いだ。

途端に男子共の警戒レベルが上がる。

しまった。洗濯物はノーマークだった。

「そ、それは・・・・・・」

まずい。この状況は非常にマズイ。

「それは？」

紙絵さんが興味深々と言った表情で見つめる。ええい！　もうこうなったらヤケクソだ！

「そ、それは・・・・・・！　俺のブラウスだあああ！！」

この日から、俺に女装趣味があるというような噂が流れ始めましたとさ。

第十四話　ショッピング／前編

「幸助」

リビングで宝探し大会優勝商品である旅行のせいで休日に出された鬼のような宿題と格闘していると、彩がどこかに出かけるような格好をして、話しかけてきた。

「ん？　なんだ彩？　・・・・・・って、その格好、どこかに出かけるのか？」

「うん。今日、ちょっと買い物に行って来るわ」

「買い物？」

「ん。ちょっとね」

買い物、か。

多分食材か何かなんじゃないのだろうか。女の子一人だと荷物を持ったりすると結構キツイかもな。

「だったら俺も行くよ」

「えっ！？」

なんだこの反応は。

「食材とかの買出しだろ？　荷物とか大変だろうからさ」

「あ、そ、そう。そうよ」

珍しく、彩にしては歯切れが悪い。何かマズイ事でも言ったのか？

「それじゃあ、俺も準備するからちょっと待っててくれ」

☆

俺と彩は、近くの大型ショッピングセンターへとやってきた。ここにはかなりの数の、様々な種類の店が揃っている。スーパーは勿論、例えば本屋、洋服屋、ゲームショップ、飲食店等も完備している。

「まずは何処に行く？」

今、俺と彩が居るのは大型ショッピングセンター内のの入り口付近にある案内板。この案内板にはショッピングセンター内の地図や、全ての店が描かれている。

そんな案内板と俺は今にらめっこしているのだが、問題はこのショッピングセンターの規模の大きさだ。

この大型ショッピングセンターは広く、大きいのだが、その分移動に時間がかかる。効率良く店を回らなければ無駄に時間をロスしてしまう。

「そ、そうね・・・・・」

彩はまだ何かを言いづらそうにしている。

そうだな。

折角こんな所に来たんだし、少しぶらぶらと歩いていくか。

「少し、店内を見回っていくか」

「ええっ！？」

彩が顔を真っ赤にして叫んだ。周囲の人の視線が一瞬、俺達二人に集まる。

「お、おいっ！　こんな所で大声なんか出すなよ」

「う、あ、ご、ごめん」

「それじゃ、行くぞ」

「う、うん・・・・・・」

☆

まず、俺と彩は二階へと足を運んだ。やはりどの店も近所の店よりもラインナップが充実している。どの店もかなりのお客さんが来ていた。とりあえずは適当に店を見て回る事にしてので、ほぼ素通りだ。

「はあ。そういえば沖縄旅行って来週だったよな」

「そうね。沖縄旅行って言ってもほぼ自由行動らしいし。ちゃんと集合場所に集まれば、問題無いわよね・・・・・・」

と、なにやら彩が確認するようにブツブツと呟く。

「集合場所は学園に朝九時。そして空港に十時着でそこから飛行機に乗って、沖縄に着くのが十一時。そこから自由行動でまずは・・・・・」

「よくもまあそんなに覚えてるな。俺なんか学園の集合時間ぐらいしか覚えてねえよ。なんだかんだで彩も楽しみなんだな。沖縄旅行」

その代わり俺は今、宿題と言う名の地獄に居るわけだが。

「べ、別に楽しみなんかじゃないわよ！」

と必死になって反論する彩。

「お、おう。そうなのか。なら別に行かなくても・・・・・・」

「行くっ！」

やっぱり行くのかよ。まあ、解ってたけどさ。なんだかんだで彩も結構楽しみにしてるって事は解ってたし。じゃないとあんなに必死になって宿題を瞬殺するわけが無い。

正直、宿題を終わらせようとしている彩は近寄りがたい雰囲気を纏っていた。締め切り直前の漫画家みたいな。

・・・・・・と、今ふと思うと、彩が来てから家事全般を彩がしてくれてるからな。宿題に家事と、彩に負担をかけっぱなしだ。逆に家事を手伝おうとしても「私がやるからいい」って言ってやらせてくれないし。家事を手伝えないのなら、この機会に一つプレゼントの一つでも買ってあげよう。

「あ、そうだ。俺、買う物あったから、彩はちょっと先に行っててくれ。買いたい物があったんだろ？」

「えっ？　あ、うん」

「よし、それじゃあ別行動な。後で連絡するから」

それだけ言い残し、俺は彩の元から駆け足で去っていった。

正直、「最近頑張ってくれてるから感謝の気持ちとして」みたいな感じで渡すプレゼントを選ぶなんて恥ずかしくて言えない。

☆

俺がまずプレゼントの第一候補として選んだのは、ぬいぐるみだ。

ぬいぐるみ専門店はこの大型ショッピングセンターの中にもあるが、今はそんなにお金を持っていないので、まずはＵＦＯキャッチャーで取ろうと計画したのだ。

ゲームコーナーに行くと、そこには様々なゲームが置いてあった。

アーケードゲームは勿論、お目当てのＵＦＯキャッチャーも完備されている。たまに嵐や龍神とゲームセンターに行くので割りとこういうのは得意だ。

さて、どのぬいぐるみを取ろうかと考えていると、ＵＦＯキャッチャーのコーナーの奥の方に、イルカのぬいぐるみがあるのを見かけた。

うん。あれにしよう。そして問題は、あのイルカのぬいぐるみを取れるのかどうかという事だ。現在の所持金は約五千円。食材を購入する事を考えると使えるのはせいぜい五百円か。

そして俺は、最初の百円をＵＦＯキャッチャーに投じた。

☆

彩は現在、先ほど幸助と居た二階よりも一階上の、三階の水着シ

ョップに居た。元々沖縄旅行に向けて水着を新しく買っておこうと思ったのだが、まさか幸助がついて来るとは思わなかった。幸助なりに気をつかったのだろうか。

最初、彩の返事の歯切れが悪かったのもこの為だ。自分が買う水着を選んでいる所なんて恥ずかしくてとても見られたくない。

なので、さっき幸助が急に別行動を提案した時には正直助かった。幸助は幸助で、それぞれ買う物があるのだろう。しかしゆっくりはしてられない。早く決めてしまわないと幸助からの連絡が来てしまう。

「どれにしようかな・・・・・・」

しかし、折角の沖縄旅行。それも幸助と旅行に行くのは初めてだ。中途半端に選びたくないという気持ちが強い。

そして、あれこれ悩んでいる彩の視界に、意外な人物を捉えた。

第十五話　ショッピング／後編（前書き）

これで色々と大変だった「宝探し大会編」が終了です。
次は（多分）ＳＳを挟んでから、「沖縄旅行編」が始まります。

第十五話　ショッピング／後編

ＵＦＯキャッチャーのアームが目的のイルカのぬいぐるみをつかむ。ゆっくり、ゆっくりとアームが移動し、そして、ようやくイルカのぬいぐるみをゲットした。

「ぎ、ギリギリ・・・・・・」

使ったのは丁度限度額の五百円。なんとか手に入れられて良かった。

「「取れてよかった」」

・・・・・・なんか聞いた事のある声と被ったような。

「「あれ？」」

隣のＵＦＯキャッチャーの台を振り返ると、なんと嵐が居た。手にはなにやらＵＦＯキャッチャーで取ったと思われる猫のぬいぐるみ。

どうやら考える事は同じだったようだ。

☆

「あれ？　直ちゃん？」

彩が視界に捉えたのは、中学の時の後輩であり、現在受験生の加古川直だ。こっそりと背後から直の元へと忍び寄る。

（ちょっと驚かせようかしら）

そして、直の肩をぽんっ、と軽く手を乗せ、

「彩？　直？」

「「うっひゃあああああああああああっ！？」」

なぜか、彩も同時にびっくりする。後ろを振り返ると、愛が彩の肩を軽く手を置いていた。

「あっ、あれ？　彩さん？　愛さん？　どうしてここに！？」

「あ、愛！？」

「二人とも、どうしてこんな所に？」

「「それはこっちのセリフなんだけど（なんですけど）……」」

☆

「まさか、幸助が居るとはな・・・・・・正直驚いた」

「そりゃこっちのセリフだ」

偶然出くわした俺と嵐はそれぞれのプレゼントを持って、とりあえず三階にある喫茶店に入った。さすがに高校生の男子二人がこんなファンシーなぬいぐるみを持って喫茶店に入るのは抵抗があるので、袋の中に詰めてある。

「つーかなんで嵐がここに？」

「俺が沖縄旅行の補習の宿題を必死に片付けていると、急に買い物に行ってくるとか言ってたからな。一人だと心配だし、一応ついてきたんだよ」

「このロリコン」

「地獄を見せてやろうか？」

とにかく、わざわざ買い物にやってきた理由は大体俺と同じだな。まだ鬼のような宿題が片付いていない所まで。

というか、嵐も過保護だよな。

まるで親子だ。いつまでも子供扱いじゃ、直ちゃんもかわいそうだよなあ。

「宿題も終わって、ようやく一段落したから良い気分転換になるしな」

「地獄を見せてやろうか？」

「何故だ！？」

俺は家に帰ったらまた宿題という名の地獄が待ち構えているのに、コイツは先に天国に逝ってしまったようだ。

この裏切り者がっ！

「で、なんでＵＦＯキャッチャーなんかしてたんだよ」

「ま、まあ。普段、直（アイツ）も頑張ってくれてるし（主に料理以外で）たまにはこれぐらいの物ぐらい渡してやろうと思って、な。そういう

お前は・・・・・・」

「お前と同じ」

やっぱり考える事は同じだ。すると、嵐が何やら店の外を見て、表情を変える。

「ん？」

「どうした？」

「あれ、龍神じゃねえか？」

そう言って嵐は店の外を指差す。嵐が指した先に居たのは、なにやらとてつもなく疲れている龍神だった。

☆

時は朝に遡る。龍神の家では今日も愛が朝食を作って、それを二人で食べていた時。

「りゅーじん」

「何？」

「今日、水着を買いに行ってくる」

「いってらっしゃい」

「・・・・・・」

「ッ！？　痛ったあああああああああああああああああ！？」

一瞬にして、目の前の席に座っている龍神の背後に回り、腕を締め上げる。何処で教わったのかは定かではない。

「心配じゃないの？」

「な、何が・・・・・・・」

「てい（ギリッ）」

「ぎゃあああああああああああああ！　し、心配です！　とても心配です！」

「なら、一緒に行こう？」

「・・・・・・まずは締め上げを解除してから（ギリギリギリ）ぎゃあああああああッ！！　行きます！　行かせていただきます！」

「それじゃ、すぐに準備してくる」

そういい残すと、愛はリビングから出て行き、支度を始めた。龍神は腕の痛みをこらえながら、仕方が無く準備を始めるのだった。

☆

「・・・・・・と、言うわけさ。僕も結構苦労しているだろ？」

「「お前が悪い」」

「え？　いやいやいや。僕は何も・・・・・・」

「「お前が悪い」」

喫茶店の中で、龍神はやれやれと言った顔で話し終えたのを、俺と嵐で一蹴する。つーかコイツは本当にバカだろ。鈍感にも程がある。こりゃあ嵐並みだぞ。

「君にだけは言われたくない」

「は？」

「全くだ」

「え？」

どうして俺の心はそう簡単に読まれるのだろうか。

「あれ？　龍神どうしたんだ？　その袋」

今気がついたが、龍神の手には一つの何かが入れられている袋。心なしか、俺と嵐の持つ袋と似ている。

「これ？　・・・・・・普段、家の事を愛ちゃんが色々としてくれてるから（命の危機をも現してるけど）お礼にと思って」

「「お前もか」」

なぜか今日はＵＦＯキャッチャーが人気のようだ。

☆

俺達はその後、それぞれの集合場所に別れ、帰宅した。家では現在、彩が夕食を作ってくれている。今日ぐらい俺が作ろうかと思ったのだが、真っ赤な顔をして拒否されたので仕方が無い。

「っと、危うく忘れる所だった・・・・・・なあ。彩」

「ん～？　何？　今夕食作ってるんだけど」

「いいからちょっと来てくれよ」

「ったく。早く済ませてよね」

料理を中断し、なんやかんやで来てくれる彩。

「で、何？」

「えっと、今日ちょっと取ってきたんだけど・・・・・・」

ガサゴソと袋の中から今日取ってきたイルカのぬいぐるみを差し出す。

「な、何コレ？」

「いや、お前が家に来てから家事の事とかお前に任せっぱなしだから、お礼に、よ」

くそっ。なんかこういう事言うのって恥ずかしいな。

「・・・・・・」

「まあ、金が無かったからＵＦＯキャッチャーで取ってきたような物だが・・・・・・って、やっぱ気に入らなかったか？」

「へっ！？　い、いや！？　ま、まあ受け取ってあげるわよ！」

バッ！　と俺の手からぬいぐるみが一瞬にして消える。というより、彩が奪い取る（元々渡すつもりだったから奪い取るという言い方も変だが）。まあ、気に入ってもらえてなによりだ。

「そういえば、お前は今日は何を買ってたんだ？」

「っ！？」

な、なんだ。急に顔が真っ赤になっていくぞ！？

「い、いいい、言う必要があるわけ！？」

そのまま彩はぬいぐるみを持ったまま再びキッチンへと姿を消した。

（新しい水着を買いに行ってきたなんて言えるわけないじゃない・・・・・！）

彩は何か呟いたようだが、そのセリフは聞こえなかった。

沖縄旅行は来週だ。

俺はさっそく、鬼のような宿題に取り掛かった。アイツ等との、

コイツとの沖縄旅行を楽しむために。

第十五話　ショッピング／後編（後書き）

この「ショッピング」は一話にまとめようとしたのですが、長くなったので二話に分けました。

俺とメイドさんのロケ地巡り／前編（前書き）

仮○ライダーオーズ最終回記念！（笑）
一年間おつかれさまでした。

※この作品はフィクションです。実際の人物、団体とは一切関係ありません。念のため。

俺とメイドさんのロケ地巡り／前編

生徒会長、祭盛人（まつりせいと）は、現在自宅にこもっていた。
学園の天才生徒会長と称される祭の事だ。おそらく難解な問題か、もしくは勉学に勤しむか、それとも生徒会の重要な案件を抱え込んでいて頭を悩ませているとか、・・・・・・『そんな事では無い』。

「・・・・・・完成だ！　MG（マスターグレード）百分の一ダ○ルオークアンタ！」

簡単に言えば、ガ○プラを作っていた。
しかも細部にまで塗装を入れ、ウェザリングまで施すという気合の入りっぷり。
天才生徒会長は学園のオタク達の頂点、『パソコン研究会』、通称『P研』の部長を務めていた。
今、祭が居るのは自室、では無く『製作ブース』という場所で、周囲には大量のガ○プラが棚に飾られていた。

「よーし次はもう一つ組み立ててクアンタムバースト版を作ってるぞっ！」

と、祭が意気揚々と二箱目に手を伸ばそうとした瞬間、コンコン、とドアをノックする音が聞こえた。

「ん～？　明（めい）？」

「あ、はい祭さん少しお伝えしたい事が・・・・・・って、なんでまだ名前を言ってないのに解るんですか！？」

驚きながら、祭家に仕えるメイドの明（めい）が『製作ブース』に入って

きた。そのメイドさんは祭と同年代の、メイド服に身を包んだ胸の大きな美少女だった。
明はこの家のメイドとして、そしてまたは祭の幼馴染みとして幼少期からこの屋敷に居る。祭と同年代、という事もあり、同じ学校に進級し続け、学校では同じように過ごし、祭に仕えてきた。

「なんでって、ノックする時のドアを叩く時の手のリズム、力加減が明だったから」

「そ、そんな事が解るんですか・・・・・・」

祭の天才ぶりにいつも驚かされている明だったが、それはそうと、と調子を戻す。幼少期からずっと祭の側に居るだけあって、その辺りは恐らく慣れてるからなのだろう。

「で、伝えたい事って？」

「えっと、」

明は少し間を置いて、そして深呼吸してから、言う。

「なんでも、屋敷の者がみんな一泊二日の旅行に行くとか何とかで屋敷を離れるそうです」

「知ってる。だって俺が言ったんだし」

「ええっ！？」

明は初耳だった。
そもそも、明と祭を覗いた屋敷の人間全てが一泊二日の旅行に行

く、なんて事を聞いたのも、今日の朝が初めてだ。

「っつーか、明。お前も聞いてなかったのか？　屋敷の使用人は全員休暇の旅行に行けって言っておいたんだけど」

「えっと・・・・・・その事なんですが、執事長のカルヴァンさんが『祭坊ちゃんを一人にするのは心配だからお前が着いていなさい』と言われて・・・・・・」

カルヴァン、というのはこの家に古くから仕えているこの家の執事の長の名前だ。（祭は爺と言っている）

そしてカルヴァンから朝、祭の事を言いつけられた際に、なぜか「頑張りなさい」と言われて、ウィンクされたのは祭には秘密だ。

「ええっ！？　爺のヤツ、まだ俺を子供扱いしてるなあ。なんか悪いな、明」

「い、いいえっ！　とんでもございません！」

ぶんぶんぶん！　と勢い良く首を横に振りながら否定する。

「あ、そういえばもうすぐ仮〇ライダーオーズの最終回じゃねーか！　やべっもうすぐ始まるっ！」

それだけ言い残して、祭は『製作ブース』を飛び出し、リビングと消えていった。一人室内に立ち尽くす明。

そこで、一人きりになった室内でふと、考える。

（そういえば、今日は私と祭さんの二人きり・・・・・・？）

今更ながらその事実に気づく明。
そこで。

『頑張りなさい』

と、カルヴァンの一言を思い出す。

「・・・・・・い、いやいやいや！　別に私はっ、それに私はメイドさんだしっ・・・・・・・・！　し、しかも頑張るってなにを・・・・・・」

残された部屋で一人真っ赤になって否定する。しかし、いくらメイドさんといえどもそこは恋する一人の乙女。恋心という感情は隠しきれない。問題は、その隠しきれない感情を祭（あいて）が理解してくれるのかどうかだが。

☆

「終わったー・・・・・・・」

祭は燃え尽きていた。
それというのも、今見ていた特撮ドラマの最終回が終わったからだ。画面には、去ってゆく主人公とその相棒の後姿と『一年間応援ありがとうございました』という文字が躍っている。
因みに祭のいくつか所有する内の一室は、特撮ヒーロー物のグッズで一杯だ。そして、燃え尽きている祭を、後ろから明はぽーっ、としながら見ていた。

（今日は祭さんと二人きり・・・・・・今日は祭さんと二人きり・・・・・・今日は祭さんと二人きり・・・・・・今日は祭さんと二人

きり・・・・・・今日は祭さんと二人きり・・・・・・）

どうやら今は混乱中のようだが。元々祭は顔はイケメンなので、メイドである前に一人の少女である明が惚れてしまうのも無理はない。

そもそも、幼少期から一緒に居る分、外見だけでなく内面もしっかりと見据えている明なので、惚れてしまうのはなおさらだ。

「・・・・・・よし、行こう！」

と燃え尽きていた祭は一瞬にして復活し、ソファから立ち上がる。同時に、明も我に帰る。

「はうっ、え、えっと、行くってどこにですか？」

「クスクシエ」

「は？」

ワケの解らないような、それでいて聞いた事のあるような単語が飛び出してきて少し混乱する明。

「ほら、あれだよ！　仮〇ライダーオーズの中に出てきた多国籍料理店の名前！」

「あ、な、なんかそんな感じの名前の料理屋さん、出てきてましたね」

毎週かかさず見てる祭と共になんとなく見ていたので、祭の説明を理解する明。

「って行く？」

「そう！　クスクシエのロケ地へ行く！」

「ええ――――っ！？」

『思い立ったらすぐ行動』というのがポリシーの祭。その後の行動は、明は呆然として見ていた。祭は携帯で最終回を迎えた特撮ドラマのロケ地を調べ上げ、そしてルートを調べ上げ、移動手段をチャーターした。

あまりにも迅速すぎる行動で明はそれらが一瞬の出来事のように思えた。

「よーし、この際、クスクシエだけじゃなくて、仮〇ライダーオーズのロケ地を複数巡るぞ！　最初はクスクシエのある埼玉県越谷市だ！」

「えっ、ええ！？」

更に向かうロケ地が増えてとまどう明。最初に向かうのはなんと埼玉県と来たものだ。もはや開いた口が塞がらなかった。

「よし、それじゃあ出発するから早く明も着替えろよ！」

どうやら明の参加も決定しているようで、そのまま祭は自室へと消えていった。明はようやく我に帰ると、ため息をつきながら準備を始めた。

「ううっ・・・・・・せっかく二人きりで過ごせると思ったのに・・

・・・・・」

恋する乙女の呟きは、意気揚々と準備する祭には届かなかった。

俺とメイドさんのロケ地巡り／前編（後書き）

祭が出てくるとどうしてもこういうネタが増える。
まあ書いてる方は楽しいんですけどね（笑）
・・・・・・え？　楽しくない？　ですよねー・・・・・・・・・（´・ω・、）

俺とメイドさんのロケ地巡り／中編（前書き）

※この作品はフィクションです。実際の人物、団体とは一切関係ありません。念のため。

俺とメイドさんのロケ地巡り／中編

埼玉県越谷市（さいたまけんこしがやし）。

埼玉県の南東部にある人口約三十二万人の町で、埼玉県では人口第五位にあたる市だ。

そんな越谷市の街中を、祭と明は歩いていた。埼玉県までは、電車で来た。当初はリムジンを使ってここまで来る予定だったのだが、祭の気が変わったようで、急に電車に乗って行こう、と言い出したのでキャンセル。

電車を乗り継いで来たのだ。

「えっと、この辺りなんだけど・・・・・・」

今日の朝に放送が終了した特撮ドラマのロケ地へと足を運んだ祭と明。電車の二人旅で緊張度ＭＡＸになった明と、大好きな特撮ドラマのロケ地へと赴いた祭。形は違えど、それぞれ気分的には晴れやかだ。

（祭さんと、ふ、ふふふ、二人旅。ううっ。緊張する・・・・・・）

（もうすぐあの『クスクシエ』か。緊張する・・・・・・）

互いに別の意味で緊張する二人であった。トコトコと沈黙したまま、町の景色を楽しみながら二人は歩く。そして、風にパタパタとあおられるイタリアの国旗が二人の目に飛び込んできた。目的地だ。

「おおっ！　あれだあれ！」

祭ははしゃぎながら目的地のロケが行われた建物へと駆け出す。明の気持ちも少なからず高揚する。なんとなくとはいえ、見ていたテレビの中に実際に登場した建物が今、目の前にあるのだから。

そして、明の眼前に居る、はしゃぐ祭はまるで小さな子供のようだ。パシャパシャと一眼レフのカメラでロケ地を撮りまくっている。

「ＥＤで後藤さん達がここに集まるんだよなー！　畜生！　千回記念のＴシャツ欲しかったあああああ！」

テンションＭＡＸの祭を、ほほえましい目で見ている明なのであった。

☆

「もう満足ですよね？　さっ。帰りましょう」

確かに最初の方は感動もしていたものの、さすがに三十分も見続ければその感動も薄れてきたのか、明が帰宅を促す。

「まだ」

「ええっ！？」

「複数回ろうって言ったじゃん！　次は『鴻上生体研究所』のロケ地、『埼玉県立大学』だ！」

「ええ――――っ！？」

再び移動。今度の移動手段はタクシーだ。

☆

「今度は大学ですか・・・・・・」

「おう！」

意気揚々と、今度は『埼玉県立大学』へと足を運んだ二人。祭のテンションは高く、逆に明のテンションは少し低い。

「埼玉県立大学は『人間の尊厳に立って、保健・医療・福祉の専門的知識と技術を教授するとともに、それぞれの分野が連携して人々の健康を統合的に支えることを通じ、共生社会に貢献できる人材を育成する。』を教育理念としている大学なんだ。しかも、今まで色んなドラマのロケにも使われてきたんだぜ」

「そ、そうなのですか？」

「おう！　例えば、最近のドラマだと『ブルドクター』や『ＢＯＳＳ』、『のだめ』、『ＳＰ』。映画だと『デ○ノート　Ｌ　ｃｈａｎｇｅ　ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』とか、しかも『仮○ライダーＷ』のロケにも使われていたんだっ！！」

テンションが更に上がりまくる祭。周囲の学生が「なんだなんだ」という好奇心の目で祭を見ている。ついでに「あの子可愛くね？胸でかくね？」という目で明を見ている。

「ま、祭さん！　解りましたからっ！　だからもう少し静かにっ！」

「よーし！　再来年はここを受けるぞー！　俺もここでガ○アメモリを作るんだ！」

「そ、そんな動機で受験する大学を決めないでくださいっ！　それにそんな物は作れませんっ！」

二人は揃って大声を出して、周囲の学生の注目を集めるのだった。その後、祭が元々話しをつけていたらしく、時間制限付きで大学の中を見学していった。祭はテンションを上げて周囲を撮りまくっている。

「ああっもう！　そろそろ時間ですよ！　さっ。帰りましょう！」

「やだ。まだまわる」

「ええ――――っ！？　ま、まだまわるんですか！？」

「次は『東京都渋谷区』にある『鴻上ファウンデーション』だ！」

「逆方向じゃないですかあああああああああああああああああ！！」

そして再び電車に乗車する二人であった。天才わがまま生徒会長のご主人様に仕えるメイドさんの苦労はまだまだ終わらない。

☆

ガタンガタン、と電車が揺れる。遅めの昼食をとった二人は現在電車の中で揺られていた。祭の目の前の席で、明はメモ帳とボールペンを片手になにやら悩んでいる。

「ん？　どうした明？」

「えっと、『宝探し大会』の準備ですよ。ヒントを考えているんです」

「ふ～ん。大変だな」

「祭さんが考えてくれって言ったんじゃないですか！」

「お、おうっ。そうだったな」

（も、もう忘れてる・・・・・つい昨日の事なのに・・・・・・しかも自分が考えたイベントなのに・・・・・・）

思わず膝から崩れ落ちそうになるが、あれこれ考えても仕方が無い。明は再びペンを握る。

（でも頑張らなきゃ。これも祭さんのお手伝いなんだから。にしてもなかなかこれといったヒントが浮かばない。しかも二つ目ってこじつけすぎるし・・・・・三つ目なんかさっぱり浮かばないし。う～～～～！）

悩みに悩んでいる明を見かねて、祭が明の隣に座り込む。

「はうっ！？」

「ん～。やっぱ俺がやろうか？」

「あわわわわわわわわわわわわわわわわわわわっ！！」

急に隣に祭が来た事で、パニックになる明。しかも距離が近い分

どんどん心臓の鼓動が高くなっていく。
しかしそこはやはりメイドさん。ご主人様に迷惑をかけないようになんとか言葉を搾り出す。

「い、いえっ！　だだだ、大丈夫ですっ！」

「そうか？」

そう言って祭は明の前の席へと戻っていく。しかし明のパニックは収まらない。

（うわわわわわっ。も、もうさっさと作ってしまいましょうっ！　えっと、ああっ、もう。『ネタ切れなう』でいいやっ！）

そう言って、『ネタ切れなう』という言葉と共に最後のヒントを殴り書きする明。その瞬間、電車は東京都へと入っていった。

☆

東京都渋谷区にある山野美容専門学校。そこに、祭と明は足を運んでいった。時刻は現在午後四時半。ここも、祭が話をつけていたらしく、再び時間制限付きですんなりと見学を許可された。祭は一通り中を見学＆撮影した後、今度は屋上へとやってきた。

「ここが今日の最終回で会長が映司に十枚目のタトバコンボを渡し……」

「あの、疲れたんでそろそろ帰りましょう？」

もうかれこれ三十分は語り続けている祭に、明はそろそろストッ

プをかける。

「ん？　あ～、もうこんな時間か。じゃあそろそろ帰ろうかな」

「そうですか・・・・・・」

ようやく帰る事になってとりあえず一安心する明。

しかし。

「そういえば今日は俺と明の二人きりだったな～」

「はっ！！」

その事実を思い出し、そして急に顔が真っ赤に紅くなっていく明。

（そそそ、そういえばどうしようっ！　二人きり！　わ、わわわわわわ・・・・・・）

「よ～し、帰るか帰るか」

「い、いやっ！　まだ時間がありますし、もう少しまわっていきませんか！？」

と、なんとか帰りを引き伸ばそうとするが祭ももう満足なのか、

「やだ」

と一蹴。

「ええ――――――！？」

俺とメイドさんのロケ地巡り／中編（後書き）

なんか今回はかなり遊んだ気がする。
それと、今回の話は「沖縄旅行編」へ向けての練習をかねた話です。
色々と調べるのが大変だった・・・・・・

次でラスト！　「後編」へと続く！

祭の思いつきで、今日の朝最終回を迎えた特撮ドラマのロケ地を巡る旅に付き合わされた明だったが、今更ながらロケ地巡りを続けていた方が良かったと思う明。

（どうしようどうしよう・・・・・・こ、今夜は二人っきり・・・・・・どうしようどうしよう・・・・・・・・）

頭の中はもはや爆発寸前だ。そんな明をよそに祭は気楽に自宅のドアをバンッ、と開け放つ。

「たっだいま～。って誰も居ないか」

自宅に足を踏み入れた瞬間、ポケットから祭の携帯に着信が入る。祭は携帯を取り出し、メールボックスを開く。メールは、新聞部期待の新入生にして副部長の紙絵莉子（かみえりこ）からだった。

「ん～？　オッケーっと」

ピピピッ、とタッチパネルのキーを軽快に打ち、返信を終える祭。

「明～？」

「どうしようどうしようどうし・・・・・・はっ。な、なんでしょう？」

祭の声ではっ、と我に帰る明。

「今から莉子が来るから」

「ええっ！？」

莉子、というのは勿論紙絵莉子の事だ。明もそれは知っている。前々から祭の家によく取材を行いに来る、新聞部の一年生にして副部長を務める少女だ。自分という少女が家に居ながら、他の少女も家に招き入れるという事になんだかずーんと落ち込む明。

（それに、なんだかあの子苦手なんですよね。なんでも見透かしてる感じがするっていうか……）

そういった理由に加え、祭と楽しげに話している紙絵を見ていると、明はいつもはらはらしているので、正直明は莉子が苦手だ。

「まっつりさーん！　来ましたよー！」

メールを返信してから十分も立たないうちに、莉子が家にやってきた。

☆

「来たか」

「はい！　例のアレが手に入ったって聞いて、飛んできました！」

莉子なら記事のネタの為には本当に空を飛んできそうで恐いと思う明。

「例のアレなら俺の部屋にあるぜ」

「ほほう」

「それじゃあ来てくれよ」

「了解☆」

二人はなにやらフフフ、と笑みを浮かべながら祭は莉子を自分の部屋へと招き入れる。パタン、とドアが閉まり、そして明の頭の中はというと、

（へ、へへへ、部屋！？　二人っきりで部屋にいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！？）

もはや爆発寸前どころか爆発していた。今までも、莉子がこの家に来ることは何回かあった。しかし大体は自分も付き添いで居たわけで、二人きり、というシチュエーションは無かった。密室に男と女が二人きり。うろうろうろと祭の部屋の前で悩む、恋するメイドさん。

（うう～。気になるっ！　気になる――――！）

気になるが、勝手に部屋に上がりこむのはどうかと自分の中のメイドさんとしての心構え的な事と葛藤する。

戦況は現在長いメイド経験から生み出されたメイドさんとしての心構え的な感情が勝って、恋心を押している。

が。

「おおっ！　これはっ！」

「フッフッフッ。いいだろ。特別だぜ？」

「ああ～！　いいなあ！　私も行きたかったなあ！」

と、なんとも楽しそうな声がドアから響いてきた。

「～～～～ッ！！」

もはや我慢の限界。恋する乙女の恋心が、長いメイド経験を上回った瞬間だった。すぐさまメイド服に着替えて、ドアの前にスダンバイする明。

因みに、私服からメイド服に着替えるまでの時間は約二秒。これぐらいの事はメイドさんにとっては必須（？）のスキルだ。

（ちょっとだけ・・・・・ちょっとだけなら・・・・・）

そっと、ドアを気配を消して、気づかれないように、少しだけ開ける。気配を消す、という技術はメイドさんには必須（？）のスキルだ。そして中の様子を探ろうとした瞬間、ガチャッ、とドアが開いた。ゴツン、と額にドアの角をぶつける。

「いたっ」

「おや？」

莉子が部屋の中から出てきたのだ。ドアが遠慮なく開かれたので、おもわず床に転がる明。

「あれ？　明さんじゃないですか。そこで何をしてるんですか？」

きょとんとした様子で床に転んでいる明を見て当然の疑問を投げかける莉子。

「えっ？　えっと、その、」

「覗き見しようとしてました☆」なんて言えるわけもなく、返答に困る明。

「あ、解った。あれでしょ？　『ドジっ子メイド明ちゃん☆』的なキャラを狙ってるんですよね？」

「ち、ちちち、違います！」とすぐに否定したい明だったが、『覗き見メイド』よりも『ドジっ子メイド明ちゃん☆』の方がまだマシか、という心もあるので、再び返答に困る。

「う～・・・・・・あ～・・・・・・・そ、そうです」

もはや選択肢は無かった。

「最高です！」

明にはもう莉子の考えてる事が全く理解不能だ。

「あの、今度是非取材をっ・・・・・・・！　『ドジっ子メイド明ちゃん☆』を連載形式で写真を載せれば・・・・・・売り上げアップ間違い無しっ！」

さっきからチラチラと明の胸を見ながらうずうずとした様子でカメラを構える莉子。なぜだかこのオファーを受けたら自分はタダでは帰れないような気がしてならない明。

ぐへへへと邪悪な笑みを浮かべながらカメラを持って明に迫る莉子の頭に、ペチッ、と祭の手刀がヒットする。

「いたっ」

「ウチの幼馴染みを変な目で見るなって。用は済んだんだろ？」

「イタタタ。もうっ。冗談ですよ☆」

「「嘘つけ（ですよね）」」

祭と明のダブル否定を受ける莉子。そして莉子はにこっ、と満足そうに笑うと、トタトタと下の階へと降りていく。

「じゃあ祭さん。今回のコレは助かりました」

「そうか。良い記事、期待してるぞ」

「まかせてください☆」

「へっ？　記事？」

「？　そうですよ～」

そう言って莉子はごそごそとポケットからＳＤカードを取りだす。

「今日、祭さんと明さんがまわった仮〇ライダーオーズのロケ地の画像が手に入ったっていうので、『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』の『仮〇ライダーオーズ最終回記念号』に載せて頂こうかと。・・・・・・勿論、『裏』の方ですが☆」

なんでも、最近新聞部は教師にばれないように新聞の『裏』の記事を隠すための偽造が達者になったという噂と、莉子の関係性を否定できない明であった。

「それでは、私はどうやらお邪魔なようですし、これで退散☆」

祭と明を交互に見て、いたずらっ子のような笑みを浮かべてそれだけ言い残して、莉子は去っていった。

まるで嵐が通り過ぎたかのような虚脱感に襲われる明。

「はあ。なんだ。思い過ごしか……」

ぺたんと床に座り込む明。

「ん？　どうした明？」

「あ、いえ。なんでもございません（なんだか前回一年生が一気に泊まりに来た時ぐらいから、結構あわただしくなっている気がします・・・・・・）

そして明は、ふとさっきの祭の言葉を思い出す。

『ウチの幼馴染みを変な目で見るなって。用は済んだんだろ？』

（幼馴染み、か・・・・・・ふふっ）

何気に、自分の事を『メイド』では無く、『幼馴染み』と呼んでくれたのが嬉しかったのだ。

（そういでばいつからだろう。祭さんに敬語を使うようになったのって。幼馴染みとしてでは無く、メイドとして仕える事になったのって）

「・・・・・・そういえば、あいつ等ももうすぐ帰ってくるんだよな」

祭がふと、呟く。

「はうっ。そ、そうですね」

思い出に浸る明は、一気に我に帰る。『あいつ等』というのは勿論この屋敷の使用人達だ。

「お前ともそうだけど、あいつ等もずっと俺と一緒だったよな」

「そうですね。祭さんが生まれる前からずっとこのお屋敷で働いている人も居ますし」

「ふーん・・・・・・ずっと、ね」

何か思い立ったかのように祭は携帯を操作し、電話をかける。

「あ。もしもしカルヴァン？　あのさあ、旅行の延長決定な。えっ？　急にどうしたって？　いや、考えてみたらずっと働いてばっかりだったなと思ってたまには長期休暇も必要だろ？　は？　別にいい？　無理。決定事項だから。一、二年ぐらいは自由に遊べよ～じゃあな～」

一方的に通話を切る祭。祭の話す言葉だけで、大体の内容はつか

めた。それはつまり、

（わ、私と祭さんが、いいい、一、二年はふふふ、二人きりで生活するって事ですか！？）

少し違うがもはや爆発どころでは無くなった明の脳内。

そんな明の脳内事情を知らずに祭は明の方にくるりと振り返り、

「明もいいぞ。遊んできても。考えて見りゃあ、ずっと俺のわがままに付き合いっぱなしだもんな」

祭はそう言うが、明は首を横に振る。

「・・・・・・いえ。私は祭さんのメイドですから。ご一緒させていただきます」

にこっ、と微笑んで明は言う。

（そうだ。私はメイドなんだから。ご主人様と一緒に居たいと思うのはあたりまえなんだ）

そして、祭は優しく微笑む。

「そうか」

と、ただ一言、呟いた。

たとえわがままな天才生徒会長でも、優しい所もあるのを、明は知っている。

だからこそ、たとえあちこちに連れて行かれても、仕え続ける事が出来る。

（・・・・・ううっ。緊張する。これからちゃんとやっていけるのでしょうか。だ、だって私と祭さんのふ、ふふふ、二人きりだし・・・・・・それにそれに・・・・・・以下略）

こうして、天才生徒会長とメイドさんの共同生活が幕を開けたのだった。

俺とメイドさんのロケ地巡り／後編（後書き）

今回は長かった・・・・・・
正直まとまるか不安でした。
因みに、これは前編、中編、後編、三本まとめて一つのエピソードです。

描きたかったのは「祭のどんなわがままにもなんだかんだで付き合う明」です。

長くなったので三つに分けましたが・・・・・・

最終的に二人きりで共同生活を始める事になりましたが（笑）

タイトルの幼馴染『み』の意味が無くなるぞこれ・・・・・・

因みに、この作品では『幼馴染』を『幼馴染み』と書いていますが、これは幸助、嵐、龍神の『3』人（3→み）が幼馴染と共同生活を行うから、「幼馴染み」という風に書きました。

さて、今回はこの辺りで終わって、新章突入！

別のエピソードはまた次のＳＳで！

まだあるのかよ（笑）

第一話　大富豪（前書き）

第二章「沖縄旅行編」スタート！

第一話　大富豪

ついに沖縄旅行当日。俺はなんとかあの地獄のような宿題の山を片付けた。宿題が終わった時にはもう既に燃え尽きていたが。

ちなみに沖縄までは飛行機で移動。なんでも祭さんの家の自家用機だそうだ。現在は、フライトの真っ最中。

機内は一年四組のメンバーや、それぞれのクラスメイト達の招待した人達で一杯だ。ただ、その招待した人の大半が彼女、彼氏というのがなんかこう、イラッとくる。

因みに、嵐は直ちゃんを招待したらしい。今は月曜日だが、学校の方は大丈夫なのだろうかと最初は心配したが、偶然にも開校記念日だったそうだ。

「や、やっぱり高いわね」

彩がチラリと窓の外を見て呟く。多分、飛行機に乗るのは初めてなのかもしれない。

ぶっちゃけ俺も初めてだ。親は俺を放ってボランティア活動ばっかりしてるし。恐らく今頃は関東大震災の瓦礫撤去の活動にでも勤しんでいるのかもしれない。

「恐いのか？」

「ち、違うわよっ！　ただ言ってみただけよっ！」

「おやおや。新婚旅行先でも喧嘩ですか～？　仲がよろしいですね☆」

と紙絵さんがからかってくる。

「し、ししし、新婚!?　ななな、何言ってるのよ!?」

「あっはっは。やっぱ彩はからかいがいがあるな☆」

もはや彩は紙絵さんのおもちゃだ。真っ赤になりながら食いついてくる彩を紙絵さんはひらりとかわす。

「つーかお前ら、もう少し静かにしろよ」

「ううっ」

「てへっ☆」

そう言って両者静かにし、席に座りなおす。やれやれ。この調子じゃあ沖縄に着いたらどうなるか予測できたもんじゃねえな。

「いやあ～、これじゃあ行き先でどうなるか解ったもんじゃねえよな～」

「いや、ホントにそうだ……って、え?」

くるり、と声のした方を振り返ると、そこには当然のごとく機内に居座っている祭さんと、その隣に明さんが居た。

「祭さん!?」

「授業がめんどくさいから一緒に旅行に来ちゃった☆てへぺろ☆」

「それってアリですか……いや、もう良いですけど」

なんかもう、祭さんのこういう所はなんか慣れた。それに祭さんにとっては確かに学校の授業なんて物は簡単すぎてめんどくさくなるのかもしれない。

気がつくと、祭さんはなにやら紙絵さんと、日曜に最終回を迎えた特撮ドラマについて熱く語り合っている。

俺はため息をつき、嵐達の大富豪に混じる事にした。

☆

大富豪は、とても白熱した物と・・・・・ならなかった。なんやかんやで彩、直ちゃん、神戸さんの三人の女性陣が強すぎて、男性陣が全く歯が立たず、いつも俺、嵐、龍神の三つ巴となってしまう。

「あんた達弱すぎ」

いや、お前達が強すぎるだけだ。

「ほうほう。なにやら面白そうな事やってるじゃん？」

ひょいっ、と俺の席の真上から顔を覗かせたのは、祭さんと紙絵さんだ。

「あはは。どうやら男子陣が大敗してるようだね？」

「しょうがないだろ紙絵さん。女子が強すぎるんだよ」

すると祭さんはにやりと笑い、

「それってもしかして、緊張感が無いからじゃねーか？」

「緊張感？」

「ん～。確かにそうかも。もう少し緊張感を持ってやれば、違った結果になるかもよ？」

紙絵さんもなにやらニヤニヤしながら同調する。

「緊張感って言っても、どうやって持たせるんだ？　そもそもこれはあくまでもお遊びだから緊張感も何も・・・・・・」

「じゃあ、次負けたら、なんでも言う事を一つ聞くって事でいいじゃん？」

その紙絵さんの言葉を聞いた瞬間、ぴくんっ、と女子陣がなにやら反応した、ような気がした。

「は、はあ？　ちょっと待て、それはどういう・・・・・・」

「さあ、やるわよ幸助。さっきビリはアンタなんだから、さっさとカードを配りなさい！」

「あ、彩！？」

「今度も負けませんからね。嵐さん」

「待て、直。今度ぐらいは負けてくれ。っつーか、本当にやるのか！？」

「勿論です！」

「りゅーじん。この勝負は必ず勝つ」

「ちょっと待って愛ちゃん。さっきもボロ勝ちだったよね？　一抜けしたよね？　余計に気合を入れられても困るんだけど！？」

ダメだ。これはもはやさっきの条件付けの勝負が確定しているような物だ。

「じゃ、頑張ってね☆」

「あっはっは。大変だなお前ら。頑張れよ～」

爆弾を投げるだけ投げて、そのまま紙絵さんと祭さんは席を離れた。

「しょうがないから、こっちは十勝したら勝ちで、そっちは一勝でいいわよ」

一発勝負だったら諦める所だったが、これはなめられた物だ。

「なめんなよ。男の意地を見せてやるッ！！」

「ちょいとバカにされたみたいで悔しいな」

「この言葉、後悔させてあげるよ」

ルールは、男子陣、女子陣の内、どちらのチームが全員先にあがれるかで勝敗を競う変則大富豪が幕を開けた。

彩のヤツ、後でほえ面かくなよ！

～大富豪中～

「これで九勝目ね」

「あの、彩さん。いえ、彩様。やっぱりあの条件は無しにしてもらえないでしょうか？（土下座）」

「却下」

「ああっ！　そんな！　慈悲を！　お慈悲をおおおおおおおおおおお！」

あっけなく九連敗。しかもこっちが一人も抜けられずにときた。

「くそ！　嵐！　なんであの時いきなり『2』を出したんだよ！　あっさり『ＪＯＫＥＲ』で返されて抜けられちまったじゃねえか！」

「あの時は行けると思ったんだよ！」

「そのままあっさり逝ってんじゃねえええええええええええええええ！」

俺達のそんなやりとりを見ている彩がじろっ、と俺をにらむ。

「さ、早く始めましょ。どうせ最後だし」

「くっ・・・・・・！」

ダメだ。こうなったら仕方が無い。この手だけは使いたくなかったが、背に腹はかえられない。

俺はチラリと嵐とアイコンタクトを取り、カードを配るフリをして、嵐がカバンからこっそりと取り出したイカサマカードを、嵐、龍神と共にこっそりと入れ替える。これは嵐と龍神とトランプをする時に、よく俺達が使う手だ。

いわゆるイカサマというヤツだが仕方が無い。

・・・・・だってコイツに「なんでも一つという事をきく」なんて特権を与えたらこき使われるのが目に見えてるもん！（泣）

イカサマは嵐も龍神もよく使うので、もはや俺達のトランプはイカサマ合戦という物になっているが。

そしてもうすぐ入れ替え作業が終わる、という所で――――

「ストップ」

ガシッ、と上腕を彩につかまれた。

「これ、何？」

ギリギリとつかむ力が強くなる。

「痛い痛い痛い！」

そしてぽろぽろと入れ替えカードが落ちていく。隣を見てみると、嵐も龍神も同じような状況だ。

「バレバレなのよ」

「ずるいです。嵐さん」

「りゅーじん。後でおしおきだよ？」

こんな時、か弱い男がしなければいけない事を、俺は知っている。

「「「ごめんなさい（土下座）」」」

渾身の土下座（せいいい）を見せる事だ。

プライド？　恥？　外聞？　そんな物、とっくの昔に捨てている。

そしてその後、俺達はあっさりと瞬殺されましたとさ。

第二話　魔王様と行くＯＫＩＮＡＷＡ地獄巡りツアー☆

空港に着いた。飛行機から降りると沖縄の陽射しが俺達を歓迎するかのように照り付けてくる。
そこまでは、良い。
しかし問題はこの後だ。
俺達は機内で行われたトランプで負けた事により、女子達の言いなりの奴隷と化している。もはや俺達にとってこれは旅行ではなく『魔王様と行くＯＫＩＮＡＷＡ地獄巡りツアー☆』だ。

「誰が魔王様だって？」

「痛い痛い痛い！！　腕が！　腕があああああああああああああああああああッ！！」

俺の右腕がメキメキと不吉な音を立てている。彩が片手で握りつぶそうとしているからだ。
つーか、ここ最近俺の頭の中が完全に読まれているのはどういう事だ。もしや彩はついに純粋種のイノ○イターへの変革を完全に果たしたのか！？

「だったら彩を倒せば俺の有用性は不動の物とな『誰を倒すって？』ぎゃあああああああああああああああああああああああ！！」

人の腕を握りつぶすのはダメ！　ゼッタイ！
晴れ渡った沖縄の青空に、ゴキンッ、と軽快な骨の潰される音が鳴り響いた。

☆

ゴロゴロと、熱く発熱しているアスファルトに、トランクが滑る。
俺が引っ張っているのは、彩のトランクだ。空港に着くや否やさっそく俺は奴隷の役割として荷物持ちをやらされた。
まさか人生初の沖縄旅行がこんな奴隷という形でスタートするとは思わなかった。

「あー、良い気持ち」

ぐぐっ、と彩が背伸びする。因みに俺は『ヤな気持ち』だ。

「やっぱり暑いですね」

直ちゃんが服をパタパタとさせる。確かに、暑い。まんま沖縄のイメージ通りだ。

「それじゃあ今から自由行動開始だー！　お前ら、ちゃんと楽しめよー。宿はさっき言った通りの場所な。迷ったら電話してこいよ」

祭さんが注意事項を述べ終えると、それぞれの生徒は散開していく。カップルがイチャイチャしながら歩いていくのが腹立たしい。
お前らも散開してしまえ。

「あー、彼女欲しいな畜生」

と、俺がポロッ、と本音を漏らす。

「「「「「黙れこのリア充がッッッ！！！」」」」」

すると直後に彼女無しの、男子同士で組んで旅行を楽しむ、むさ

くるしい彼女無しの五人組、『男の友情は永遠だぜ！』の野朗共が噛み付いてくる。全く。俺の何処がリア充なのか教えて欲しい。

「ホント、バカよね・・・・・・」

背後では不機嫌な彩がぷくっ、と頬を膨らませていた。

☆

俺達はとりあえず、荷物を預ける為に祭さんの家の系列の旅館に向かった。因みに祭さんも行動を共にしている。

「そういえば前々から聞きたかったんですけど、祭さんもあの宝探し大会に参加してましたよね？」

「んー？　そうだけど？」

「俺達よりも進んでたのに、なんで俺達が宝（ヨッシー）を見つけた時に居なかったんだろうと思いまして」

「途中で予約してたけ○おん！　のね○どろいどをアニメ○トまで取りに行ったから」

納得。

とても祭さんらしい理由だ。

しばらく歩くと、明らかに周りよりも頭一つ出ている旅館が目に入った。あれが、祭さんの家の系列の旅館だろう。

いかにも高級旅館というような雰囲気を出している。祭さんが旅館に入るや否や、目の前には女将と思われる女性が立っていた。

「よーばあちゃん。久しぶりー」

「よく来たわねえ。盛人（せいと）。あら。明ちゃんまで。前まではこんなに小さかったのに」

「あっはっはっ。何時の話してるんだよばあちゃん」

「ご、ご無沙汰しております」

陽気に笑う祭さんの側で、明さんがペコリと丁寧にお辞儀をする。すると、女将の人が俺達に気づいた。

「こっちは、盛人の・・・・・・」

「おう！　後輩だ！　それと後輩になる予定の中学生が一名」

祭さん。まだ直ちゃんは俺達の学園を受けるとは言ってないですよ？　もはやこの短時間の間に祭さんは直ちゃんはもう自分の学園の後輩になる事が確定してしまっているらしい。

「おやおや。よく来たねえ。こんにちは」

「こ、こんにちは」

この女将、というか、俺の中の女将のイメージはもっと年をとったお婆さんが務めているイメージなのだが、目の前の女将と思われる女性（ひと）はぱっと見は三十代後半のような人だった。

「この人は俺の御婆ちゃんの皐月（さつき）ばあちゃん。因みに五十七才☆」

「「「「「うそおっ！？」」」」」

嘘だろ！？　ぱっと身はまだ三十台後半でも十分通じるぞ！？
側ではみんなあんぐりと口をあけている。（ただし紙絵さんは「ワオ☆　ふっしぎ～☆」と言ってニコニコしている）

「お、お若いですね」

と直ちゃんが全員の言葉を代弁する。

「あらまあ。ありがとう」

皐月さんは嬉しそうにニコニコと笑顔になった。

☆

幸助達が旅館に来る少し前。
旅館のとある一室に、むさくるしい彼女無しの五人組、『男の友情は永遠だぜ！』が集まっていた。手にはＰＳＰを持ってなにやらカチコチと無言で、せわしなくボタンを押している。

「あ～あ。沖縄に来ても、結局はする事は同じだよな」

「そうだよなあ。結局は旅館に閉じこもってゲームだしな」

「まあまあ。バカみたいに彼女を作ってイチャイチャしてるヤツ等なんてほっとこうぜ。どうせこんな学生時代に付き合っても別れるって。ガキなんてそんなもんだ」

「そうだ！　本番は社会人からだ！　俺達、『男の友情は永遠だぜ

！』は社会人編からが盛り上がるんだよ！」

「・・・・・・でも、もしも社会人になっても彼女が出来なかったら・・・・・・・」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

ポツリ、とメンバーの内の一人が呟く。同時に、全員に冷や汗がタラリと流れ落ちる。

「ま、まあとりあえずは今はゲームを楽しもうぜ！」

「そうだよな！　俺達の青春は友情に捧げるって決めたんだ！」

あっはっはっ、と無理に笑顔を作る。すると、一人の少年が立ち上がる。

「？　どうしたんだ市尾（いちお）。トイレか？」

「・・・・・・俺、同じクラスの友里花（ゆりか）ちゃんに、一緒に外を散歩しないかって誘われてるんだよな・・・・・・・」

「「「「・・・・・・・」」」」

気まずそうにする市尾。すると、ポツリとまた一人呟く。

「・・・・・・行けよ」

「でも・・・・・・・」

ガシャン、とゲーム機を落とす。

「行けよ！　折角の沖縄旅行だぞ！　俺達の事はかまうな！　だから行けッ！！　女子（エデン）の元にっ！！」

「そうだ。折角のチャンスなんだ。行け！　お前の事は決して忘れない！」

「・・・・・・みんな。ありがとう。俺もみんなの事は、絶対に忘れない！」

だっ！　とそのまま駆け出していく市尾。室内に取り残された四人。

「・・・・・・本当に、違う意味で忘れられねえよ」

「「「そうだな」」」

四人の絆が強まった瞬間であった。

第三話　バレなきゃいいって問題じゃない

俺達が旅館の中を進んでいくと、前の廊下の方からドタドタと同じクラスの市尾が駆け出してきた。なにやらとても嬉しそうな、悲しいような、そんな複雑な表情をしている。

「市尾？　どうしたんだ？」

「桐山か。・・・・・・俺は女子（エデン）の為に、仲間との友情（きずな）を断ち切った、罪深い男だ。だがしかし、ついにお前達リア充の仲間入りを果たすかもしれない。いや、果たして見せるッ！！」

わけのわからない事を言うと、そのまま市尾は俺達とすれ違い、旅館の玄関へと駆け出していった。

「な、なんだったんだ・・・・・・」

「そういえば友里花（ゆりか）が、前から気になっていた男子に思い切って声をかけてみるって言ってたわね。なんでも散歩に誘うとかなんとか」

神様。どうか哀れな独り身の市尾に春をくださいますよう。

その後、俺達が案内されたのは二階の部屋だった。まずは男子と女子、それぞれの部屋に分かれて荷物だけ置き、必要な荷物を持ってそのまま再び旅館の外へと出る。

「よーし、それじゃあ出発！」

「祭さん。まずは目的地を言わないと・・・・・・」

祭さんの隣で明さんがため息と共に言う。

「わりいわりい。まあとりあえずついてこ〜い！」

「話聞いてました！？」

明さん。残念ながら聞いてないと思う。

そして祭さんが案内した所にあったのは、旅館の近くに留めてある一台のリムジン。中には運転手は居ない。そして祭さんは何事も無くリムジンに向かっている。まさかとは思うが．．．．．．

「よーし、そんじゃあ行こうぜ〜」

祭さんが車の運転席に乗り込んだ。

「「「ちょっと待った！！」」」

何事も無く行こうとする祭さんを、俺、嵐、龍神が待ったをかける。

「？　何か問題があるのか？」

「大有りですよ！　なんで祭さんが運転席に座っているんですか！」

「へっ？　なら誰が運転するんだ？」

「知るかあああああああああああああああああああああああああああああああああああッ！！」

祭さんにはもう少し自分の年齢という物を自覚して欲しい。

「まあ大丈夫。ちゃんと策はある」

「策？」

嫌な予感しか無いが、一応聞いてみよう。

「バレなきゃ問題無し（キリッ）」

「バレるだろっ！」

結局、旅館の人に運転してもらう事になり、俺達を乗せたリムジンは出発した。もはや祭さんが居る以上、リムジンぐらいでは驚かなくなった自分が恐ろしい。

因みに運転してくれるのは旅館で働いている青年、小野寺大樹（おのでらたいき）さんだ。祭さんは小さい頃に会って以来の久々の再開らしい。

「あっはっはっ。盛人君も無茶をするようになったなあ」

「小野寺さん。そんな褒めないでくださいよ」

「祭さん。褒めてないです」

小野寺さんはリムジンを走らせながらニコニコと笑う。

「いやあ。盛人君が後輩を引き連れに来たか。もうそんな年なんだねえ」

「小野寺さんだって、俺が一年生の頃はまだ中学生だったじゃない

ですか」

「ああ～。あの頃は俺も若かった！」

二十六歳は若いとは言わないのだろうか。

「えっと、そっちの子達は・・・・・・」

「俺の可愛い可愛い後輩達」

「あはは。君達、盛人君の後輩は大変だろう？　今回の旅行だって、盛人君の思いつきに巻き込まれた結果だろ？」

「大体当たってます」

と龍神が答える。

「あはははは っ。やっぱり」

楽しそうに笑う小野寺さん。そしてミラー越しに俺達の方に視線を向ける。

「古宇利大橋って、知ってる？」

「あっ知ってます。沖縄に来る前にネットで観光名所をグッたんですけど、確か某サイトではランキング一位になってましたよね？」

「そうそう。よく調べてきたねえ」

「えへへ。調べるの、大好きなんですよね☆」

チラッ、と紙絵さんが彩の方を見る。そして彩はゾワリと背筋が凍りついたように身を震わせる。

「瀬低ビーチの前に、少しここを見ていくといいよ」

リムジンは古宇利大橋に入った。古宇利大橋は、古宇利島と屋我地島を結ぶ全長１９６０ｍの真っ直ぐに伸びている離島架橋で、ドライブにはもってこいの場所だ。因みに、歩道も整備されているらしく、徒歩で渡る事も出来る。

リムジンの窓が開く。車窓からは風がバタバタと入り込み、髪がなびく。日も照っていて、心地よい風も入ってくる。

橋の下を見てみると、青い海がただただ広がっている。

「綺麗・・・・・・」

と、彩が俺の隣で呟いている。確かに、綺麗だった。

そして、皆その景色を堪能した後、全長千九百六十ｍもある古宇利大橋を渡りきった。

「さあ、今度はご要望のあった瀬低ビーチだ！」

小野寺さんの操るリムジンがスピードを上げた。

次の目的地は、瀬低ビーチだ。

☆

瀬低ビーチ。本部半島の沖に浮かぶ瀬底島にある、約七百ｍの天然のビーチだ。全長七百六十二ｍの瀬底大橋により沖縄本島とつながり、車で渡りきる事も出来る。海自体の透明度も高く、海の中に

は魚達も居るらしい。沖縄本島でも屈指のビーチと言われている。。
因みに駐車場も有料だが完備している。（一台千円）
そして俺達は、女子達の着替え待ちの為、現在はビーチパラソルの下でボーッと座っている、という状況だ。

「なんかこんな綺麗な所にみんなが学校で忙しい中いるっていうのも罪悪感あるよな～」

「ま、それもそーだな」

「でもこれって皆勤賞とかどうなるんだろう？　やっぱり欠席扱いになるのかな」

真面目な龍神にとってそこは気になるのだろう。

「学校主催のイベントの優勝商品なんだからそこら辺は問題無いみたいだぜ？」

と嵐が補足する。

「そうか。なら問題は無いな」

それだけ確認すると、本を読み始めた。

「ああ。平和だなあ」

と、俺もレジャーシートの上でごろんと寝転ぶ。
本当に、こんな平和が続けばいいなと思っていたのだが、そう無らないような気がしてならないのだった。

第四話　いつも通りやりゃあいいんだよ

瀬戸ビーチでは、月曜日、という事もあってか人通りが少ない。まあそれも当然だろう。学生の殆どは月曜日からせっせと学校に通っているハズだから。

全く持ってご苦労な事だ。もしもここでのんきに月曜日に旅行に来ている俺達を見て「学校は大丈夫なのか？　もしかしてサボり？」とかなんとか言ってくる奴が居たら俺はこう言い返そうと思う。

「ちゃんと課題を見てから来ました」ってな。

あの課題地獄は本当にきつかった。正直俺の命は宿題のせいでつきるのだろうかと思った程だ。しかし神様も鬼では無かった。こうして俺達に報酬を与えてくれたのだから。

その報酬は、目の前に広がる青い海。晴れ渡る青空。そして、――水着姿の幼馴染み。

「・・・・・・」

「な、何よ」

ボーッ、と思わず彩の水着姿に見とれてしまう。だって、綺麗だから。

「ど、どこか変だった？」

きょろきょろと水着を見渡す彩。

止めてくれ。そんな水着でくねくねと動き回られたら俺の鼻から赤い何かがあふれ出てくる。

「い、いや、似合ってるなあ、て思ってよ」

「そ、そう？」

ぱあっ、と途端に笑顔となる彩。

ああ畜生。いつもそんな顔して笑えば可愛いのにな。

と思っていると、彩が突然ハッ、とする。

「って、何じろじろ見てるのよッ！　この変態！」

晴れ渡る青空の下、彩の右ストレートが綺麗に俺の顔面を打ちぬいた。

☆

結局、女子全員が着替えを終えて出てきたのは彩が出てきてから十分後だった。それぞれ見事に水着を着こなしている。しかしこうして見てみると……

「幸助。どうしたの？　なんかまたボーッとしちゃってさ」

「ん？　ああ。ちょっと気になる事があってよ」

「気になる事？」

「ああ」

「どんな？」

「いやあ、こうして改めてみんなの水着姿を見てみるとさ、やっぱり紙絵さんって胸が大きいなあって

「このド変態がああああああああああ！」ごぶあああああああああああああああああああッ！！」

神様。恨むぜ。俺の幼馴染みにとんでもない凶器（こぶし）を授けた事を。

☆

「うう～・・・・・・」

直はなんとか着替え終わり、皆と共にビーチに来たのだが・・・・・

（み、皆さんのレベルが高すぎる・・・・・・！！）

目に付くのはその大きな胸。ぶっちゃけ、まだまだ直には無い物だ（足りない物とも言える）。

（うう～。仲間だと思っていた莉子さんも結構大きいし、彩と愛さんにはまるで勝てる気がしない。そもそも明さんは論外。な、なんか張り合う所か微塵も勝てる気がしない！　さ、差別ですこんなの！　どうして神様は皆平等にしてくれなかったんですかあ～～～～！）

直は涙目でチラリと他のメンバーの様子を伺う。足（むね）りない物を補う為になんとか試行錯誤しようとする直。

（せ、せめて今日ぐらいは何か特別な事を・・・・・・）

彩は幸助に向かってなにやら拳を放っている。幸助は赤い花を咲

かせながら天高く空に舞い上がっている。

（これはこれでいつもの光景ですね）

しれっ、としてそのまま視線を移す直。

今度目に飛び込んできたのは愛がなにやら龍神にそっ、と寄り添っている。龍神はそのまま無視して本を読み続けているが、愛はそれでも龍神の側に居た。しかししばらくすると、「りゅーじん。感想は？」「感想？　何の？」「やっぱりりゅーじんにはおしおきが必要」「えっ？　ちょっ、何を・・・・・・ぎ、ぎゃあああああああああああああああああああ！」となにやら向こうは向こうで赤い花を咲かせている。

真っ白な本が真っ赤に染まっているのは気にしない直であった。

（あれはあれでまたいつもの・・・・・・）

今度は莉子の方に視線を移す。

莉子は海中にもぐってカメラを構えている。恐らく撮影の気を待っているのだろう。

（あれもいつも通り・・・・・・）

直は今度は明の方に目を移す。明はなにやらスースーと寝ている祭の隣にちょこんと座っているだけだ。

（あれはあれでいつもの・・・・・・って、あの人達の『いつも』が解らないけど・・・・・・）

そこでふと、思う。

（あれ？　みんな・・・・・・いつも通り・・・・・・？）

赤い花を咲かせている幸助と龍神。赤い花を咲かせた彩と愛。カメラをかまえて水中に潜む莉子。のんきに寝ている祭。それをただただ側で見つめている明。

別に特別な事などしていない。

何処にいても自分のペースで。

それぞれ想いの人と共に居る。

「おっ、居た居た」

ひょいっ、と嵐が直の顔を覗き込む。

「はわっ！？」

「なんでそんな所でじっとしてるんだ？」

「い、いえっ、そのっ、あのっ。え、えと、」

「？　なんだか解らねえけど、行くぞ」

ぐいっ、と直の手を引っ張る嵐。

「何を悩んでいるか知らねえけど、お前はお前で、―いつも通りやりゃあいいんだよ≪・・・・・・・・・・・・≫」

「あっ・・・・・・」

まるで見透かしたかのように、自分の求める答えを言ってくれる

嵐。

（ううっ。こういう時って、本当にかっこいい・・・・・・）

顔が赤くなっている事に気づき、あわててなんとかごまかそうとする直。

「あ、そうだ」

「？」

「やっぱこうしてみると、皆胸が結構大き「死んでください」ごふうっ！」

白い砂浜に赤い花が咲いた。

（ううっ。どうしてこういう所はちゃんと察してくれないのですかあ）

真っ赤な顔で涙目となる直であった。

第五話　これ、無理ゲーじゃね？（泣）

「ビーチバレーをしよう」

俺達は赤い花　（↑※出血）をビーチに咲かせた後、のんびりとしていたのだが、突如祭さんが切り出した。

「ビーチバレーですか？」

「そっ。チーム分けをして、対決するんだよ」

「どうして急にそんな事を言うんですか？」

「暇だから」

俺があたりまえの質問をすると、間髪入れずに即答された。まあ祭さんだから仕方が無い。こういうペースの人だ。

「おっ。そりゃあ面白そうだな。どうやってチーム分けするんだ？」

嵐も乗ってくる。龍神はもくもくと本を読んでいるので関心は無いようだ。まあ、龍神はどっちかって言うとインドア派だから当たり前だが。

「とりあえずチーム分けの前に、メンバーを集めないとな」

その後、俺、嵐、祭さん、彩、直ちゃん、明さんが一緒にビーチバレーをする事になった。神戸さんは龍神、紙絵さんと共に見学するようだ。

「さ～て、まずはどうやってチーム分けをするかなあ」

「とりあえず、力が均等になるようにしなきゃいけませんよね」

とは言っても、ぶっちゃけ祭さんが居る時点でゲームバランスが完全に崩壊しているが。

「彩。祭さんをそっちのチームに入れようか？　男子ＶＳ女子じゃ話にならないだろ？」

「そんな事言っていいのかしら？　アンタの負ける確立がさらに高まるわよ？」

「ムッ。失敬な。さすがに女子には負けねえよ」

「アンタじゃ無理よ」

「な、なんだと――――――！？」

少し大人気無いと思って手加減してやろうかと思ったが、どうやらその必要は無いらしい。

「それなら、男子ＶＳ女子でどうだ！」

「望む所よ！」

互いに火花を散らす俺と彩。

「後でほえ面かくなよ！？」

「こっちのセリフよ！」

やれやれ。大人気ないがこうなったら完膚なきまでに叩き潰す必要がありそうだ。

「あっはっはっ。お前らと居ると退屈しないなあ」

そんな俺達の側で、祭さんがのんきに笑っていた。

☆

ポーンッ、とボールが空高く舞い上がる。男子ＶＳ女子の三ＶＳ三の変則ビーチバレー対決が始まった。先行は相手である女子チーム。彩のサーブが放たれた所だ。

因みに、どこから持ってきたのか祭さんはすぐにビーチバレーのネット、その他諸々を引っ張ってきた。どうやら元々準備していた物のようだ。

それにしても、いくら彩とは言え、彩はやっぱり女の子だ。それに変わりは無い。ここで男子である俺が彩のサーブも取れなければ男がすたるというものだ。

ポンッ、と軽く俺はそのボールをレシーブする。これぐらいのハンデは必要だろう。

「はっ！」

すると、浮いた甘い球を捉え、ビシッ！！　と、鋭いスパイクが、彩の手から放たれた。

「へっ？」

放たれたスパイクはゴウッ！！　と、空気を切り裂き、閃光のごとくボスッッ、と白い砂浜に落下した。いや、この場合『突き刺さった』、というような表現が正しいだろう。

シュルシュルと白い砂浜に突き刺さったボールが回転する。取ろうとするどころか、反応すら出来なかった。

・・・・・・

これ、無理ゲーじゃね？（泣）

「あの・・・・・・・彩・・・・・・・さん？」

「何よ」

「ど、どうしてそんなに鋭いサーブをお打ちになっているのですか？」

「ビーチバレーは初めてだけど、バレーなら少しだけやった事があるわ」

そういえば、彩は運動神経が良いという設定をすっかり忘れてた。度々、クラブチームの助っ人にも駆り出された事もある。そういえば、応援に行ったスポーツの試合の中にバレーも含まれてた気がする。

「・・・・・・彩さん？」

「何？」

「手加減とかは・・・・・・・」

「無し」

確かに、手加減してくれるような目つきではない。どうやら完全にムキになっている。彩も負けず嫌いな所があるからなあ（しみじみ）

「えっと、祭さん、ビーチバレーってやった事ありますよね？」

「無い」

「ええっ！？　じゃあどうして急にやろうって言い出したんですか！？」

「一回やってみたかったから」

ああ。終わった。これ。

その後は次々とポイントを取られ、一セット目が終了。

因みに俺達は一点も取れなかった。

「いやあ。強いなあ」

「いやいやいや。笑い事じゃ無いですよ（涙目）」

「自分から持ちかけておいて、よくもまああれだけボコボコにされ

る事が出来るな。幸助」

「うっせえ！（涙目）」

つーか彩（アイツ）、第一セットは俺しか狙ってこなかったぞ・・・・・・

俺がボロ雑巾のようにいじめられている間、祭さんは笑っていたし、

嵐は嵐で暇そうに、（哀れみの目をむけて）してたし。

「にしても、これじゃあゲームにならないな」

「いや。だいじょーぶ。こっからだって」

本を読んでいた祭さんがパタンと本を閉じ、にっ、と笑う。

「？」

「それに、男がやられっぱなしってのも少しカッコ悪いしな」

そして第二セットが始まった。嵐がアンダーサーブを放つ。それを間髪入れずに彩がスパイクを叩き込む。

「よっ」

俺に向かって放たれたスパイクを、祭さんが瞬時に俺の正面にまわりこみ、そして、拾った。

「ええっ！？」

驚く彩。むしろ見方である俺も驚いている。

「行ったぞ。幸助」

「え、あ、は、はい」

俺は祭さんにトスを上げる。そしてそれを祭さんが綺麗に相手のコートへと叩き込んだ。俺達のチームの、初めての得点だ。

「え、えっと、祭さん？　確かビーチバレーって初心者じゃあ……」

「そうだけど？」

「でも今のスパイクは……」

「ああ。彩（アイツ）のプレーを観察して、大体、どんな風に動けばいいのか理解したからな。さっき読んでたビーチバレーのルールブックの中にあるプレーの動きと、第一セットで見た実際の動きを照らし合わせ、組み合わせて、どういう風に動けばいいのかを計算して、後はそれを実践しただけ」

しれっ、と言い放つ祭さん。さ、さすが『天才』と言わざるおえない。しかし、これならなんとかゲームになりそうだ。

その後の第二セットは、第一セットの彩による『一方的な虐殺（ワンサイドゲーム）』とは違い、なんとかゲームの形となっていた。（主に祭さんのおかげで）

相変わらず彩は俺を狙ってるけどさ……もう今日だけで五回はボールが俺の顔面を直撃している。

そして、何気に直ちゃんも運動神経が良く、なかなかの働きをしている。明さんは身体能力は相手チームの中ではずば抜けているのだが、途中で転んだり、ドジっ子メイド属性が発動して程々、と言

った感じだ。
そして、ラスト一ポイントだった所で、祭さんが衝撃的な一言を発した。

「疲れた」

「「は？」」

「う～。俺、そろそろ寝るな～」

それだけ言うと、祭さんは眠たそうにパラソルの下へと戻っていった。

「「「「「・・・・・・」」」」」

彩がそっ、と俺に一言だけ伝える。

「覚悟は出来てるわよね？」

はい。どうぞお好きに虐殺なさってください。
その後、再び彩による俺に対する『一方的な虐殺（ワンサイドゲーム）』が再開されましたとさ。

第六話　願い事

昼間、彩に虐殺された俺はふらふらの体でなんとか旅館にたどり着き、死ぬように眠りに落ちた。そして気がつくと、あたりは夜になっていた。夕食は広間でみんなで食べた。

さすがに祭さんのおばあさんが経営する旅館なだけあって、夕食はとても豪華だった。そして、夕食を食べ終えると、広間の中で今度は彩が俺に突然の提案を持ちかけてきた。

「幸助、ちょっといい？」

「ん？　何？」

「あの、その、」

もじもじと何か言いづらそうにする彩。なるほど。大体察しはついた。ここは紳士な俺が気を使ってあげなきゃな。

「もしかして、お前・・・・・・」

「うっ。そ、そうなのよ。実は・・・・・・」

「腹でも痛いのか？　だったらさっさとトイレに『死にさらしなさい（ごきゅっ）』ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああッ！！」

うう。畜生。何も首をひねらなくてもいいじゃないか。一体どこが間違っているというんだ。

「ち、ちょっと散歩に付き合って欲しいのよ」

「散歩・・・・・・？」

俺は不吉な音を立てた首をさすりながら呟く。

「散歩っつてもなー。この後嵐と龍神と祭さんとでポーカーをしようかと・・・・・・」

「確かまだ、あの『約束』は有効よね？」

『約束』というのは多分飛行機のオーバーキル大富豪で、俺達男チームが惨敗した時に課せられてしまった『なんでも言う事をきく』という制約だろう。

破れば恐らく死。最早俺に選択肢など無かった。

「解ったよ。俺の華麗なロイヤルストレートフラッシュが決められないのが残念だが大人な俺がしぶしぶついていってや『黙りなさい（ぼぎゅっ）』ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

俺は沖縄から帰ってくる頃には五体満足で居られるのかどうか疑問だった。

☆

「「「・・・・・・なあ長谷川」」」

「なんだ小林（こばやし）。竹川（たけがわ）。日延（ひのべ）」

「市尾（アイツ）、やっぱり戻って来ないよな・・・・・・」

ポツリ、と小林が呟く。

『男の友情は永遠だぜ！』のメンバーは現在、夕食を済ませた後、自室に集合していた。手には充電の切れたＰＳＰ。

「・・・・・・何も言うな」

と長谷川。

「そうだよ。ここは俺達『男の友情は永遠だぜ！』から卒業生が出ただけでも喜ぼうじゃないか。市尾（アイツ）は俺達の希望の星だ。ここは黙って見送ってやろう」

と竹川。

「竹川・・・・・・・」

と日延。

男達四人ははあっ、とため息をつく。

するとそのタイミングを見計らったかのように、コンコン、とドアが叩かれる。ぴくっ、とする四人の男達。これは昼間のパターンを考えると、女子からのお誘いだ。

「あの・・・・・・・篠田（しのだ）、ですけど・・・・・・・」

（（（（篠田（じょし）・・・・・・・だと！？））））

やはりこのパターンは女子だった。しかも篠田はクラスでもそれなりに綺麗な方の女子だ。普段は物静かに本を読んでいる女子だ。

しかし問題はこの次。この次に呼ばれるのが誰かで再び『男の友

情は永遠だぜ！』のメンバーの運命がガラリと変わる。

「日延（ひのべ）君、居る？」

「「「・・・・・・・」」」

指名されたのは、日延だった。日延は申し訳なさそうにその場を立つ。そして、ドアの前へと移動した所で、

「・・・・・・黙って、見送ってくれるよな？」

「「「・・・・・・・勿論だ・・・・・・・」」」

そのまま日延はその部屋を後にした。支払った代価は、『男の友情』。今の日延にとっては、あまりにも安い代価だった。

☆

俺は彩と共に旅館を出た。散歩、と言っても辺りを適当に歩くだけだ。民家からの明かりが、道を照らしてくれる。

彩も、俺も、しばらくは黙って道を歩いた。正直こんな夜道で二人っきりってなんだかんだで始めてだった気がする。学校から帰る時も、部活動に入っていない俺達にとっては、下校中の夜道なんて物は無縁だったせいもある。

「な、なあ、彩？」

「ふわっ！？　な、何よ？」

「なんか、こ、こういうのってなんだかんだで初めてだよな」

「そ、そうかしら？」

「お、おう・・・・・・」

「・・・・・・」

再び沈黙してしまう俺と彩。

別にこの沈黙が嫌なわけではない。この沈黙に耐え切れないわけではない。ただ、なんか、緊張してしまうのだ。

そもそもなんで急に散歩をしようなんて言い出したのかが解らない。

「ちょっと、止まって」

突然、彩がピタリと動きを止める。その場所には、神社があった。

「ここ、一緒に行ってくれる？」

断る道理も無い。俺と彩は一緒に神社へと足を踏み入れた。じめんにパラパラと散らばっている小石を踏みつけると、じゃりっ、じゃりっ、というような音が辺りに響く。俺も彩も沈黙したままだし、周囲はとても静かだからなおさら音が響く。

気がつくと、目の前には賽銭箱と鐘が。

「お参りしない？」

「お参り？　季節的にはまだまだ先じゃねーのか？」

そもそもまだ夏休みすら始まっていない。とは言っても、もうす

ぐ期末テストだが。

「なんかこの神社ね、夜に二人きりで来くると、来てくれた人達の願い事を叶える為に神様が降りてきてくれるらしいわ。ちょうどこの季節にね」

「へえー・・・・・・」

それは知らなかった。つまり、俺も彩も現在はその条件を満たしている、というわけか。これで彩が急に散歩に行こうと言い出した理由も明らかになった。

彩はあらかじめ用意しておいたらしい十円玉を俺に一つ渡す。二人同時に賽銭箱に賽銭を入れ、共に願い事をする。（鐘は鳴らさないでいいらしい。とは言っても近所迷惑だからという理由もあり、当然鳴らさないが）

そっ、と目を閉じた彩の横顔がチラリと目に入った。その横顔は月明かりに照らされて、とても綺麗、だった。

「？　どうかした？」

「っ！？　い、いや？　なんでも無いけど！？」

「・・・・・・？」

彩はそれ以上の言及はしなかった。そして、そのまま俺達は帰路についた。

「幸助は何をお願いしたのよ？」

「俺？　ん～、そうだな。『いつまでも今のままの生活が続きますように』、かな」

「平和ねー。もう少しマシな事は無かったの？」

「ほっとけ。だったら彩は何をお願いしたんだよ」

「私？　大丈夫よ。アンタとは違って、ずっと前からの夢だから」

コイツのずっと前からの夢。なんだろう。俺には解らない。

「そうか。その願い、叶うといいな」

「・・・・・・そうね」

旅館に帰る途中の道で、今度は嵐と直ちゃん、その少し後に龍神と神戸さん、そしてまたその後に祭さんと明さんと出くわした。

どうやら今日は散歩が流行っているみたいだ。・・・・・・男子メンバーの無理矢理連れられました感が否めないが。

月明かりが照らされる中、俺と彩は帰り道を歩いた。

☆

「そうか。その願い、叶うといいな」

彩の目の前で、幸助はそう言った。

「・・・・・・そうね」

彩はそれだけ、返した。

（半分はもう、叶ってるんだけどね）

彩の願い。それは、幸助と、結ばれる事。ずっと前から思っていた、子供の頃からの夢。それが叶うのがいつになるのか解らないけど、彩は頑張り続ける。

そう、決めたのだから。

☆

帰りの飛行機の中。愛は疲れ果てて寝てしまっている皆を見る。その目はどこかさびしそうで、まるで今の光景を焼き付けておこうとしているようだ。

「眠れないの？」

突然、莉子が話しかけてきた。愛はこくりとうなずく。

「・・・・・・あの話、本当に受けるの？」

「・・・・・・うん。お父さんの困っている顔は、見たくないから」

愛が生まれて早々に、母親は他界した。父親はそんな愛を、精一杯育ててくれた。そんな父親に愛は感謝している。だからこそ、自分のせいで困る父親の顔を、見たくはなかった。

「そう」

莉子はいつものそのテンションとは裏腹に、表情を曇らせている。

「あの事、まだみんなには言わないで」

「本当にいいの？　一番悲しむのは、心が傷つくのは、多分菅田君だよ？」

「・・・・・・いいの。りゅーじんには、感謝してるから。」

こんな自分と、一緒に居てくれて。と、愛は心の中で呟く。

「だからこそ、言わない。言えばきっと無茶をするから」

「・・・・・・そう」

莉子はそれだけ確認すると、眠りについた。愛はそんな莉子に感謝しながら、隣で眠っている龍神の顔見る。

「ありがとう。りゅーじん」

それだけ、言っておきたかった。

――――自分がみんなと一緒に過ごせる時間は、もう残り少ないから。

第六話　願い事（後書き）

「沖縄旅行編」完結です。次はＳＳを挟んでから、新章開始です。

ある日の日曜日の料理教室

ある日の日曜日。家に直ちゃんがやってきた。なんでも、彩に料理を習いたいのだそうだ。なぜ急にそんな事を言い出したのかはあえて言わないが、問題は、現在彩が住んでいるのは俺の家、という点だ。

最初は直ちゃんもなぜ俺の家なのかが解らなかったが、そこはなんとかごまかした。そして、ついにその約束の日曜日がやってきたのだが。

「おじゃまします」

「入るぜ～」

「い、いらっしゃい」

俺はひきつった笑顔で二人を出迎える。因みに嵐は俺の所の事情を知っているのだが、問題は別の所にある。

因みに彩は少し遅れて俺の家に来る予定だ。初めから俺の家に居ると、少しばかりだろうか怪しまれる。こちらとしては、なんとか同じ立場にある直ちゃんには同居生活の事を知られたくは無い。確かに見方が増えるのは良いのだが、何かの拍子に誰かに聞かれては困る。主に俺達の命が。

よって、秘密を知るのは必要最低限の人数（俺、嵐、龍神の三人）でなければならない。

「彩は少ししたら来るから。なんでも買い物をしているらしい」

これは本当。全て嘘の情報ばかりを与えると、逆にボロが出る。

「なんだか幸助さんの家も久しぶりですね」

「お、おう。そうだな」

確かに、中学時代はよく俺の家や嵐の家、そして龍神の家や、彩、神戸さんの家に集まったりもした。

「それにしても、私はともかく、皆さん家に集まらないんですね？」

「「・・・・・・・」」

・・・・・・いきなり痛い所をついてくるなあ（しみじみ）

「そりゃあれだ。高校生活は忙しいからな」

「やっぱりそうですよね～」

嵐が上手く切り抜ける。やれやれ。来てまだそんなに経っていないのにこの調子じゃあ、この後の危機は乗り越えられないかもな。

今日の最大の難関。それは直ちゃんが来る事では無い。

――――よりにもよって、今日に限ってぞろぞろとやってくるクラスメイト達だ。

時は金曜日に遡る。

☆

「なあ幸助。日曜日、お前の家に行っていいか？」

「？　どうした急に」

俺に話しかけてきたのは、映画研究会部長の、巴和樹（ともえかずき）だ。映画研究会は昨年、部員数が0になってしまったのだが、巴が中学時代の仲間と共に、映画研究会に入部。そして同時に巴が部長になったそうだ。

巴は中学時代からの知り合いだが、中学でも何本か実際に映画を製作している。その出来は見事な物で、何気に、高校で作るコイツの映画が楽しみだったりする。

「実はさあ、俺、日曜日は部員のヤツ等と映画鑑賞をしてるんだけどよ、俺の家のＢＤ／ＤＶＤ対応のデッキが壊れてしまってな。だからお前の家で見させて欲しいんだ」

「お前の家、確かデッキが三台あったよな？」

「全滅した」

「他の部員の家のデッキは？」

「何度も鑑賞し、酷使し続けた結果、全滅だ」

どれだけ映画を見ているんだよ・・・・・・

しかし、それだけ映画が好きなヤツ等が作るのだったら、中学時代に見たあの映画の出来も納得だ。

「解った。ＯＫだ」

さすがに彩を呼ぶ、というような口実は使えない。その日は、彩とどこか映画でも見に行って家を空けておけばいい。

☆

そして、その日の夕食前に彩の口から、直ちゃんが今日の日に俺の家に来る、というような事を聞いたのだ。
因みに嵐もその事は知っている。そして俺達のやるべき事は一つだ。

――――俺の家に向かってくる、映画研究会部員の排除だ。

映画研究会部員(あいつら)が聞いたら、なんてヤツだ、と思うかもしれない。しかしこっちはそれどころでは無いんだ。友情を壊してでも守りたい物がある。
それは当然、俺の命、だ。
現在時刻は午前十一時。映画研究会(ターゲット)が家に来るのは十一時半。時間が無い。俺はチラリと嵐にアイコンタクトをとる。嵐はそれに答える。

作戦(ミッション)スタートだ。

「直ちゃん。俺ちょっと用事があるから、少しここで待っててくれるか？」

「へっ？　別に良いですけど・・・・・・」

「っと、俺も少し出てくるからな」

「ええっ！？　嵐さんまで！？」

「それじゃあ頼んだ！」

そのまま俺と嵐は家を飛び出した。
この作戦にミスは許されない。なぜなら失敗した暁には妬み度が頂点に達した野朗共が、俺達に向かって襲撃をかけるだろう。
映画研究会（ターゲット）は全部で五人。
映画研究会（あいつら）には悪いが、早急に始末しなければならない。

☆

和樹は、四名の部員と共に、幸助の家へと向かっていた。

「さて、今日はどんなジャンルの映画を持ってきたんだ？」

副部長の長田海斗（ながたかいと）が言う。

「今日はアニメを見ようと思って、色んなアニメ作品の映画を持ってきたんだ」

和樹が肩にかけているエナメルバッグの中には、様々な映画のＢＤが入っている。

「アニメ？」

部員の一人、江西洋介（えにしようすけ）が首を傾げる。

「ああ。あまりアニメもバカにしたものではないぞ。『千と千尋の神〇し』なんかは、日本で最大の興行収入を記録しているし、ジブリ作品やディズニー作品は長く、多くの人に愛されている」

「なろほどな。しかし映画は売り上げじゃなくて内容、だろ？」

海斗がにやりとする。

「ああ。けど、たまにはこういうのも見ておこうと思うんだ。俺達に実際にアニメ作品は作れなくても、学べる所はあると思うんだ」

「例えば今日はなんの映画を？」

「そうだな。さっき言った『千と千尋の神〇し』のジブリシリーズとか、『エヴァ〇ゲリヲン新劇場版：序』、『破』とか、『劇場版起動戦士ガ〇ダムＯＯ』とか、とにかく色々な方面の物だ」

そんな映画談議に花をさかせ、映画研究会は道を行く。

しかし、そんな彼らの背後に、不信な影があった。

☆

見つけた。巴達、映画研究会だ。なにやら楽しそうに話をしている。しかし、今からあの集団を排除しなければいけないとは、心が痛む。（多分）

現在、俺達は路地裏に隠れて映画研究会（ターゲット）の様子を観察していた。

「さて、まずは路地裏（ここ）に誘い込んでから適当に殴り倒すか」

さらりと嵐がとんでもない事を言ったが、気にしない。

「お前は今の時間帯は家に居る予定だからな。路地裏には俺が誘い出す」

スッ、と嵐が俺の側を抜け、映画研究会（ターゲット）に迫る。

「おっ。偶然だな。こんな所で会うなんて」

「嵐じゃないか。どうした？」

「日曜は暇でな。そっちは？」

「今から幸助の家に行って映画鑑賞するんだ。そうだ。暇ならお前もどうだ？　一般の人の感想も聞いてみたい」

「そうか。ならお邪魔させてもらおうかな」

嵐のおもうがままに事が運ばれていく。後は、路地裏に誘い込んだ所を（映画研究会（あいつら）には悪いが）潰すだけか。

「俺、近道知っているから案内しようか？」

「ありがとう。頼んだよ」

こっちに近づいてくる。俺は近くのゴミ箱の裏に身を隠す。

「こっちだ」

嵐が路地裏に誘い込んできた。そしてなにやらポケットから鍵を落とす。キンッ、と軽い金属の音が路地裏に響いた。

同時に、嵐がわざとらしくよろける。

「っと」

「どうした？」

「ちょっと鍵を落としてしまったみたいだ」

「探すの手伝おうか？」

「頼む」

と、言ったのは部員の一人、長瀬友也（ながせともや）だ。なんていいヤツなんだ。しかしそれがアダとなるのだが。

他の部員達も腰をかがめて探そうとしてくれる。

そして、嵐は隣に居た長瀬の後頭部をぐっ、とつかみ、捻る。

「へっ？」

瞬間、ごきゅっ、という不吉な音が響いたが気にしない。

「長瀬？」

他の部員二人がすっ、と立つ。その背後に俺は回りこみ、同じように首をひねる。再び響く不吉な音。

もはや知った事では無い。だってこっちがかけてるのは命なのだから。ここは感情を殺して無にしなければ。

「どうしたんだみん・・・・・・（ごきゅっ）」

副部長の長田の首を嵐は再び捻る。

「！？　どうしたみんな！」

巴が周囲に倒れている部員を見て目をまるくする。俺はそっ、とその背後に忍び寄り、首をひねる。

ごめん。
俺達はまだ死にたくは無いんだ。

☆

コトコトと、カレーを煮込む音がキッチンに響く。今回、彩と直が作ったのはカレーだ。そっ、と味見をしてみる直。

「どう？」

「う～。少し微妙、かもです」

「そう？　私は十分美味しいと思うけど」

しかし直としては、中途半端な物を嵐には出したくなかった。

「何が足りないのでしょう？」

「足りない物、か。十分足りてると思うんだけど」

「足りてる？　何が、ですか？」

彩はにこっ、と微笑む。

「愛情、かな」

我ながら少し恥ずかしいセリフだったのだが、それは本心だった。実際、あまり料理もした事の無い直が頑張ろうとした時点で、それは十分に足りていた。
それが誰にむけての物だったのかは、彩はあえて口にしなかった。

その事を察したのか、直は顔を真っ赤にしてうつむいた。

☆

俺達はなんとか事をやりすごし、すがすがしい気分で家に帰った。

「遅い！」

彩が玄関に仁王立ちで待ち構えていた。いや、本当にすいません。いままで命をかけた重要な聖戦（または一方的な虐殺、とも言う）をしてたんだ。そんな事、彩には言えないけど。

「さっさと来なさい。せっかくのカレーが冷めてしまうわ」

「おっ。カレーか」

「そういえば嵐、カレー好きだったよな」

雑談をしながら食卓につく。テーブルには皿に盛り付けられたカレーが。

「「「「いただきます」」」」

カレーは上手く味付けがされていて、コクもあり、美味しかった。しかし、まず感想を言うべきヤツが言わないと、感想は避けよう。

「ど、どうでしょう・・・・・？」

直ちゃんがドキドキとしながら、自分のカレーには手をつけずに嵐の感想を待っている。

「ん？　美味しいけど」

それだけ言うと、嵐はパクパクと忙しそうにカレーを口へと運ぶ。その様子を見て、直ちゃんはほっとする。

この食べっぷりを見てみると、確かに本当に美味しいと思っているのだろう。

その後、特にこれといったトラブルもなく、嵐と直ちゃんは家に帰った。なんとか、俺達は今日の一日をやり過ごしたのだ。

・・・・・・因みに、あの時の次々と映画研究会の仲間が気絶していき、最後には自分も気絶してしまうという巴達の体験を元にした映画研究会の第一作目、『消えてゆく友人達』というショートホラー映画が宝探し大会後に上映され、大反響を呼んだのはまた別の話である。

俺とアイツ達との出会いの話（前書き）

白上嵐過去編ＳＳ。

嵐の家庭の事情、直や幸助、龍神との出会いについてのＳＳです。

俺とアイツ達との出会いの話

中学に入学すると同時に、家を飛び出した。いや、飛び出した、というのは正しくないのかもしれない。生きていくためには、金が要る。

所詮、俺はまだまだ親からの保護を受けている子供だ。自分は子供じゃない、と言い切れる程俺は子供じゃない。

だから親からは毎月口座に生活費が振り込まれている。学校への支払いも済ませてくれる。正直、父親には頼りたくなかったが、仕方が無い。

毎月、十分すぎるぐらいの金が銀行の口座には振り込まれている。通帳を見るたびに、腹が立つ。自覚する。まだ自分が親の保護下、いや、支配下に置かれているのだと。

俺の家は、ある一つの世界的な大財閥だ。そして父親が俺に言うセリフはただ一つだ。

『俺の跡を継げ』

まっぴらごめんだ。そもそも、家庭をかえりみず、仕事ばかりして、俺の母親にも負担をかけて、結局死んでしまった。・・・・・・死なせてしまったのはアイツだ。

俺はそんな悪魔の跡を継ぎたくも無い。

小学生の頃、一時期ある家に居た。普通の、一般の小学校に通うためにそこに居た。父親は自分が薦める進学校に行かせたかったようだが、知った事ではない。だからこそ、小さいながらにもささやかに反抗し、『普通の』小学校へと通った。

ある日、隣の家に居た小さな女の子と友達になった。年は一つ下。長い髪をツインテールにしている女の子だった。

きっかけは、下校中だった。上級生にいじめられていたソイツを

助けた時だ。ソイツは『ありがとう』、とお礼を言ったが、別にそんなお礼が欲しかったわけでは無い。

ただ単に、弱い人間をいじめるようなつまらないようなヤツがムカついただけだ。

しかし、いつの間にかその女の子とは仲良く、とは行かなくても、顔見知りぐらいにはなった。その内、学年が上がるたびに仲良くなっていった。

しかし、小学校を卒業した時に、父親が言った。「お遊びは終わりだ」、と。要するに、俺は外国の進学校に行かなければならないらしい。

嫌だった。父親の言う事を素直に聞く、というのもあったが、あの小さな女の子と別れるのもなぜだか解らないが嫌だった。

だからこそ、家を飛び出した。まさか父親も家を飛び出すとは思わなかったようだ。しかし後で考えが変わるだろうと思っているのか、あっさりと金銭面を援助してきた。

俺はそんな父親に反抗するように、中学に入学すると毎日喧嘩を繰り返した。気がつくと、ある程度の人数に囲まれても倒せるぐらいに強くなった。

けど、何も得る物が無かった。解っている。こんな事をしても、父親（あいつ）の支配から逃れる事が出来ないっていう事は。

それでも、何かしないとおさまらない。

中学二年生になった。一つ下のあの女の子が入学してきた。俺が小学二年生からの付き合いだから、もう幼馴染み、ぐらいにはなったのだろうか。中学に入ってからはあまり会ってなかったので、その幼馴染みを見たのは久しぶりだった。

久しぶりに見たその幼馴染みは少し大人になったような気がした。しかし、俺が言う事でも無いがまだまだ子供らしさが残っている。

同時に、俺は少し恐ろしかった。今の俺の現状をあの幼馴染みが聞いたら、どう思うのか。

俺の事は忘れようとするだろう。

それが当たり前だ。当然だ。

俺は忘れられる事を覚悟した。

しかし、その幼馴染みは今の俺の現状を聞いても、何も変わらなかった。逆に、前よりももっと親しくなろうとしてきた。

そしてある日こう言ってきた。

『今度は私が助ける番です』、と。

あの幼馴染みは、まだあの日の、俺と出あった日の事を覚えているのだ。

本当に、バカだ。

俺にとっては別になんでも無いのに。なのにその日の事を宝物のように覚えて、抱えて。

その日から俺は喧嘩を止めた。

いや、止めようとした、と言うのが正しい。

俺が喧嘩を止めてしばらくしたある日。突然、誘い込まれた廃工場の中で複数の人間に囲まれた。どうやら俺が叩きのめした不良（バカ）の中に、グループ的な物に所属していたヤツが居たらしい。

人数は二十人。グループにしては小規模だが、一人の俺にとっては多い。しかし喧嘩は避けられなかった。別に喧嘩を止めようとしたから反撃しなかった、というワケでも無い。

反撃したが、やはり数としての分が悪い。俺が相手出来るのはせいぜい三人。それ以上はキツイ。数が二十ならばなおさらだ。
俺はいいようにサンドバッグにされた。
朦朧とする意識の中、やはり俺は変われないのか、と思った。
倒れようとした。その方が楽だと思ったからだ。

しかし。その時、

「止めろ！」

聞き覚えの無い声が響いてきた。倒れようとする足をなんとか支え、声の響いた方を見てみる。予想通り、見覚えの無い顔だった。
しかも二人居る。

「ねえ、本当にやるの？」

「・・・・・・いや、だってほっとけ無いじゃねーか」

「はあ。君のそのお人よしにも付き合うのは僕、もう疲れたよパトラッシュ」

「誰がパトラッシュだ。それにこれは親の遺伝だ。文句があるなら親に言え」

「君の両親、今確かアリゾナ州だったよね？　どうやって文句を言うのさ」

「・・・・・・すまん。多分携帯の電源も切ってるかも」

「やはり、所詮君はパトラッシュさ」

「うるせえ！」

なんともバカっぽい会話だ。それに見てみると、同じ中学の制服を着ている。

その後は、バカ二人と入り乱れての大乱戦。そいつ等はこんな場にノコノコと出てくるだけあって、まあまあ強かった。その後、なんとか俺達は逃げ切る事が出来た。

「・・・・・・お前ら、何のつもりだ？」

「はあ、はあ、何が？」

「何のつもりで助けたんだよ」

「？　別に。なにやら怪しげな不良集団に怪しい場所に連れ込まれていたからちょっと助っ人しただけだ」

「それだけか？」

「それだけ」

目の前のバカその一がきょとん、としている。

「ああ。気にしなくてもいいよ。幸助はバカだから」

バカその二が言う。

「バカとはなんだバカとは！　せめて『通りすがりの仮面ラ○ダー』と言え！」

「バカだ。やはり君はバカだ」

「龍神！　覚悟しろやあああああああああああああああああああああああ！！」

この会話を聞いていると、不思議とこいつ等のペースに巻き込まれてしまう。あの、幼馴染みと同じように。

その後、来る日も来る日も同じ不良集団が襲撃をしかけてきた。俺の決意とは裏腹に、毎日毎日喧嘩三昧。（基本逃走だが）しかし、不思議と俺はあの頃のような虚しくなるような感覚が無かった。

得る物は相変わらず何も無いが、それでもなぜか満足していた。

二人のバカは、俺と共に喧嘩をしていくと共に強くなっていった。同時に、俺達の仲は次第に深まって行った。もう名前で呼び合う仲までに。

そしてあの不良集団がおれ達をあきらめたのは、あの二人――幸助と龍神――が乱入してきてから一ヶ月経った頃だ。

それからは俺も、あいつ等と一緒に、友達として過ごすようになった。幼馴染み、直ともまた小学校の頃のように過ごすようになった。

直と幸助達も知り合うようになったり、幸助や龍神にも居た幼馴染みとも知り合い、俺達は一緒の時間を、みんなで過ごすようになった。

そんなある日、俺はふと、幸助と龍神に聞いてみた。

「なあ。もしも、光の届かない、走っても走っても抜けられないようなトンネルの中に居るとしたら、どうする？」

「？　どうしたんだ嵐。急に」

「どこか電柱に頭でもぶつけたんじゃないの？」

まあ、そりゃあ意味不明だろうな。

これはただ単に、父親の支配下に置かれている俺が、どうすればいいのかコイツ達に聞いてみたかっただけなのかもしれない。

「いや、別に何も無い。ただ言ってみただけ・・・・・・」

「走る」

幸助がポツリ、と呟いた。

「光が見えるまで、出口を抜けるまで、走る」

一瞬、俺はきょとんとしてしまった。考えもしなかった答えだからだ。

「何言ってるの？　最初に嵐が言ったじゃないか。『光の届かない、走っても走っても抜けられないようなトンネル』だ、って。だから走っても意味ないでしょ」

「ええ！？　意味ねえのか！？」

「はあ。本当に君はバカだね」

「う、うるせえええええええええええええええええええええええ！」

本当に、バカだ。

けど。

「ははははははははははははっ！　まさか、そんな答えが返ってくるとはな！」

「ほ、ほら！　嵐だって笑ってるじゃねえか！」

「これはただ単に君の答えがバカで面白いから笑ってるだけだよ」

「な、なにい！？」

そうだ。

たとえ今は光が見えなくても、見えるまで走ればいい。

そうすればいつか、光をつかめるのかもしれない。

ただがむしゃらに。

ただ一生懸命に。

そうすれば、いつかは――――

俺とアイツ達との出会いの話（後書き）

次からは新章開始です。
今回の『ＳＳ？』は嵐と直がメインでしたが、次の新章は龍神と愛がメイン（というより話の軸）になる予定。

第一話　期末テスト

期末テスト。

それは文字通り、学期末に行われるテストだ。この時期になると学生達はそれぞれの行動を起す。それには大抵、パターンがいくつかある。

まずはパターンその一。『勉強をする』だ。当然だろう。なにしろテストなのだから。学生の本業は勉強。もはや現代の子供達にはそれが本能と化してしまっている。しかし、このように優々と勉強をするような奴らは普段から勉強を行っているいわゆる勝ち組だ。心底腹が立つ。いや、自業自得なんだけれども。

そしてパターンその二。『慌てふためいて勉強する』。このタイプのヤツ等は大抵テスト一週間前から慌てふためいて勉強を始める羽目になる。普段から勉強をしていない、日頃のツケ、というヤツだ。

因みに俺は、後者だ。

俺はみんなの期待は裏切らないぜ？　この俺がみんなのように普段から真面目に勉強するわけ無いじゃないか。最近はガッツリＰＳ３を楽しんでるよ。いやあ～、ネットにつないで知らない人と対戦出来たり、パーティを組めるなんて便利な世の中だ。

・・・・・おかげで俺は、期末テスト一週間前になって慌てふためいているわけだが。

自業自得だ。

それは解っている。だからこそ、俺は今のこの危機的状況から脱出する為に、最大限の努力をしている。

勿論、日本が誇る立派な文化、『ＤＯＧＥＺＡ』という名の努力だ。

「お願いします。勉強を教えてくれるとありがたいです。彩様（土下座）」

「自業自得よバカ」

・・・・・・そう。自業自得だ。

「いや！　本当にすいません！　次からはちゃんと勉強しますから！」

「アンタさあ。前々からよく私にテスト前になって勉強を教わりにくると思ったら、家でゲームして勉強してなかっただけじゃないのよ！」

ついにバレた。

中学の時から俺はこうして土下座して彩に頼み込んでいるのだが、「なんで勉強してないのよ？」みたいな質問が来ると、なあなあではぐらかしてきたのだ。しかし、現在は同じ家で生活している状況。俺のテスト前の実状がついに発覚してしまったのだ。

「自業自得ね」

「お願いしますううううううううううううううううううううううううううう！！」

でも今回ぐらいは仕方が無いじゃん！　だって少し前まで沖縄旅行に行ってたんだから、時間が無かった事は明白じゃん！
因みに、今こうして美少女の幼馴染みに土下座をしてい頼んでいるわけだが、プライドもクソも無い。
しかしテストの前のこの危機的状況に関して、プライド等と言うちっぽけな物は捨て去ろう。男には、やらなければいけない時がある。

「・・・・・・はあ、仕方が無いわね。解ったわよ。教えてあげるわよ」

「あ、ありがとうございます！」

やった！　俺が今まで平均よりも少し上の成績を維持出来たのは彩のおかげだ。今回も、そんな彩の力を借りる事が出来るのなら完璧だ。
今回の一件失った物は俺の男としてのプライドぐらいだ（いや、もう前から失ってるけど）。これぐらいはいくらでもくれてやろう。
プライドを失った今、もう他に失う物は何も無い。

「ついでに、あのゲーム機も売ってくるから」

――――さよなら。俺のＰＳ３。

☆

「さ、勉強を始めるわよ」

「お、おう」

ドサッ、と彩が全教科の教科書を机の上に置く。壮大な光景だ。壮大すぎて吐き気がしそうだ。因みに今、俺達が居るのは一階のリビング。

俺の部屋の机では二人で勉強するには少し狭い。というわけで、家のリビングのテーブルでやろうという事になったのだ。

「まずは国語ね」

彩が俺の隣に座り、教科書とノートを開く。

「テスト範囲は確か、四十五ページから六十五ページまで。じゃあまずは一気に五十ページまで勉強を進めるわよ」

「お願いします」

テスト勉強モードの俺は、基本低姿勢。まあ、教えてもらう身で上から目線だったら、彩でなくても怒るだろう。

彩は俺のノートに書いてある問題の答えを見る。

「じゃあ、ここの問題一の答え合わせからね」

「そこは結構自信あるんだよ」

「本当に？」

彩が怪しそうな目で俺を見る。

「失敬な。これでも国語は得意な方なんだ。あとでほえ面かくなよ？」

低姿勢モードがあっさり解ける。それだけ、問題一の答えに自信があると思って欲しい。

「ふーん。ま、アンタは確かに国語は得意な方だしね。じゃ、まずは答えを見てみましょうか」

問題一は、文章についての問題。その場面の主人公の気持ちを書け、みたいな問題だ。

「『問題一。場面一の、”大切な人と一緒に居る時の主人公”の気持ちを答えなさい』。幸助の答えは・・・・・・ん？」

彩が表情を変える。フッ。俺の答えがあまりにも完璧すぎて言葉を失ったか。

「幸助。これ、本当に自信があるの？」

「へっ？」

「なんで答えが『今日の晩御飯はなんだろう』なのよ！」

「え？　だってその場面は”夕食前”って書いてあったから妥当かなと思って」

「妥当？　駄答の間違いでしょ！？」

酷い言い草だ。

「第一ねえ、こういうのは大抵文章中に答えが・・・・・・って、

ちょっと待って。自身のある国語の一番最初の問題からこれじゃあ、他の教科は……」

「「……」」

そこからだ。

彩が超スパルタ家庭教師モードに入ったのは。

☆

「じゃ、とりあえずココまでね。今から私、夕食作るから」

「あ、ありがとうございます……」

燃え尽きたぜ。真っ白にな。

なんとか国語の勉強が一区切りついたのだが、それでもまだ国語の全部の範囲が終わったわけではない。それに加えて、他の教科も残っている。

「果てしなく遠い道のりだ……」

「日頃からちゃんと勉強していないからよ」

彩があきれたように声をかけてくる。

「夕食を食べたらまた、再開よ」

「やっぱり」

ガクッ、と俺は頭を垂れる。前までは、俺が彩の家に行ったり、彩が俺の家に来たりして勉強を教えてもらってたけど、それでも晩御飯時になると帰るし、そこからは俺一人で勉強だ。

しかし、今は違う。

共同生活、という状況の為、一日中彩と勉強する事となる。

「なあ、彩」

「何？」

「確かに勉強を教えてもらうのはありがたいんだけどさ、この後もやるんだよな？」

「そうよ。言っておくけど、逃げようったってそうはいかないんだからね」

「違う違う。そうじゃないんだ。別に勉強を教えてもらうのは良いよ？　前よりもかなり勉強する事になるし。けどさ、お前はいいのか？　もっと自分の事に時間を使ってもいいんだぜ？　何も俺なんかと付っきりで居なくても」

ぴたっ、と彩の夕食の準備を進めていた手が止まる。

「彩？」

「・・・・・・わよ。別に」

「？」

「いいわよ。別に。・・・・・・好きでやってるんだし」

一瞬、沈黙が訪れた。

彩の手は止まったままだ。そして俺も。

そして、理解した。

「なるほど・・・・・・」

「ッ！？　な、ななな、何が！？」

彩の言った事が一瞬、解らなかった。

しかし、完全に解った。

「――――勉強が好きって、変わってるな」

返事の変代わりに、鍋とヤカンが飛んできた。

☆

現在、龍神と愛は幸助達と同じように、家のリビングのテーブルで、共に勉強していた。龍神はこうしていると、あの共同生活が決まった日に行った『勉強会』の事を思い出す。

あの時はやけに愛が龍神にくっついてきた。

と、思ってチラリと愛を見てみると、今日に限っては少し距離をとっている。普段の勉強の時もくっついてこようとするのだが、今回は違った。

（まあ、こっちの方がやりやすいからいいんだけどね）

しばらく勉強を黙々と進める二人。
そこで突然、愛がピタリと手を止めた。

「？　どうしたの愛ちゃん？」

「りゅーじん・・・・・・」

愛が龍神の目を見つめる。
その目が少し悲しげになっているのを、龍神は見逃さなかった。

「いつまでも、友達で居てね？」

「愛・・・・・ちゃん？」

いつもなら、『彼女』とか、『お嫁さん』とかまでのレベルの事を言うのだが、今日に限っては『友達』だった。
愛の言った意味が解らず考えていると、愛はそのままパタパタと二階へと上がっていってしまった。
リビングには、一人ワケの解らずに居た龍神だけが取り残された。

☆

「終わった～・・・・・・」

ようやく、期末テストが終わったのだ。振り返ってみると、地獄だった。しかし、彩のおかげで、今回のテストの出来はかなり良い。
なんと言っても、学年で十一位の成績だ。因みに他のメンバーは当然のごとく十位以内。神戸さんは一位、それに続き龍神が二位。彩が三位で、紙絵さんが四位。嵐は七位。

しかし、俺にしては今回はかなり頑張った方だろう。
あとは、目前に控えた夏休みを迎えるだけとなった。そんな俺は現在、生徒会室に向かって歩いている。なんでも、紙絵さんから大切な話があるとかなんとか。俺だけでなく、彩、龍神、嵐も呼ばれている。このメンバーでなぜ神戸さんが居ないのか気になったが、まあそれは話を聞けば解るだろう。
軽い足取りで、生徒会室のドアを開ける。そこには、既に俺以外の全員と、祭さんと明さんも居た。

「来たか。幸助」

「おう」

「それじゃあ、みんな揃ったから話すね」

紙絵さんは、見てみると、その表情は険しい。これはただ事では無さそうだ。

「そういえば、神戸さんはなんで呼ばなかったんだ？」

「その事も含めて、だけど・・・・・・まずは率直に言うよ」

紙絵さんは意を決したように、言う。

「愛が、居なくなるかもしれない」

第二話　好きになれてよかった

「神戸さんが・・・・・・転校？」

「うん」

紙絵さんが険しい表情を変えずに言う。

「どこに！？」

「ニューヨーク。今日、出発だって」

「そりゃまた遠い所だな。しかも今日か」

嵐がため息をつきながら言う。というより、遠すぎるだろ。もはや国外じゃねえか。

「でも、どうして突然・・・・・・」

彩が理由を聞き出そうと紙絵さんに尋ねる。それはみんなが思っていた事なので、俺も含めた皆が紙絵さんの言葉に耳を傾ける。

「家の事情、ってやつなんだけどね。実は愛の実家財閥の契約先の人が、是非愛を家の息子の嫁にって・・・・・・それが出来なければ契約を切るって。その契約先に契約を切られると結構厳しいらしくってさ。その契約先の会社、ニューヨークにあるらしいから愛も向こうに行かなきゃいけないし」

「何それ！？」

彩が激怒する。確かに、そんな理由は納得できない。

「いわゆる『政略結婚』ってやつだろーな。それに、その情報は確かだ。愛（アイツ）の実家、少しばかり調べてみたが、その契約先に支えられている部分が大きい。切られると確かに厳しいだろうな。そういうのって、一度崩れると、立て直すのは難しいもんだし」

祭さんが大体の事情をまとめる。

「龍神はいいのか！？」

「何が？」

きょとんとした顔の龍神。今の話を聞いても何も動じていない。

「神戸さんが居なくなるんだぞ！？　あんな脅迫じみた理由で！　ムリヤリ婚約までされるんだぞ！？」

「それがどうしたんだ？　僕には関係無い。それに、選んだのは愛ちゃんだ」

「龍神ッ！！」

ガッ！　と俺は龍神の胸ぐらをつかむ。

「ち、ちょっと！」

彩が俺を止めようとするが、それでも止まる気は、俺には無い。

それに俺には解らなかった。なぜ、龍神がこの件に関して冷たいの

か。いつもの龍神なら、愛ちゃんの事を大切に思っている龍神なら、こんな事は普通言わないだろう。

「だって・・・・・・仕方が無いじゃないか」

「・・・・・・・？」

「僕に一体、何が出来るって言うんだ？　別にお金があるわけじゃない。何か特別な事があるわけじゃない。ただ自分の理由で、わがままを叫んだって、愛ちゃんの家の事情が変わるのか！？　愛ちゃんが幸せになれるのか！？　こうするのが一番良いに決まってるだろ！？」

「・・・・・・」

俺はそっ、と手を離す。

そうか。

ようやく理解した。

龍神（コイツ）は、寂しいわけじゃない。神戸さんが居なくなって悲しいわけじゃない。引き止めたくないというわけじゃない。理不尽な理由に納得しているわけじゃない。

本当は、寂しくて、悲しくて、引き止めたくて、納得していない。

でも、神戸さんがどうすれば一番良いのか、龍神なりに理解しているんだ。

自分のわがままで、神戸さんの幸せを壊すわけにはいかない、って思ってるんだろう。

・・・・・・けどな。

「いや、お前は何も解っちゃいねえ」

「・・・・・・？」

「確かに神戸さんは、家の事を考えてそうしたんだろう。自分の家族の為に、そうしたんだろう。けどな、本当はお前の事を待ってるんじゃねえのか？　本当は引き止めて欲しかったんじゃねえのか？　自分ではどうしようも無いから、だからこそ、龍神（オマエ）になんとかして欲しかったんじゃねえのか！？」

「・・・・・・けど、僕のわがままで、勝手な理由で、止めるわけには・・・・・・」

「通せよッ！！」

「っ！？」

「たまには自分のわがままを！　勝手な理由を！　通せよ！」

しばらく、生徒会室に沈黙が訪れた。

「龍神」

嵐がポツリと、その沈黙を破った。

「お前が知ってる通りに幸助（ソイツ）はバカだからな。バカで、おせっかいだ。・・・・・・だからそろそろ、諦めろ」

嵐が苦笑しながら言う。おせっかいの部分は否定しないが、誰がバカだ。誰が。

しばらくうつむいていた龍神が、そっ、と顔を上げる。何かを決心したような目だった。

「愛ちゃんって、今何処に・・・・・・」

「この時間帯だと多分、もう空港に向かってると思う。荷物は既に今日の学校がある時に運び込んでもらうって言ってたから」

「・・・・・ごめん。僕、少し行く所があるから」

そう言いつつ、龍神が生徒会室を飛び出そうとした。その時。外からババババババババババッ、と激しい音が響いてきた。その音のする方を見てみると、なんと外にヘリコプターが舞い降りてきた。

「なあっ！？」

驚く俺達をよそに、祭さんが窓を開け放つ。外から、激しい音と共に風が、生徒会室になだれ込んでくる。

このヘリコプターは、祭さんが呼んだ物だったのだ。

「乗れよ龍神（おうじさま）。お姫様を追いかけるんだろ？」

まったく。この人にはいつも驚かされる。

☆

愛が今乗っているのは、愛の実家の契約の八割を占める契約先の、『城咲(しろさき)財閥』のリムジンの中だ。

荷物は、龍神の家から指示した物を既にニューヨークに送るようにされている。

このリムジンも、現在は空港に向かっている。そこにある専用の自家用ジェットに乗って、ニューヨークまで一直線だ。

これで、お別れ。

学校の方にはもう転校するように届け出を出してある。先生にも、唯一この事を知っていた莉子にも、黙ってくれるように話してある。幸助達にも勿論、一緒に暮らしていた龍神にまでも秘密だ。

涙は出ない。出てもいいのに。

お別れもせずに、みんなと別れたおかげだろうか。何も感じなかった。いや、本当は色々と思う事が、感じる事があったけど、もう心を閉ざそうとしたからなのかもしれない。

最初は、こんな申し出断ろうと思った。しかし、契約を切られれば、困るのは自分ではない。自分をここまで、必死に育ててくれた父親だ。

父親は別に契約を切られても良いと言っていた。しかし、それはダメだ。自分のわがままで契約を切って、会社が潰れれば困るのは愛達だけではない。社員全員だ。

愛は父親も、父親が営み、育ってきた会社も、その社員もみんな好きだった。

だからこそ、この申し出を受けた。

リムジンが止まった。

今度は自家用ジェットが見える。これに乗れば、もう完全にみんなとはお別れだ。

歩を進め、扉を開け、自家用ジェットの中に入ろうとした。その時。

「愛ちゃん！」

声が聞こえた。普段聞きなれた声。一番大好きな人の声。

「・・・・・・りゅーじん？」

後ろを振り返ると、そこには、龍神が居た。居るハズだ無いのに。

「どうして、ここに？」

「紙絵さんから全部聞いた。そして、祭さんにここまで運んでもらった」

龍神の更に後ろ。そこに、なぜかヘリコプターが一台着陸していて、幸助、嵐、彩、莉子、祭、明の姿が見えた。

こちらに向かって走ってくる。

「・・・・・・そう」

「本当に、これでいいの？」

「・・・・・・うん。これで、いいの」

嘘だ。

この最期の最期で、ぽろりと、涙があふれ出てきた。うれしかった。閉ざそうとした心が再び開いていく。みんなとの思い出が、流れ込んでくる。

これが、愛が自分の心に嘘をついている事の証明だった。

「愛ちゃん・・・・・・僕は、君に・・・・・・」

「りゅーじん」

龍神の言葉を遮った。これ以上聞くと、戻ってしまいそうだから。決心した心が、揺らいできそうだから。

「――――今まで、ありがとう。私、龍神を好きになれて良かった」

目にいっぱいの涙を浮かべて、それだけを言い残し、愛は自家用ジェットの中に消えていった。

「愛ちゃん！」

龍神の言葉もむなしく、そのまま自家用ジェットがニューヨークに向けて飛び立ってしまった。

空港には、納得の出来ない者達だけが残された。

☆

次の日。

俺と彩は、重い足取りで教室へと赴いた。この教室にはもう、神戸さんの姿は無い。

「愛、どうしてるかな」

「さあな。もう向こうの家にでもついたんじゃねえのか？」

その後、嵐と紙絵さんも教室に到着し、いつものメンバーが教室に集合した。しかし、龍神だけは居ない。愛ちゃんの事がショックで家に居るのだろうか。

「菅田、やっぱ来ないわね」

彩が不意に言うと、ガラリと教室に祭さんが現れた。祭さんは教室を見渡し、俺達を見て、にっ、と微笑んだ。

俺達は生徒会室にまた集合した。集まったのは昨日のメンバーに龍神を除いたメンバーだ。しかしなぜか、直ちゃんまで居る。

「な、直!?」

嵐が驚く。この反応を見る限りでは、直ちゃんが来ていた事を、嵐は知らなかったようだ。

「ま、事情は後回しだ。まずは一つ伝える事がある」

「伝える事?」

「龍神の事でな」

祭さんは一言間をあけた後、再び口を開いた。

「今日、龍神(アイツ)は公欠で休んでる。表向きは『生徒会業務』ってしてあるけどな」

「表向き?」

嵐が眉をひそめる。

「そっ。表向き。本当は龍神（アイツ）は、・・・・・・・昨日からニューヨークに行っている」

「ニューヨーク！？」

来ないと思ってたら・・・・・・そういう事だったのかよ。全く。ショックで家に居る、なんて言ってた自分が恥ずかしい。

「なんか頼まれてな。可愛い後輩の頼みだ。無下にも出来ないだろう？　で、お前らに集まって貰ったのは、聞きたい事があったからだ。――――さて、お前等はどうする？」

その時、朝の授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。今から戻っても授業には間に合わないだろう。しかし、そんな事は関係ない。

「「「「「行くッ！！」」」」」

どうやら今日は、公欠が増えるようだ。

☆

丁度その頃。ニューヨークのとある場所で、ある日本人の少年が、高く聳え立つあるビルを見上げていた。

そのビルには『城咲財閥』と英語表記で書かれている。しかし、その少年はそのビルの中に入るわけでもなく、ただじっと見つめていた。

今ただ無闇に入ろうとしても門前払いされるのがオチだ。どうに

かして、その中に入る方法を見つけなければならない。

「愛ちゃん・・・・・・待ってて」

少年はビルに背を向け、ニューヨークの街の中を歩き出す。
今は背を向ける。しかし、いずれ、背を向けずに、向き合う事になるだろう。
少年の背中からは、固い決意が感じられた。

大切な人を助け出す、という固い決意が。

第三話　変な所で凄いわね（前書き）

一応『　　』の部分は本当は英語です。翻訳されている物としてください（笑）

第三話　変な所で凄いわね

大変だった。

いや、何が大変かって言われると、まずは学校を速攻で抜け出して、旅たつための準備に追われて、その後速攻でまた空港にヘリコプターで飛んで、そこからまた祭さんの家の物凄い速さの自家用ジェットでニューヨークまでなんと一時間で一っ飛びですよ？　そりゃあ疲れますって。

と、言うわけで、もう現地に着いた頃には身も心もボロボロなわけですよ。つーか、龍神が一体何処に居るのかも解らないし、そして見つけても何がしたいのかが解らない。

しかも現地に着くや否や祭さんに適当な資金を纏めて渡されて、「ここからは別行動な～」とか言われて勝手に明さんと一緒にあっという間にどこかへ行ってしまうし。

と、言うわけで、俺達は現地で途方にくれている状況だった。

現在時刻は午後十三時。日本との時差は十四時間だから、日本は今、午前三時ぐらいだろうか。ニューヨークに着いたのは確か、こっちの時間で言うと大体午前三時。早すぎるので、さっきまでは祭さんの家が経営するホテルで休んでいた。（つーかあの人の家は一体何やってるんだよ・・・・・・）

「・・・・・・どうする？」

「どうしよう」

いやあ、その場の雰囲気で安易に行動を起すもんじゃないな。今それをひしひしと実感している。そもそも今居る場所も場所だけど、一番問題なのはここは日本とは勝手が違う。そりゃ町並みもそうだ

けど、そもそも言葉が通じない。

「さて、まずは情報収集だね～」

紙絵さんがのんきに言う。相変わらず、この人はいつでもどこでもマイペースだ。

「情報収集っつったってな。まず何処に行けばいいんだ？」

「決まってるじゃん。愛の引越し先。確か、『城咲財閥』ってトコだったよ？」

「にしてもその情報をどうやって収集するんだ？　そもそも言葉も通じないし・・・・・・」

『城咲財閥という所を探しているのですが、何が知りませんか？』

・・・・・・は？

『　城咲財閥？　ああ、それなら知っているよ。この大通りを進んで右に曲がってしばらく行くととても大きなビルが見える。そのビルが城咲財閥だよ。ここらじゃ有名なんだ』

『ありがとうございました』

『どういたしまして』

ぺこりと目の前の男の人に丁寧に頭を下げる紙絵さん。

「よーし、城咲財閥の居場所は解った！　レッツゴー☆」

「ちょっと待て！」

「はい？」

「メチャクチャペラペラじゃん！」

「そりゃあ情報収集にはまずは現地の人と話せないといけないからね☆他にはあと中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語も話せるよ☆」

いや、前々から凄いのは知ってたけどこんなにハイスペックだとは思わなかった。これならこの異国の地に立たされてもなんとかやっていけそうだ。

「アンタって、前々から思ってたけど、変な所で凄いわね」

「お褒めの言葉、有難う☆」

褒めてるのか？　いや、微妙だ。

「でも、場所は解ってもどうするんだ？　行っても門前払いがオチだろーな」

と、嵐がもっともな意見を言う。その通りだ。いくら俺達が今行っても何かが出来るわけじゃない。

「チッチッチッ。行くのは入るためじゃない。菅田君を探すためだよ。菅田君は一足先にＮＹ（ココ）に着いてるんだよ？　そのビルに入るために情報収集をしているはず。だから少なくとも、ビルの周囲には

必ず立ち寄ってる。だから誰か覚えている人が居るかもしれないしね。それにまずは全員が揃わなきゃ☆」

もう紙絵さんは記者じゃなくて探偵にでもなってしまえばいいんじゃないかな。と思った二千十一年夏。ｉｎＮＹ

俺達はそこから言われた場所へと歩き出した。まあ当たり前というかなんというか、日本人の子供がこうやってぞろぞろと歩いていると、やはり周囲の注目を集める。

異国の地で、外国の人の視線を多数感じるのはなんというか慣れない。言葉も通じないのだからなおさらだ。（いや、紙絵さんは通じるか）

因みに今俺達が居るのは、ミッドタウンというニューヨーク市マンハッタンの地区の内の一つらしい。多くの事務所や高層建築物と専門店等があり、商業活動が活発である。グランドセントラル駅・ペンシルベニア駅の二大ターミナルが都市交通の中心として機能している、と今手に持っている携帯の画面に表示されているｗｉｋｉｐｅｄｉａに書いてある。

大通りを進んで、最初の角を右に曲がる。そしてしばらくあるくと、周囲の建物よりもひときわ大きいビルが聳え立っているのが見えた。その丁度真下に『ｓｉｒｏｓａｋｉ　ｂｕｉｌｄｉｎｇ』とご丁寧に描いてある。

そして、入り口にはいかにも屈強そうなガードマンが二人。これはムリヤリ入ろうとしてもまあ無理だな。ある程度の喧嘩（けいけん）を積んだ俺でも五秒で瞬殺される自信がある。というより最早あの二人は完全にゴリラだ。

なんか不用意に近づくと一瞬にして肉塊にされそう。外国人って恐い。（いや、これは俺の勝手なイメージだけれども）

「それじゃあ情報収集っと」

トコトコと可愛らしい美少女が、ゴリラのような男達へと無邪気に歩いてゆく。見ていてとても不安だ。

『お尋ねしたい事があるのですが』

『何だ?』

紙絵さんはカバンから一枚の写真を取り出し、ゴリラ、じゃなくて、善良な警備員（と信じたい）に見せる。見せたのは恐らく、龍神の写真だろう。

『この写真の男の子を知りませんか?』

『男の子?知らないなあ』

言葉は俺には解らないが、どうやらあの反応は知らないのだろう。しかし、もう一人のゴリラ（もとい、善良なる警備員）が

『この男の子なら知ってるよ』

『本当ですか?』

『今日の早朝ぐらいかなあ。このビルをじっと見つめていたよ。やたらじろじろと見るから覚えてたんだ』

『どこに行ったか解りますか?』

『この大通りをそのまま進んで行ったよ。それ以外は解らないんだ。ごめんね』

『ありがとうございました』

『どういたしまして』

そして紙絵さんが再び俺達の所へと戻ってきた。

「う～ん。ハッキリとした事は解らなかったよ。せいぜい、この大通りをそのまま進んで行った事ぐらいかな」

「どうしましょう。確か菅田さんって、携帯にかけてもつながらないのですよね？」

「ああ。ついでに神戸のヤツもつながらねえ」

ここで完全に情報が途絶えてしまった。もう探しようが無い。

「とりあえず、この大通りを行きながら情報収集をしよっか。ここでじっとしてても始まらないし」

紙絵さんを先頭に、俺達はニューヨークのミッドタウンの街中を歩く。見慣れない異国の地。俺ならみんなといなければ不安に駆られるだろう。しかし、龍神も今は恐らく一人だ。こんな所で一人で居て、どう思っているのだろうか。

その後、しばらく歩き続けた、道行く人に聞いてみたりもしたが、結局龍神についても、また、神戸さんに会うためのめぼしい情報も得られなかった。

「とりあえず、休憩しよっか」

紙絵さんの意見にみんな同調し、俺達は近場のカフェへと入った。

「あ～涼しい」

彩が言い出したくなるのも当然だ。外は結構暑い。これも地球温暖化の影響なのだろうか。店内は当然の如く涼しい。俺達は二階の空席を見つけると、そこに座った。

「それじゃあ、注文しに行ってくるけど、みんなのオーダーは？」

とりあえず、みんなはエスプレッソを注文した。紙絵さんは席を立ち、注文をしに行こうとする。正直、女の子一人に注文を任せるのは情けないと思ったが、このメンバーでまともに英語を話せるのは紙絵さんぐらいだし、仕方が無い。

と、いうよりぶっちゃけ歩きすぎてヘトヘトだ。

「全く。張り切って無駄に走り回ったからだ」

俺の心中を察したのか、嵐が鋭いツッコミを入れる。因みに俺はこの中で一番英語が話せないので（俺以外のメンバーが紙絵さん程じゃないにしろ英語をそれなりに話せるのには驚いた。直ちゃんなんてまだ中学生なのに・・・・・）、せめて足で稼ごうと暇そうな人を引っ張り出してきては（本当にごめんなさい）また探しに行く、という事を繰り返してた。

まあ、全くの無駄だったけど。

「あはは。いいよ別に。私一人でもだいじょーぶ☆」

そのまま元気に紙絵さんは一階のカウンターへと向かった。

☆

一階のカウンターに、莉子が向かおうとすると、ふと見てみた店の外に、一人の小さな女の子が居た。その女の子はなにやら一人で泣いている。髪の色と、泣きながらも話している言葉が日本語だったので、莉子は旅行中の家族からはぐれたのかなと推測し、店の外に出て、その女の子に話しかけてみた。

「どうしたの？」

「ううっ。ぐすっ。・・・・・・？　おねえちゃん。誰？」

顔にいっぱいの泣き顔を莉子に向ける。

「おねえちゃんは『莉子』って言うの。あなたの名前は？」

「ぐすっ。風花（ふうか）。」

「風花（ふうか）ちゃんね。一人？」

「うん。お兄ちゃんとお散歩をしてたらはぐれたの」

「そっか。とりあえず、おねえちゃんが飲み物おごってあげるから。おいで？」

「・・・・・・うん」

莉子はその女の子の小さな手をとって、再び店内へと足を踏み入れていった。

第三話　変な所で凄いわね（後書き）

以外（？）と莉子はハイスペックです。

第四話　家族みたいだな

紙絵さんがエスプレッソを持ってきたと思ったら、なんか子供もセットで着いてきた件。

・・・・・・いや、どういう状況！？

「いやあ。店の外で一人で泣いていてさあ。ほっとけ無いじゃん☆」

「うっ。まあ、そりゃそうだけど」

多分俺でも紙絵さんと同じ行動を取ると思う。それに見た所、観光に来た日本人の女の子っぽいし。こんな異国の地で一人で泣くのも多分相当寂しい物があるだろう。

ぶっちゃけ俺でも寂しい。

「名前は？」

と、彩が優しく問いかける。今こそ優しい顔をこの小さな女の子に向けている彩だが、この子が彩の本当の顔を知った時にはどんな顔をするのだろう。

「本当の顔って何よそれ」

「いや、だからその顔・・・・・・ぐぼえっ」

隣の彩から俺の顔面にエルボーが飛んできた。つーか久々だな。心の中読まれるの。それにしても最近、共同生活を始めて彩の攻撃を受ける回数が増えてきた所為か、段々彩の暴行にも慣れてきてる

ぞ。

慣れって恐ろしい・・・・・・

「・・・・・・風花（ふうか）」

ぎゅっ、と紙絵さんの手を握ったまま風花ちゃんが答える。

「風花ちゃん、か。良い名前ね」

「うん。ママがつけてくれたの」

「そっか」

彩が優しい顔で風花ちゃんの頭をなでなでする。う～ん。こうやってると彩も可愛いんだけど、なにしろその本性がな。

「本性が、何？」

「いえ別になにもございませ・・・・・・ごぶあっ！」

今度は右ストレートが飛んできた。ＮＹに来ても絶好調だな。コイツ。

「なんか、一緒に散歩をしてたお兄ちゃんとはぐれちゃったんだって」

なるほど。どうしてこんな小さな子供がこんな所で一人で居たのかと思ったらそういう事だったのか。

「そのお兄ちゃんって、どんな人なのですか？」

直ちゃんが風花ちゃんに優しく問いかける。そして風花ちゃんはすっ、と俺を指差して、

「このお兄ちゃんよりもずっとずっとカッコイイ人」

風花ちゃんが良いヒントをくれた。それなら結構限られてくる。風花ちゃんのお兄ちゃんを見つけるのも時間の問題だな。

「えっと、風花ちゃん。そいつはちょっと多すぎて解らないな」

嵐。殺されたいのか？

「ごめんね。もう少し解りやすく言ってくれない？」

「あはは。仕方が無いよ彩。まだ子供なんだし。にしても、どうしようか。そんな人、吐いて捨てる程居るし☆」

「範囲が広すぎて解りませんね」

・・・・・・やだなあ。泣いてないぜ？

「？　どうした幸助。何泣いてるんだ？」

「は？　泣いてねえし。コレはただ目の涙腺から体液が分泌されてるだけだし」

「・・・・・・それを涙って言うんだけどな」

泣きたくもなるよ。そりゃ。

「とりあえず、菅田君は見つからないんだし、今日は風花ちゃんのお兄ちゃんを探す？」

「そうね。そうしましょう」

とりあえず、今日の所は龍神探索&情報収集を一旦中断し、風花ちゃんのお兄さんを探す事にした。探すと言っても、俺達ちっぽけな人間にしてみればこの大都会であるＮＹのミッドタウンは広い。何か手がかりが無いと探しようが無い。

子供のあんな残酷な発言は手がかりとは認めない。絶対にだ。

「そうだ。風花ちゃん。苗字はなんて言うの？」

「みょーじ．．．．．言っちゃダメって。パパが」

「言っちゃダメ？　どうして？」

「知らない。でも、知らない人の前でみょーじをなのるなってパパが言ってた。お兄ちゃんもその方がいいって」

苗字を名乗ってはいけない？　どういう家庭なんだこの子は。とにかく、苗字が解らないのなら何か他の手がかりが必要だろう。

「えーっと、だったら何処から来たとか覚えてる？　泊まってるホテルとか」

「ううん。解らない。ここ、あんまり来た事無いし、はぐれちゃって今も何処に居るのか解らないから」

困った。
手がかりが無いのでは探しようが無い。
「しょうがない。それなら、街を歩いて地道に探すしかないね。そのお兄ちゃんの方も、今頃は風花ちゃんを探してるハズだし」
とりあえず、俺達は、俺、彩、風花ちゃんと、嵐、直ちゃんと、そして紙絵さんの三つのグループに分かれる事にした。
俺達はそれぞれ風花ちゃんの写真を紙絵さんから手渡され、その写真を道行く人に見せながら、そのお兄ちゃんを探す事にした。
とりあえず、俺達は店の外に出て、三方に分かれる。準備の良い紙絵さんからミッドタウンの地図を渡されてるし、迷う事は恐らく無いだろう。二時間後にはこの店の前で落ち合う予定になっている。

☆

俺達は辺りを適当に風花ちゃんと歩きながら、風花ちゃんのお兄ちゃんを探していた。周りは体格の大きいアメリカ人ばかりなので、せめて風花ちゃんが少しでも見えるように俺は現在、風花ちゃんの肩車をしてあげている状態だ。
「別に写真を見せなくても、こうして肩車してれば、まだ少しでも見つけてもらう可能性が上がるよな」
「そうね。私達はあくまでも、見つけてもらわなきゃいけないんだし」
そうだ。俺達が見つけるのでは無い。向こうが見つけるのだ。
こっちは顔も解らない相手を探さなければいけない。しかし、向こうは風花ちゃんの事を良く知っている。顔だってそうだ。

だから、向こうが見つけやすくする方が風花ちゃんが家族の元へ帰る事の出来る可能性は大きいだろう。
ただ、この肩車、結構疲れるんだよな・・・・・・

「ホラ。頑張りなさい。風花ちゃんも喜んでるわよ。アンタの肩車」

「・・・・・・そりゃ何よりだ」

そういえば最近旅行ラッシュだな。沖縄の次はＮＹかよ。いや、これは旅行目的で来たんじゃないけど。

「愛、大丈夫かしら・・・・・・」

不意に、彩が呟く。

「さあな。でも、なんだかんだで元気にやってるだろ。一応」

そう。一応。
けど、あの別れ際の涙を見る限り、それは本心では無いようだが。

「俺達が今ここで悩んでも仕方が無いだろ。それに、今は愛花ちゃんの兄ちゃんを探す方が先だ」

「・・・・・・うん。そうね。そうよね」

彩も少し元気が出てきたようだ。

「それに、せっかくこんなＮＹに来たんだ。ここは観光気分で楽しみながら探そうぜ。暗い雰囲気で探してても、疲れるだけだ」

「そうね。せっかくだから楽しみましょ」

「たのしもー」

俺の頭の上で元気になった風花ちゃんが笑顔で騒ぐ。

うん。確かに女の子は笑顔が一番だと思う。けどもう少し静かにしてくれるとありがたい。

・・・・・・それにしても、小さな女の子を肩車して女(あや)の子と並んで歩く。この状況はまるで、

「なんかこうしてると、家族みたいだな」

「ふえっ!?　ど、どどど、どうしたの急に!?」

急に慌てふためく彩。

一体どうしたんだコイツは。俺がそんなに、何か変な事を言ったのか？

「い、いや、なんかこの状況的に、日曜日によく見かける家族連れみたいだなーって」

「そ、そう。・・・・・・そうね。似てるわね」

「俺も将来子供を持つとしたら風花ちゃんみたいな元気な子がいいな」

子供は元気が一番だ。少なくとも、俺はそう思う。ただ、元気すぎるのもちょっとアレだけど。

「そ、そうね。元気が一番よね。（わ、私が頑張って元気な赤ちゃ

んを産まなきゃいけないわよね。やっぱり・・・・・・）」

「？　悪い。最後の方が聞こえなかったんだけど」

「い、いいのよ！　聞こえなくて！」

「お、おう。そうか」

その後も、俺達は風花ちゃんのお兄ちゃん探しを続けた。
結局、彩は最後に何を言ったんだ？
それだけがなぜか気になる。

第五話　ミッドタウンプリンセス

それぞれ風花の兄を探すために、探索を開始している頃。莉子は着々と情報を集めていた。道行く人に風花の写真を見せながら、尋ねていくと、「風花を探している少年が居る」という情報を入手した。

しかし、どの人もその少年が何処に行ったかまでは解らなかった。しかし、莉子はそのまま同じ方法で探索を続けた。こうして風花の写真を見せながら探していけば、いずれその少年に出会うかもしれなかったからだ。

そして一つ。

莉子には気になる点があった。

（探索を開始してから今で大体一時間半、か。風花ちゃんが一人で居た時の時間を考えると、そろそろもう少し風花ちゃんを探すための大きな動きがあってもいいんだけどなあ。警察とかさ）

しかし、そういった警察等の動きが一切感じられない。こうして写真を見せて探していけば、いずれ警察の方からコンタクトをとってくるかも知れないと踏んだのだが。

（う～ん。苗字も名乗らなかった事を考えると、こりゃ普通のご家庭じゃないのかもねえ。それに今は・・・・・・）

チラリと莉子は気づかれないように背後の様子を伺う。

丁度、莉子を尾行するようにぴったりと後ろをついてきているスーツ姿の男が二人。周囲とは明らかに浮いていて、不自然だ。

（さっきから着いてくるあの尾行者（ストーカー）の方が気になるしね）

一般の通行人を装ってはいるが、その鋭い目で莉子をにらみつけている。しかも日本人だ。なまじ周囲に溶け込めていない分、日本人ときているので更に浮いている。

（日本人、か・・・・・・こんな所でわざわざ日本人（わたし）を尾行しているのは興味を魅かれるけど、今は撒いておこうかな？）

まだミッドタウン全てを知り尽くしているわけでは無いが、この辺りの地形なら全て頭に叩き込んでいる。

周囲に尾行者を撒くのに使えそうな通路なら頭の中に何種類かリストアップされている。

莉子はタイミングを見計らって走る。同時に、後ろのスーツ姿の男も走ってきた。

（やっぱり尾行してたか）

確信を得る莉子。

すぐに角を曲がり、そして曲がってすぐの所にある裏路地に身を潜める。

しばらくすると、尾行していたスーツ姿の男達は莉子のすぐ側を走り抜けていった。それを確認すると、すっ、と路地から顔を出す莉子。

「成功っと☆」

その後も、スーツ姿の男達に見つからないように気を配りながら捜索を進める莉子。しかし、これといっためぼしい情報はつかめなかった。

「う〜ん。本当に、何処に行ったんだろう？　ここで諦めるわけにもいかないし」

小さな女の子を一人にはしていられない。別に自分が家族が来るまで面倒を見てもいいのだが、できるだけ早く家族に会える方が良いに決まってる。

もうすぐ、約束の二時間が来てしまう。そろそろ集合場所の店に戻ろうと決めた所で、

「あの、少しよろしいですか？」

日本人の少年から、声をかけられた。

☆

嵐と直も探索をしていた。道行く人に写真を見せて、この女の子を捜している人を見なかったか、と尋ねる。幸い、嵐も直もそれなりに英語を話せるので、探す分には困らない。

しかし、一向に見つからない。

「どこに居るんでしょうかね？　風花ちゃんのお兄さん」

「さあな。けど、こうして探し続ければいつかは会えるだろ。こうして俺達が探し回っている事がその兄ちゃんにも伝わるハズだろ」

こうして探し続けてかれこれもう一時間経つ。一時間探し続けても見つからない、と直は少し疲れ気味だったが、嵐は元々これぐらいの時間で探せるとは思ってはいなかったのでこれぐらいでは疲れない。

その時だ。

嵐が、背後から尾行されている事に気づいたのは。
直にも、そして後ろから尾行しているスーツ姿の男に気づかれないように、後ろの様子を伺う。

（二人・・・・・・しかも日本人か。一体どういう事だ？）

今気づいたばかりなので嵐と直を尾行している、と完全に言い切れないが、何度か曲がり角を曲がったりしてもぴったりと着いてくる。

（どうして俺達を？）

その疑問については答えが出なかったが、とりあえず尾行されていて良い事は無い。というより、気づいてしまった今では良い気がしない。

とにかく。

「直。少し走るぞ」

「えっ？」

直にはお構い無しに嵐は直の手を取り、走る。
嵐と直が走ると同時に、背後のスーツ姿の男達も走る。

「チッ。やっぱり追いかけてくるか」

「あ、あのっ。追いかけてくるって？」

「説明は後だ。とにかく走るぞ」

莉子のようにこの辺りの地形を完璧に頭に入れていたならば簡単に撒けただろうが、残念ながらそんな事は嵐には勿論、直にも出来ない。

（な、なんか・・・・・・こうしてると・・・・・・）

直はぎゅっ、と握られた手を見つめる。嵐の発現からするに、自分達は追われているのだろう。そして追ってからこうやって手を握って逃げる自分。

（お姫様みたい・・・・・・）

「？　直、顔が赤いぞ。疲れたか？」

「い、いえっ！　が、頑張って走ります！」

「お、おう・・・・・・？」

嵐には直がなぜ顔が赤いのか、知る由も無かったがとにかく今は（なぜか）尾行してくるスーツ姿の男を撒く事が最優先だ。

（それに、直の顔も心なしか赤いしな。直はああ言っていたが、多分疲れが溜まってるんだろう。急いでケリをつけねえと・・・・・・）

未だ勘違いしている嵐。

（わ、私がお姫様なら嵐さんは王子様・・・・・・）

未だ（色々と）暴走する直。

（チッ。少し荒っぽいが、仕方がねえ。直の体調も良くなさそうだし、強硬手段に出るか）

「直。そこの路地裏に入れ」

「はうっ？」

ハッ、と夢から覚めたような様子の直。

「え、えっと、嵐さんは？」

「いいから」

直を路地裏に先に行かせる嵐。自分もその後に続く。そしてスーツ姿の男達も追って入ってくる。

（かかった）

嵐は走るのを中断し、急停止する。その反動を利用してくるりと一回転する。

「「ッ！？」」

男達もあわてて止まるが、急には止まれない。

「悪いな」

嵐は急停止して体勢の整えられない、無防備な二人の男の内、一

人に右ストレートを放つ。見事にヒットした右ストレートは、すぐさまスーツ姿の男の内の一人の意識を失わせた。
そして、右ストレートを放った反動で、再び一回転。足を大きく蹴り上げ、回転の反動を利用してもう一人の男に一撃与える。その男も、意識を失った。

「あ、嵐さん！？」

「さ、今の内に逃げるぞ」

再び嵐は直の手を取り、逃走を開始する。
ミッドタウンの街中を、王子様（プリンス）とお姫様（プリンセス）が駆け抜ける。

☆

とあるカフェの一角。
莉子は、見知らぬ日本人の少年と共に居た。

「で、話、と言うのは？」

一応聞いてはいるが、莉子にはおおよその見当がついていた。もう集合時間は過ぎているが、目の前の少年を無視するわけにはいかない。
なぜなら。

（もし、私の予想が当たっていれば恐らくこの人は・・・・・・）

少年はエスプレッソを一口飲むと、しばらくして口を開いた。

「えっと、まずはどこからお話すればいいのか・・・・・・」

「この写真の女の子に関係がるんじゃないですか？」

すっ、と莉子はテーブルの上に、風花の写真を置く。それを見た少年はピクッ、と眉をかすかに動かした。

（ビンゴ・・・・・・・かな）

自分の予想に確信を持つ莉子。

「そう。この写真の女の子・・・・・・・いえ、風花は、」

そして、一つ間を置いて、少年は再び口を開いた。

「僕の妹です」

第六話　こーすけはバカだね

「妹、という事は、アナタが風花ちゃんのお兄さんですね？」

「はい」

やっぱり、と莉子は自分の予想に確信を持つ。ワザワザこの場で、見ず知らずの日本人に話しかけてくる日本人は、風花の家族以外には考えられなかったからだ。

「それでは、さっそく風花ちゃんを呼びましょうか」

と、莉子はポケットの中から携帯を取り出す。そしてキーを操作しようとした時、

「いえ。それはまた後で。・・・・・・少々、お話しませんか？」

「お話、ですか？　風花ちゃんが心配では無いのですか？」

意外な少年の言葉に、莉子は少し眉をひそめる。

「心配でした。・・・・・・さっきまでは」

「さっきまでは？」

「はい。実はですね、僕がアナタを見つけたのは十分程前なんですよ」

「だったら、どうして真っ先に声をかけなかったんですか？」

「いえ、その・・・・・・こちらにも少々事情がありまして・・・・・」

ここで、言葉をにごらせる少年。莉子はここで深く追求するのをやめた。誰にでも、言いたくない事の一つや二つはあるだろう。

莉子は気になる事を質問した。

「ならどうして、私に話しかけてきたんですか?」

「信頼出来ると思ったからです」

ニッコリと微笑みかける少年。パッと見はまさしく爽やかな青年、という所だろうか。

「僕は見てました。必死になって見ず知らずの風花の為に、僕を探しているアナタを。だからこそ、信頼出来ると思い、声をかけたのです」

「・・・・・・そうですか」

信頼、と言うが、それは恐らく本当だろう。しかし、莉子が気になるのは、どうして信頼するまで声をかけなかったのか、だ。

☆

莉子が、少年に会う三十分前。

幸助と彩、そして風花は、集合場所の店の近くまで来ていた。

・・・・・・最悪だ。

何が最悪かって、もうまさしく今の状況の事だ。

そんな今の状況をかいつまんで説明すると、何やら日本人のスーツ姿の男二人が目の前に。

そして俺達に「そのお方を返せ」とかなんとか言ってくる。実に怪しい。しかし無駄に体がガッシリとしてるのが少々問題だが。

「風花ちゃん？」

「なーに？　こーすけ」

こんな小さな女の子にすら呼び捨てだ。泣けてくる。最早年上の威厳もクソも無い。

「えっと、お兄ちゃんってかなりガッシリした体つきだね？」

「？　これ、お兄ちゃんじゃないよ？」

「えっ？　そうなの？」

「うん。お兄ちゃんはもっとカッコよくて優しいもん。こんなに「ぶさいく」じゃないよ」

なんだろう。心なしか目の前のスーツ姿の男が二人が涙目になってるような気がする。・・・・・・気持ちは解る。子供って残酷だよな。

「こーすけはバカだね。こんな「ぶさいく」をお兄ちゃんと間違え

るなんて。バカすぎるよ。「ぶさいく」だし」

別にこれは涙じゃないぜ？　目から出た汗だぜ？　決して涙じゃないんだからなあああああああああああああああああああああああ！！

「アンタ達・・・・・・なんで泣いてるの？」

「女には解らない・・・・・・男の涙ってヤツだ」

もうやめよう。この争いは不毛にも程がある。

「と、とにかく、風花ちゃんのお兄ちゃんじゃねえのならこれにて退散・・・・・・」

「待て。見逃すと思っているのか？」

ですよねー。

涙目となったスーツ姿の男達が、俺達にじりじりと詰め寄る。というか風花（コイツ）は一体何者なんだ？　こんな涙目のガッシリしたヤツ等に「そのお方」って呼ばせるなんて。

それにこんな大の男三人を（俺含む）涙目にさせるなんてかなりの実力を持っているしな・・・・・・！

「で、どうするの？　素直に渡す？」

「バカ言え。こんないかにも怪しい涙目のヤツ等に渡せるかよ」

「それを言うならアンタも十分怪しいのだけど・・・・・・」

「・・・・・・これは涙じゃねえ。目から溢れた青春の汗だ」

「ますますワケが解らないのだけど・・・・・・」

いや、解らなくてもいいから。マジで。

「とにかく逃げるっ！」

「ッ！？　ま、待て！」

昔、嵐の喧嘩に付き合ってたおかげで多少の実力があると自負してはいるが、さすがにこんなにガッシリとしたヤツ等に勝てるとは思えない。

・・・・・・だって本当にガッシリしてて勝てる気がしねえんだもん！（泣）

「彩！　早く走れ！」

「解ってるわよ！」

と、言うや否や、彩は俺を一気に抜き去ってしまった。

・・・・・・そういえば、アイツって結構運動神経が良いんだよな。陸上の助っ人もやってたし。

このままでは、確実に置いていかれるだろう。

・・・・・・

「ちょっ！　待ってくれえええええええええええええええええええ！！」

「は、はあっ!?　アンタが早く走れって言ったんじゃない!」

「出来れば合わせていただくとありがたいですううううううううううううう!」

彩は本当に足が速い。普通に勝負したとしても負けるだろう。ましてや、

「こーすけがんばれー!」

俺の頭の上できゃっきゃっと騒いでいる風花ちゃんを肩車しながらだとかなりキツイ。そして、なんやかんやで俺のペースにあわせてくれる彩には感謝だ。

「で、どーするのよ!?」

「とにかく逃げろ!」

「倒せないの!?　アンタ、中学の頃結構喧嘩してたんでしょ!?　強いんじゃないの!?」

「三人ぐらいなら俺一人でもなんとかなるんだが、それはあくまでも不良(バカ)とやった時の話だ!　あんなガッシリしたヤツ等は規格外だ!」

事前に気づいていたのならばある程度の対処法を考えていたのならば、それも今となっては無理だろう。

「そ、そうだ!　良い事を思いついた!」

「何！？」

「あっちは風花ちゃんを狙ってるんだよな！？」

「そうね」

「それを逆手に取る！　とにかく俺に任せろっ！」

そうだ。今思うとあっちの狙いは風花ちゃんだ。だったら、それなりの対応策はある。

「わ、解ったわ。期待してるわよ」

「おう！」

ざっ、と俺は急停止し、回れ右する。追いかけてくる涙目スーツ姿の男は止まらずに追いかけてくる。（いいかげん涙拭けよ．．．．．）

「お前ら！　止まれ！」

「「ッ！？」」

俺の掛け声に、涙目スーツ姿の二人も止まる。隣では彩が「どうするの？」みたいな目で俺を見る。周囲の通行人も、日本語だけど俺の大声に驚いたのか、チラチラと俺達を見る。

「お前らあ！　『このお方』がどうなってもいいのかあ！」

俺は肩車から風花ちゃんを降ろし、バンッ、と前に突き出す。風

花ちゃんはワケが解らないと言った表情だったが、「どーなってもいーのかー」と笑顔で騒いでいる。

「ただの脅迫じゃないっ！！」

ばごんっ、と彩が俺の頭を殴る。メチャクチャ痛い。そうか。俺がバカなのって彩に殴られまくったからなのかもしれない。

「いや、だって仕方がねーじゃん！？」

「アンタを信じた私がバカだったわ」

それにしても、ここがＮＹでよかった。もしも日本語が通じていたら俺もただの脅迫者にしかならなかったからな。

もしくは、ただのロリコン変質脅迫者というとんでもないレッテルを貼られる所だった。

「このロリコン」

「彩！？　違うからな！？　言っておくけど俺はロリコンでも幼女大好きでも無いからな！？」

いや、確かに幼女を両手で持ち上げてドヤ顔しているとそう思われても仕方が無いのだけれども。

「よーし、そこを動くなよー。動けば彩（コイツ）の鉄拳が来るからな？　マジ痛いんだぞコレ。これを何発もくらった所為で俺の頭がおかしくなってバカとかなんとか言われるようになったんだからな？」

「何私の所為にしてるのよ」

ドゴムッ、と俺の腹部に彩の拳が突き刺さる。風花ちゃんが「いーぞーもっとやれー」とか言っている。一体どこで覚えたんだ。そんな言葉。

じりじり、と俺と彩は後ずさる、はたから見たら「何事だ」とか思う光景だが、そんな事を気にしていられない。

その後、なんとか俺達は逃げる事に成功した。

まあ後で冷静になって考えてみると、なんとも外道な作戦だったのだが、まあ仕方が無い。我ながら危機回避能力は高いと言える。

そして俺と彩は、なんとか集合時間ギリギリに元のカフェへとやってきた。

――――しかし、なぜか紙絵さんだけは居なかった。

第七話　直感ですけどね

「少し話しが長くなりましたね。そろそろ、風花の所へ行きましょうか」

「そうですね。風花ちゃんも喜ぶと思います。心配だったでしょう？」

莉子はポケットから携帯電話を取り出す。風花を預かっていたのは幸助だったので、アドレス帳から幸助の名前を見つけ、メール作成画面へと入る。

「ええ。けど、アナタのお友達に良くして下さってるでしょうから、きっと大丈夫でしょう」

「あはは。確かに、預けてる人がちゃんと可愛がってくれてるハズで・・・・・・」

ピタッ、と莉子の手が止まる。それを見た少年が「どうかしましたか？」と声をかける。

「どうして・・・・・・今、『風花ちゃんを私の友達が預かってる事を知っている』のですか？」

「・・・・・・」

少年は答えない。しかし、莉子は続ける。

「私は、風花ちゃんが誰かに預かってもらってる、という意図を匂

わせるような発言はしましたが、『友達が預かっている』とは一言も言ってません」

「これは・・・・・僕のミスですね」

少年は観念したように言葉を紡ぐ。

「まさか、さっきのスーツ姿の男も・・・・・・」

「はい。僕の部下、とでも言いましょうか」

「部下・・・・・・？」

莉子は眉をひそめる。あのスーツ姿の男とこの少年がなんらかの関係にあるとは思ったのだが、まさか『部下』と『上司』の関係だとは思わなかった。しかし、この少年の方が立場が上らしい。

風花が苗字も名乗れなかったのを考えると、かなりの家柄だと考えられる。

「そうです。僕があの人達に風花の捜索を頼んだのです。因みに、彼らとは連絡も取り合っていました。しかしどうやら、アナタのお友達に事情を説明する前に逃げられたみたいですが」

少年は苦笑する。対して、内心「さすが」と呟く莉子。それは勿論、幸助達に向かってだ。

「話の腰を折るようですが、少し悩み聞いてもらえませんか？」

「・・・・・・どうぞ」

周囲に莉子に危害を加えるような人影は見当たらない。それを確認しての返答だった。そして、少年の話が始まる。

「まず結論から言うと、僕、結婚させられちゃうんですよ」

「け、結婚？」

突然の言葉にあっけにとられる莉子。対する少年はそのさわやかな笑顔を保ったままだ。しかし『させられる』と言っている以上、それが望まぬ物だという事が。

そこで不意に、愛の顔を思い出した莉子。あの少女を救い出す、とはいかなくても、せめて話し合いの場だけでも設けたい。

「はい。なんでも父が見つけてきた人らしいんですけどね。父もとても気に入ってる方で、強引な手段で連れて来たみたいです」

そういうような話は、愛の件があって身近に感じられる莉子。同時に、ある可能性に行き当たった。

「その人と一度実際に会ってお話したんですけど、とても綺麗な方でした。礼儀も良かったですし」

「それでは別に悩む必要など無いのでは？」

「そうですね。そうかもしれません。けど、実際に会ってみて、その人と僕は結婚してはいけないな、って思ったんです。その人の中には常に別の人が居ます。――――僕じゃなくてね。だからあの人は、その人と結ばれるべきなんです。・・・・・・直感ですけどね」

ははは、と少し微笑みながら言う少年。少年の『直感』という言

葉に親近感を覚える莉子。

「直感、ですか。解ります。私も、直感は信じるタイプですから。そうだ。よろしければ名前を教えていただきませんか？　――――差し支えなければ、苗字も」

もしも名乗るのならば、確かめる事が出来る。莉子の『直感』が当たっているのかどうかが。

「苗字、もですか・・・・・・・そうですね。アナタになら、名乗ってもよさそうですね。僕の直感を信じましょうか」

少年が、口を開く。

☆

「あ、あれ？　はあっ、はあっ、か、紙絵さん・・・・・・・は？」

「どうした幸助。随分息が切れてるが」

「ち、ちょっと、な・・・・・・変なヤツ等に追い掛け回されて・・・・・・」

あの涙目スーツ姿の男達は勿論『変なヤツ等』にカテゴリされても問題無いだろう。

「変なヤツ等？　もしかして、そいつらはスーツ姿の日本人か？」

「？　そうだけど。どうして嵐が？」

「実はな、俺と直もそいつ等に追い掛け回されてたんだよ。何とか倒したが」

「ええっ！？」

嵐と直ちゃんも同じように追い掛け回された事には驚いたけど、嵐があんなガッシリした筋肉質のヤツ等を倒した事にも驚く。

「よくあんな体つきがガッシリしたような涙目変態男達を倒せたな」

「は？　ガッシリ？　涙目？　別に体格は普通だったが？　それに涙目ってなんだよ」

・・・・・・どうやら俺達は知らない間にとんでもない貧乏くじを引いていたようだ。隣の彩も苦々しい顔をしている。

「で、結局莉子は居るの？　姿が見えないけど」

「そ、それが・・・・・・」

直ちゃんが言いづらそうにしている。まさかとは思うが・・・・・・

「実はな、まだ紙絵の奴は来ていないんだ」

「なっ！？」

紙絵さんは時間はしっかりと守るタイプだ。今まで、遅刻はおろか、ギリギリのタイミングで登校、という所も見た事が無い。

原稿の入稿も新聞部では一番早い。『神速入稿の莉子』とまで呼ばれるぐらいだ。

「まさかとは思いますが・・・・・・莉子さんも・・・・・・」

紙絵さんを一人にしたのがまずかった。せめて誰か一人ぐらいついて行くべきだった。

「急いで探そう」

俺達は、紙絵さんを探すために動き出そうとした。するとその時、俺の携帯のポケットからメールの受信音が鳴り響いた。

紙絵さんからだった。

「か、紙絵さん!?」

全員の視線が、俺の携帯に集まる。俺は急いで携帯のメールボックスを開いた。

みんなへ。

風花ちゃんのお兄さんをみつけたよ☆

今、一緒に居るから、風花ちゃんを連れて来てね。

下記の場所に、みんなで集合してください。

「よかった。無事みたいね」

彩がほっ、と胸をなでおろす。本当によかった。無事で。それにしても、さすが紙絵さん。まさか本当に風花ちゃんのお兄ちゃんを見つけ出すなんて。

メールはまだ続いていた。下にスクロールすると、今度はその集合場所が書かれていた。その集合場所に、みんな目を見張る。

「こ、ここって・・・・・・」

俺の頭上で、風花ちゃんが何も知らずに楽しそうに、無邪気に笑っていた。

☆

「それでは行きましょうか」

「はい。ああそうだ。アナタのお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

「私の名前ですか。紙絵莉子、と申します」

「あはは。そう固くならなくてもいいですよ。莉子さん」

「そうですか。そう言っていただくとありがたいです」

にこっ、と莉子は微笑む。

そして、その少年の名を口にする。

「――――『城咲（しろさき）』風人（ふうと）さん」

集合場所は、城咲ビルだ。

☆

城咲財閥は、昨年、拠点を日本からＮＹへと移した。そして城咲ビルのあるフロアには、ホテルのような部屋がいくつもある。これは城咲家の者の部屋だ。しかし、リビングや大広間のような所もある事を考えると、ホテルというより家という方が近いのかもしれない。

そしてその内の一室に、愛は居た。

未だ日本に居た頃の学園の制服を身にまとっている。

日本（あっち）ではもうすぐ夏休みだ。

夏休みと言えば中学の頃、よく龍神と一緒に図書館で毎日勉強してた事を思い出す。

高層ビルの窓ガラス越しに、ミッドタウンの風景を眺める。この城咲ビルはミッドタウンの中のどの高層ビルよりも、大きく、高い。

（りゅーじん・・・・・・）

まさか、あんな所まで駆けつけてくるとは思わなかった。

けど、こんどこそ、本当にお別れだ。

ＮＹ（こんなところ）にまで、自分は来てしまったのだから。

あの頃が、あの声が、急に懐かしく感じる。

でも、もう、あの頃には戻れない。

あの声を聞く事も出来ない。

コンコン、と、背後のドアからノック音が聞こえる。

こっちに来てから、愛はずっと部屋に閉じこもっている。食事は部屋に運ばれてくるようになっているので、また食事か何かなのだ

ろうと思った。
けど、今はどうにも一人で居たい。せめて会う事が叶わないのならば、あの頃の思い出を思い出していたい。

「すみません・・・・・・今は一人に、させてください・・・・・・」

それだけ言うと、また愛はあの頃の思い出を、龍神の声を思い出そうとする。

しかし。

「愛ちゃん?」

「・・・・・・ッ!?」

声を思い出すまでも無かった。

ドアの向こうに、その人が居たのだから。

第八話　助けてあげる

龍神が祭の助けを借りてＮＹに着いた時にまず始めたのは、情報収集だった。どうすればあのビルの中に入る事が出来るのか、そして、愛は現在何処に居るのか、だ。

観光客を装い、あの城咲ビルについての情報を集めていくと、どうやら城咲財閥はＮＹに拠点を移したのは昨年の出来事らしい。そしてそこの跡取り息子の嫁を、父親がムリヤリ連れてきた、等、めぼしい情報（ウワサ）は集まった。しかし、さすがにどうすればビルの中に入る事が出来るのかは解らなかった。

しかし、今日、突然祭が龍神の前に現れた。用意されたホテルには全く戻っていない。どうやって位置をつかんだのかを聞くと、どうやら衛星から見つけた、らしい。そして話を聞いてみると、幸助達も駆けつけてきた事を知った。

驚く龍神に、ただ祭はだまってビルの中に入る手引きをした、というわけだ。現在、『ビルの中を見学する見学者』という形でなんとか中に入り、愛の部屋の前までは行き着く事が出来た。しかし、本来ならばこのフロアは見学者が居るべき所では無い。

そして声をかけようと一度ドアをノックすると、愛の声が返ってきた。

「すみません……今は一人に、させてください……」

たった一日声を聞いていないだけなのに、随分久しぶりに聞いたように感じる。やはり愛は、ノックをしたのが龍神とは気づいていないらしい。

そして久しぶりに聞いた声は心なしか、悲しげに感じた。何か、自分の心を押し殺しているかのような声。

何を話しせばいいのか解らない。
けど、それでも。
龍神は自然に、口を開いた。

「愛ちゃん？」

「・・・・・・ッ！？」

驚いている。
当然だ。一度は「さよなら」をした相手が、まさかこんな所まで追いかけてくるとは思わないだろう。

「りゅー・・・・・じん？　どうして、ここに・・・・・・？」

「話をしに来た」

そうだ。自分は、話をしに来ただけなのだ。・・・・・・いや、それは違うのかもしれない。ただ、あのままで別れるのはただ単に納得が出来なくて、嫌だったからなのかもしれない。

「幸助達も来てる」

「・・・・・・」

ドアの向こうの愛に返事は無い。しかし、かまわず龍神は言葉を紡ぐ。

「僕は、あのまま愛ちゃんとと別れる事なんて納得が出来ない。たしかに家の事情もあるのかもしれない。だけど、納得出来ないんだ」

龍神は、愛に向かって話しかける中でいつもの自分らしく無いな、と思っていた。それは龍神の中で自分が知らない間に起こった変化。

（幸助の所為だな。こんなムチャクチャな、理屈も無い事を言い出したのは・・・・・・）

これは龍神のわがままだ。

それは、龍神自身が理解している。けど、それでも、言い出さずにはいられない。このまま「さよなら」なんて嫌だった。

「愛ちゃん。僕と、僕達と一緒に、帰ろう？」

☆

嬉しかった。

龍神が自分の為にこんな所まで駆けつけてくれた事が、嬉しかった。

そのキモチは否定しない。

「愛ちゃん。僕と、僕達と一緒に、帰ろう？」

今までの龍神と、今、愛の目の前に居る龍神は明らかに依然とは違う。たった一日会っていないだけなのに。

龍神は、基本的には他人へは無関心だ。仲の良い幸助や嵐の事に関しても、無関心とは言わないが、どこか馴れ合う所を恐れている感じがする。

自分の意見を強く主張する事もあまり無かった。そしてその数少ない『自分の主張』も、自分が他人と距離を置く為の物だ。

出来るだけ、人とは関わらず。

出来るだけ、人と関わろうとしない。

出来るだけ、自分の主張は避ける。

それが、愛の見てきた龍神だった。

愛には、どうして龍神がそうなってしまったのかを知っている。

それは、自分が、愛自身が一番よく解っている。

龍神は、孤児だった。

生まれてきて両親は交通事故で他界。引き取られた親戚の家では周りになじめなかった所為なのか、親戚の者達もそんな龍神をうっとおしく思い、施設へと入れた。

龍神はその親戚という環境に馴染もうとした。それなりにではあるが、親戚の面々も信頼していた。ただ、元々内気な性格だった所為かその事を感じ取ってもらえず、実質的には捨てられた。

そこからなのだろう。龍神が周囲に関心を置かなくなった。例え関心を持っても、信頼しても、いずれは居なくなる。捨てられる。そう思っているのだろう。

愛が龍神と出会ったのは、その孤児院でだった。元々父が支援をしていた孤児院だ。愛もよく孤児院の中の子供達と遊んでいた。

そんな中、ある日龍神と出会った。その頃の龍神は、今よりももっと周囲に関心が無かった。人とは一切関わらなかった。関わろうともしなかった。話をする事すら、恐れていた。

愛は、出会った時になんとなくだが解っていた。

（――――この人は、ただ失うのが恐いんだ）

と。

周囲に関心を持てば、いずれは裏切られるかもしれない。いずれは、失う。

自分の信頼する者が、大切な人が、自分の前から居なくなるのを、極端に恐れていた。

だから本を読む。本を読んでいると、自分だけの世界に浸れるから。他人と関わる必要が無いから。もう何も、失わなくて済むから。

そして愛は、本を読み続けるだけの龍神の前に現れた。そして、手をさしのべてこう言った。

「私が、助けてあげる。だから、大丈夫。もう恐がる必要なんて無いよ」

その時龍神は、そっ、と、顔を上げた。

そこから龍神は少しずつだが、徐々に他人へと興味をよせるようになった。今でも他人への興味はそれほどあるとは言えないが、これでもかなりマシになった方だ。

そして、龍神の目に少しずつ輝きも戻ってきた。愛は、龍神と一緒に居る時間が長かった。自分を、大切に思ってくれているのが解った。そして愛も、いつの間にか、自分を大切に想ってくれている龍神の事を好きになっていた。

好きになった理由なんて要らない。ただ好きになってしまったのならそれでいい。

そんな龍神が、他人との関わりを避けようとする龍神が、自分の意見を主張しない龍神が、愛が大切に想っている龍神が、愛にこう言ったのだ。自分の意思で。初めてのわがままを。

――――僕達と、僕と一緒に帰ろう？

「どう、して・・・・・・？」

愛は必死に言葉を搾り出した。嬉しかったからだ。自分の為に、わがままを言ってくれた龍神が。そして、本当に自分を必要としてくれていると解ったからだ。今にも泣き崩れてしまいそうだ。しかし、こらえる。ここで崩れてしまうと、決心が鈍ってしまう。

「今度は僕の番だから。僕が助けてあげる。だから大丈夫。もう、苦しむ必要なんて無いよ」

「・・・・・・ッ！！」

愛は今、気づいた。

自分が苦しんでいる事に。

今までは自分の気持ちを押し殺していたから気づかなかった。けど、龍神と会話をして、その押し殺していた気持ちが一気にあふれ出した。

自分は、苦しんでいるのだ。

龍神と別れる事に。友達（みんな）と別れる事に。

「りゅーじん・・・・・・私、は・・・・・・」

☆

「さて」

俺達は現在、城咲ビルの目の前に来ていた。どうやらまだ紙絵さん達は来ていないようだ。待ち続ける俺達に対して、俺達にはやるべき事があった。

「どうする？　嵐。風人とかいうやつ。縛り上げる？　それともコンクリ詰め？」

敵の親玉的存在がワザワザ出向いて来るんだ。こんなチャンスは滅多にない。さっさと脅迫して神戸さんと龍神を連れて帰ろう。

「その前にアンタを縛り上げるわよ」

ドゴムッ、と俺の腹部にＮＹでも絶好調の右ストレートが飛んできた。なんだか心なしか、最近彩のアバスレパワーが上がってきているような気がする。

「誰がアバスレだって？」

「相変わらず勘が鋭（するど）・・・・・・げふんげふん。誰も彩だなんて言ってな・・・・・・ぎゃあああッ！！」

周囲の通行人がなにやらこっちに熱い視線を向けている。それだけならもうこっちに来て慣れた。しかし、周囲の人間が『オー！ジャパニーズ”スモウ”！』とか言っている。

『スモウ』とは恐らく『相撲』の事だろう。

けど違う。俺の知っている相撲は頻繁に右ストレートで顔面を殴

り飛ばしてきたり、関節をぶった切ったり、足を複雑骨折したりはしない。

これは『相撲』なんかじゃない。一方的な虐殺だ。それも理不尽な。

「おいおいお前ら。程ほどにしておけよ？　後で飛び散った血を処理するのはこの町の人なんだぞ？」

そんな注意をする前にまずは血が出る事を阻止して欲しい。

「みんなー。お待たせー！」

俺の意識が遠のく中、紙絵さんの声が聞こえてきた。見てみると、隣にさわやか系イケメン男子が居る。

どうやらあれが・・・・・・

「城咲風人（しろさきふうと）、か」

隣で嵐が呟く。そして風人は俺達を見ると、一礼する。

「こんにちは。城咲風人です。風花を預かっていただいて、ありがとうございました」

うっ。礼儀正しいやつ。血まみれになった俺の側に居た風花ちゃんが「お兄ちゃん！」と言ってトタトタと走ってゆく。風人にだきつく風花ちゃん。

「ごめんね。風花。僕が目を離したばっかりに」

「ごめんなさい。私が勝手な事したから・・・・・・でも大丈夫だったよ。こーすけ達と一緒だったもん」

「そうか。よかったな」

にこっ、と微笑む風人。これで俺達の役目は終わりだ。

「みなさん。風花を保護してくださってありがとうございました。・・・・・・突然で申し訳ございませんが、少し僕に協力してくださいませんか？」

「協力？」

嵐が風人の言葉に反応する。

「はい。簡単に言いますと、」

風人は、なんの悪気も無く、にこっ、と微笑む。

「僕の婚約発表（パーティー）を、ぶち壊して欲しいんです」

第九話　大きく出た方がいいよな

俺達は、祭さんの会社が経営するというホテルへと向かった。今日は体を休めよう、という事になったからだ。

さすが祭さんの会社が経営するホテル、という所だろうか。まさしくその設備は高級ホテルで、中はとても豪勢に作られていた。

俺達は、男子と女子の二つの部屋に分かれて入った。・・・・・・因みに、途中で祭さんと一緒に現れ、合流した龍神も一緒に居る。龍神が俺達の前に現れた時には神戸さんの姿は・・・・・・無かった。

まず、俺達は龍神に事情を聞く事にした。急にＮＹまで飛んだ事では無い。龍神が神戸さんに会って来た事は解っている。だから、神戸さんとの話の中で何があったのか、だ。

そして、龍神が話し始めた。祭さんの手引きで城咲ビルの中に入った事。神戸さんと話をした事。そして、その結果・・・・・・

「愛ちゃんは、帰りたがっている」

龍神が言った。

「本心はそうだ。・・・・・・だけど今の状況ではそれが出来ない」

それが、答え。

だけど、自分の本心を抑えなければいけない状況に神戸さんは置かれている。だから、一旦龍神は帰ってきたのだろう。

「『神戸家が婚約から手を引けば契約を打ち切る』。それが城咲財閥の要求だ。だからどうやって手をうてばいいのか解らないんだ・・

・・・・」

空気が重くのしかかるような気がした。・・・・・・でも。

「その件だが、方法が無いわけでもない」

嵐がその重苦しい空気を断ち切るかのように言った。龍神が、嵐の言葉に反応する。

「ッ！？」

そしてその龍神の反応を見た嵐は、言葉を紡いだ。

「俺達は今日、その城咲財閥の、神戸の婚約者に会ったんだ」

今度は俺達が説明する番だった。俺達が龍神を追ってＮＹ（ここ）まで来た事。そしてひょんな事から城咲財閥の娘の風花ちゃんと出会った事。そして風人と会った事。そして、自分の婚約発表（パーティ）を潰してくれと頼んだ事。

「つまり風人は、こんなムリヤリな婚約は認めてないんだ。だからまだ希望が消えたわけじゃない。神戸を連れ戻すチャンスはまだ消えていないんだ」

「・・・・・まさか、君達がそんな事になっていたとはね。それにその悪運も、驚嘆に値するよ。・・・・・・いや、悪運が強いのは僕の方かな？」

ニコリと龍神が微笑んだ。合流してから龍神が初めて見せた笑顔だった。

「で、その婚約発表（パーティ）は何時（いつ）なんだい？」

「「明日」」

「早ッ！？」

うん。俺達も聞いた時には驚いた。だって急すぎるって思ったし。しかも笑顔でニッコリと「ぶち壊してくれますよね？」って言い切ったしな。

「ど、どうする気なんだい？」

「作戦はあるにはあるが、お前がやるかやらないかだ」

「？」

嵐がにやりと、いたずらっぽく微笑んだ。

☆

「どうするのかしら・・・・・・」

「どうするのでしょうか・・・・・・」

「どうするのでしょうね・・・・・・」

はあ、と三人の少女はため息をつく。現在女子の部屋に居るのは彩、直、そして明だ。

「そういえば明さん。祭さんは？」

「何やら難しそうな顔をして電話したりパソコンに向かっていたりしてました」

「・・・・・・祭さんが難しそうな顔？」

彩が顔をしかめる。

「はい」

直は、今まで見てきた祭を思い出す。

そしてその結果。

「なんだかイメージできません」

「できないわよね」

「・・・・・・お気持ちは解りますが」

明も苦虫を噛み潰したような顔をしている。現在、三人は浴場から上がった後だ。パジャマに着替えてはいるが、まだ若干顔が火照っている。

「けど本当に難しいような顔をして、何をやっているんでしょうね？」

「あはは。私の察する所では無いですから解りませ・・・・・・？」

明が、自分の事をじーっと見てくる直の事に気がつき、質問する。

「明さん、大きいですね・・・・・・」

「お、大きい？　・・・・・・っっっ！」

自分の胸をあわてて隠す明。現在顔が火照っているのは風呂上りのせいではない。

「そ、そ、そ、そんな事無いですよ！？　私なんてそんなに大した大きさじゃ・・・・・・」

「明さんで大した大きさじゃないなら私は・・・・・・ううっ」

直は若干涙目だ。

「・・・・・・明さん。そのパジャマ、サイズ合ってますか？　なんだかとてもギリギリそうですけど」

ゆらりと何かのダメージを受けた後のように立ち上がる彩。

「あっ。はい。そうですね。前まではそうでもなかったんですけど最近はどうも・・・・・・特に胸の辺りがキツく・・・・・・あっ！」

明はあわてて口を防ぐがもう遅い。直がゆらりと立ち上がる。

「どうりでそのパジャマ、さっきからボタンがギチギチと言ってたんですね・・・・・・」

「い、いえっ。言ってませんよ！？」

ぶっちゃけると、それは直の被害妄想だったのだが、確かにパジャマは苦しそうだ。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

その後、明に向かって二人の少女が襲い掛かってきた。

☆

俺はある目的でホテルの中を散歩する事にした。（さすがに外は危ない）このホテルは、外の景色も見える大ホールのような所もある。俺が散歩をしながら向かっているのはそこだ。

「彩」

「？　幸助」

ホールの中は人が少ない。今は遅い時間帯だからだろう。

「どうしてここに？」

「お前が居ると思ってな。お前、悩むといつもふらふらと散歩するからな」

「そ、そう・・・・・・」

ぷいっ、と彩はそっぽを向いてしまう。う～ん。こういう時の彩

は基本こんな感じだからな。なんだかもう慣れた気がする。

「何に悩んでるんだ？」

「へっ？」

「・・・・・・って決まってるか。神戸さんの事だよな」

「えっ？　う、うん。そ、そうよ？（それもあるけど、別の事もあるのよね・・・・・・・）」

彩はなぜか自分の胸をチラリと見てからはあ、とため息をついた。

「どうした？」

「いや・・・・・・どうして神様ってどうしてあんな胸を人に授けたのかが解らなくてね・・・・・・・」

「お、おう。そうか」

正直意味不明だ。

というより、俺は元々明日の事を彩と話に来たんだった。嵐が作戦を立ててくれているとはいえ、こう、なんか、心境的な事を話し合いたいと思ったんだよな。

うーん・・・・・・やっぱあの作戦って今考えると無謀な気もする。それに嵐も言ってたけど不確定要素も多い。それに問題は、俺達が臨機応変に対応出来るのか、という事だ。

「こ、幸助は・・・・・・やっぱり女子って、む、胸が大きい方が

いいの？」

いや、やれば出来るハズだ。信じるしかない。それにこういうのはもう思い切って、

「大きく出た方がいいよな・・・・・・」

そうだ。大きく出て、大きく行動した方がいいんだ。こういうのは思い切りだ。俺達ならきっとやれるハズだっ！！

「・・・・・・」

「なあ。彩はどう思う？　明日の・・・・・・ってうおっ！？　何！？　なんでそんなに殺気が逆ってるの！？　俺何もやってねえよな！？」

「・・・・・・死になさい」

「なんでえええええええええええええええええええええええええええええええ！？」

ホテルの大ホールで、俺の断末魔が響き渡りましたとさ。

り、理不尽すぎる・・・・・・

第十話　ちゃんと睡眠はとっておきたまえ

「もしもし」

「パパ・・・・・・・」

「・・・・・・愛か」

愛は、龍神が去った日の夜。また、婚約発表の前夜。城咲ビルの一室で、父に電話をかけていた。

「すまん」

「・・・・・・・？」

愛が何かを言う前に、父親の方から謝ってきた。

「私が、ふがいないばかりに」

「パパの所為じゃないよ。私は大丈夫」

「いや、大丈夫じゃないはずだ。お前は・・・・・・・あの子と・・・・・龍神君と一緒に居たいのだろう？」

「・・・・・・・うん」

嘘をつくつもりはなかった。一度龍神に会った事で、もう愛の心の中の整理はついていた。だからこそ、もう全てを受け入れた。

「だけど、ホントに大丈夫。私は、パパの事も大切だから」

「一応言っておくが、いつでも会社を畳む準備は出来ているぞ」

「ふふっ。バカな事言ってないで、これからもお仕事頑張ってね」

そして愛は通話を切った。もうこれで完全に心の中の整理は済んだ。もう大丈夫。

愛はそう、自分の心に言い聞かせた。

☆

社長室のデスクで、愛の父はただ通話の切れた電話の受話器を置いた。

ぎしっ、とイスをきしませる。

「・・・・・・龍神君。頼んだぞ」

彼は、龍神達が何をするのかを知っているわけではない。ただ、なんとなく、神戸を救い出すのは龍神だと、彼は思っているのだ。

いや、思っているのではない。それは、確信だった。

もう、彼の覚悟は決まっていた。

どんな事があってもいい、という覚悟が。

そして、その結末を受け入れる事も。

☆

朝が来た。

窓から入ってくる朝日が、俺達の顔を照らす。俺はなんとなく、早起きしてしまった。よって、そのまばゆいばかりの朝日をモロに顔に受けている。

「・・・・・・寝れたか」

「・・・・・・いいや」

早起き、というよりは、寝れなかった、に訂正しよう。俺もそうだが、嵐の目の下にもクマが出来ている。・・・・・・同士よ。

「君達。なんだい？　その無様な目の下のクマは。ちゃんと睡眠はとっておきたまえ。今日の行動に支障が出たらどうするんだい？」

俺の隣では龍神がテキパキと着替えを終えていた。

「「龍神」」

「なんだい？」

「「クマ」」

やっぱり龍神も寝れなかったようだ。

その証拠である、『無様な目の下のクマ』が龍神にもあった。

☆

「お早うっ！　野朗共ッ！」

「朝っぱらからテンション高いですね・・・・・・」

祭さんが食堂で俺達にむかって笑顔のあいさつを振りまけてくる。相変わらず、この人はどんな状況でも元気だな。

でも、だからこそあんなムチャクチャな学園で生徒会長をしているのかもしれない。いや、この人も十分メチャクチャだけどさ。

「よーし、作戦の確認だなっ！」

祭さんがワクワクしながら俺達の朝食が並ぶはずのテーブルの上で長い筒状になっていた紙を広げる。

その紙の一番上には、『真実の愛を取り戻せっ！！　チキチキ！Ｌｅｔ' ｓ誘拐大作戦☆』とデカデカと書かれている。宝探し大会の時もそうだったけど、この人はいちいちこうして紙に書かないと気が済まないのだろうか。

「こうして見てみると、俺達は本当に悪人だな」

しみじみと嵐が感慨深そうに言っている。そりゃそうだ。そもそもしっかりと、デカデカと『誘拐』って書いてあるし。

「いやいや。あなた達は『魔王に捕まったお姫様を助け出す王子様』のポジションですよ」

その自称『魔王』が俺達の朝食の席に顔を出す。それは、風人の姿だった。今回の協力者、とも言える。

「あれ？　婚約発表（パーティ）の方はいいのか？」

「ええ。まだ時間があるんですよ。とは言ってもまあ会場に向かう前に立ち寄っただけですが」

「この作戦は、成功しても後が大変なんだよな。その辺のフォロー。頼んだぞ？」

「はい。解ってますよ嵐さん。言ってみれば、僕の父は確かに『ああ言いました』からね。僕が出来る限りのフォローはします」

そして風人はチラリと紙絵さんの方を見る。当の紙絵さんは現在は忙しそうにもきゅもきゅと朝食を口につめている。紙絵さん。確かに紙絵さんは綺麗だけど、もう少し女の子らしくした方がいいよ？

「それでは僕はこれで。後は、頼みます」

「おう。任せろ」

「ちゃんとぶち壊してくださいね？」

にっこりと微笑む風人。

「お、おう・・・・・・」

嵐も少し怯んでいる。うん。確かに恐い。

その後、風人は出て行った。食堂は一階で、俺達の集まっている食堂は道路側に面しており、壁はガラス張りになっている為、風人が車に乗る様子まで確認する事が出来た。車に乗る前に、なにやら風人がせかされている。どうやら本当に忙しい中来てくれたようだ。

「にしても、一体何しに来たのかしらね？」

彩が不意に呟く。う～ん。確かにそうだよな。実際には顔出しだけだったし、そんなに会話もしていない。

「さあな。誰かさんの顔でも見に来たんじゃないのか？」

と、嵐がやれやれと言った様子だ。

「なあ？　紙絵」

「ふも？」

呼びかけられた紙絵さんは、口いっぱいにパンケーキをつめていた。そしてその表情はきょとん、としている。

対して、祭さんは真剣な表情をして遠くを見つめているような目をしている。この人も、こんなにも真剣な表情をする時があるんだな。正直、驚いた。

「さあいくぜ。お前ら」

鋭い瞳を向ける。その瞳は、一体何処に向けているのか。今日の祭さんは、いつもとは違う。

「『真実の愛を取り戻せっ！！　チキチキ！　Ｌｅｔ’ｓ誘拐大作戦☆』の始まりだ」

「祭さん。雰囲気台無しです」

やっぱりこの人はいつも通りだった。

☆

婚約発表の会場は、城咲ビルの最上階で行われる。そこに入る事が出来るのは招待された名だたる富豪たちと、料理を担当するシェフやウェイター。もしくは、会場を警備するガードマンだけだ。

「だから俺達はそのガードマンを狙う」

「『狙う』じゃなくて『襲う』の間違いだろ？」

「まあ否定はしない」

あっさりと言い放つ嵐。

「アンタ達・・・・・・本当にあの方法でそう簡単に入れるの？」

「出来るだろ。ようするにこうだろ？　まず俺達男子組は手始めに手近なガードマンを襲う。次に身包みをひっぺがす。そして最後に奪った服で変装して、会場に侵入完了。ガードマンは適当な所に押し込める」

「無・理・が！　あるでしょうがっ！！」

「ちょっと待て！　これを考えたのは俺じゃなくて嵐と祭さ・・・・・・ぎゃあああっ！！」

ＮＹ（ここ）に来ても本当に彩（コイツ）のする事は変わらない上に、俺のされる事も変わらない。

正直、そろそろ変わって欲しい。でないと俺の身が日本に帰る前に滅びる。いや、マジで。

「そろそろ幸助の断末魔も聞き飽きたな」

「そうだね」

こいつ等は本当に俺の友達なのかと時々疑いたくなる。

☆

「そういえば女子組はどうやって侵入するんだ？」

「私達は祭さんや明さんと一緒に入るわ。祭さんの所にも招待状が来てるのよ」

「はあっ！？　ち、ちょっと待て！　だったらなんで俺達も一緒に連れて行けないんだよ！？」

と、俺は当然の抗議を入れる。すると紙絵さんがにこっ、と微笑みながら答えた。

「その招待状さ、招待客を含めて一緒に入る事が出来るのは五名までなんだよね☆」

となると、招待客である祭さん、付き添い人として一緒に入る事が出来るのは明さん、彩、直ちゃん、紙絵さん。なるほど。これで五人だ。

「ってちょっと待て！　それなら明らかに彩の方が潜入向けだろ！

普段俺をサンドバッグにして鍛えまくっているその右ストレートを有効活用すれば『そんなに死にたいの？』彩。招待状があるからって油断するな。気をつけろよ？（キリッ）」

これは一種の脅迫だろう。いや、完全なる脅迫だ。

「と、まあ話も纏まった所で、潜入してからの事だが・・・・・・これは龍神。お前にかかっている。覚悟は、あるな？」

「はい」

祭さんの言葉に、龍神がうなずく。そうだ。この作戦はあくまでも、最後に龍神自身がなんとかしなければならない。そもそも、この作戦のラスト、最も重要な部分は不確定要素しか無い。神戸さんをどうやって連れ戻すのかも、龍神に任せてある。全ては、龍神にかかっている。

「よしっ！　意思確認も出来た事だし、行くかっ！」

バンッ！　と祭さんが立ち上がり、俺達も席を立つ。

「『真実の愛を取り戻せっ！！　チキチキ！　Ｌｅｔ’ｓ誘拐大作戦☆』の始まりだ」

「祭さん。マジで雰囲気読んでください」

第十一話　綺麗だな

城咲ビルの最上階。そこでは、城咲財閥の婚約発表のパーティが行われていた。メインの婚約発表まであと一時間。

そして、城咲ビルの真下。地上では、ある一人の少年が、二人の警備員に向かってなにやら話しをしている。

『すみません。パスを持っているのですが、見学者としてビルに入ってもよろしいでしょうか？』

『解った。だけど、見学は最上階以外のフロアに限定するよ。今、最上階では大事なパーティが行われているからね』

『解りました。ありがとうございます。ああ、それと』

『なんだい？』

『風邪をひかないように気をつけてくださいね？』

ニッコリと、少年――――菅田龍神は微笑む。

『？　風邪？　今はそんな時期じゃな――――』

二人の警備員の背後から、二人の少年が襲い掛かる。

☆

成功。

俺と嵐は、最早残骸と化し、地面に無様に倒れ去っている警備員の真上ですがすがしい顔をしていた。いやー。何かをやりとげるって実にすばらしい。

「さあて、後は身包みを剥いで・・・・・・」

俺達はビルの裏に警備員二人を運ぶ。幸い、祭さんが手をまわしてくれたおかげで一通りが少なくなっているので見つかる心配は無い。（一体何をしたのかが気になる）

ビルの裏で外国人の人の身包みを剥ぐ。気分はまるでモ○ハンでモンスターの素材を剥ぎ取るハンターの気分だ。

「つーかサイズがデカイな」

「まあ元々大人用だしその上、俺達（にほんじん）とアメリカ人じゃあサイズが違うからな」

城咲ビルの中では、ＩＤカードが必要となる。フロアによってはＩＤカードが無いと入れない場所もある。だからとりあえずはこの警備員の身包みを剥いで、侵入出来る様にしなければいけない。

「警備員（こいつら）どうする？」

「放置」

俺は一生忘れない。この人達の笑顔を。どうか、安らかに。

「言っておくけど、死んでないからね？」

☆

祭達は既に、パーティ会場へと足を運んでいた。祭は勿論、明、彩、直、莉子までもがドレスアップしている。

「う・・・・・・やっぱりドレスってなれないわね・・・・・・」

「そ、そうですね。なんだか恥ずかしいっていうか」

「あはは。ドレス姿の彩も可愛いね～☆」

「皆さん。お綺麗ですよ？」

ニコリと明が微笑む。

しかし本来の目的は愛の婚約を阻止、のハズなのだが、正直にいうと彩達にあまり出番は無い。全ては幸助達にかかっているのだが・・・・・・

（な、なんか落ち着かない・・・・・・あーもう！　早く来なさいよっ！）

☆

俺達は、なにやらじろじろと俺達を怪しい目で見る受付をなんとか通り過ぎ、（服がぶかぶかだから仕方が無いけど）最上階までいっきにエレベーターで昇る。しかしやはり、扉の前には二人の警備員が居た。

今度は背後から襲う、という事は出来ない。俺達は引き返し、一応はその下階へと戻る。そこはホールのような場所で、ビルの関係者達が休憩を行う為の場所のようだった。

しかし今はパーティが始まっているので誰も休憩等行っていない。

忙しいのだから当たり前だろう。

「さて、どうしようか」

「正面からは無理ってんなら、裏口から回り込むしかねえな」

「裏口？」

「最上階には調理場も設けられているんだよ。だから調理した料理を運んだりするための扉もあるし、関係者用の扉もある。そのどれかから入るしかない」

恐らくもう神戸さんは最上階の所に居るのだろう。もう、裏口から忍び込むしか方法が無い。

「裏口へ行くための通路は解ってるのだが、問題は今の服装だよな」

「え？　なんで？　問題ないじゃん」

「・・・・・お前、今すぐトイレに行って自分の姿を鏡で見てみろ」

確かに、よく自分の服装を見るとぶかぶかで全然サイズが会っていない。はたから見ると確かに不自然極まりない。

「どうする？　手近な人でも見つけて身包みでも剥ぐか？」

「もうそれしかねえな」

「君達、本当にためらいが無いね。立派な盗賊になれるよ」

なりたくはない。
そして、俺達がうーん、と頭を悩ませていると、上の階から三人の若者がやってきた。

『はあ。本当にしんどいよな』

『まったく。社長のわがままにも困ったものだ。急にこんなにいそがしくなるとはな』

『サボって正解だよな！』

『『全くだ！　ＨＡＨＡＨＡＨＡ！』』

龍神と嵐から会話の内容を翻訳してもらうと、要するにサボってる、と。

・・・・・・

「幸助。皆が忙しく働いている中サボっている若者に天誅を下さなきゃいけないと思わないか？」

「そうだな。・・・・・・あと、意外とあいつ等小柄だから服のサイズ、俺達でもあまりぶかぶかにならないで済むかも」

「はいはい。襲撃理由を正当化したんだったら、早く行ってきて」

ハンターと化した俺達が、若者に鉄槌を下す為に動く。べ、別に身包みが欲しいわけじゃないんだからねっ！？

その後、背後から襲撃された若者達の断末魔が響いた。
素材（スーツ）ゲット！☆

☆

「・・・・・・・？」

「どうかしましたか？　彩様」

「あっ。明さん。なんか、そこかで叫び声が聞こえたような気がして・・・・・・・」

「叫び声、ですか？」

きょとんとする明。彩はあわてて否定する。

「い、いえ。気にしないでください。空耳です。空耳」

「そ、そうですか・・・・・・・あっ。もうすぐ発表が始まりますね」

彩がステージの方をみるとスーツ姿の男達がせわしなく準備の方を始めている。本当に、もうすぐ始まる。始まってしまう。

「う～。遅いわね・・・・・・・」

「そうですね・・・・・・・」

彩に反応して、直も心配の声をあげている。

「嵐さん達、上手く入り込めたのでしょうか？」

「そこが一番怪しいのよね。大丈夫かしら？　あのバカ」

その時、彩の肩を誰かがトントン、と叩いた。

☆

なんとか尊い犠牲のおかげで、俺達は苦も無くパーティ会場に潜入する事が出来た。祭さんから貰ったグラサンで目を隠したおかげだろうか。受付の時とは違い、こんどはあっさりと会場内に侵入する事が出来た。

グラサンパワー、偉大なり。

様々な人が行きかう会場で、俺と嵐は彩達を探す。

「幸助。見つけたぞ」

嵐が視線を向けた方向には（グラサンで隠れてイマイチ解らなかったが）、イライラした表情の彩が居た。

「イライラしてるな」

「ご愁傷様」

「・・・・・・なんでそんな事を言うんだよ」

この作戦の後に俺を待ち受けている運命が決定したような気がした。

そして彩の方を見てみると、相変わらずイライラしている。これ以上放置しているとヤバそうだ。俺と嵐はとりあえず、近づいてみる事にした。

後ろに近づいていみても彩はまだ気づかないのでトントン、と軽く肩を叩いてみる。

「彩？」

「ひゃいっ！？」

ビクッ、と彩が驚いたようにビクッ、と肩を震わせる。

「幸助？」

「よっ」

「来るのが遅いのよこのバカっ！！」

ドゴムッ、と彩の必殺右ストレートが俺の腹部に命中する。しかしここで騒いでは全てが水の泡だ。

「う・・・・・・ぐうおあ・・・・・・」

なんともいいがたい声しか出ない。

「で？　他に何かいう事は？　謝罪とか、謝罪とか、謝罪とか」

「まずは謝罪以外の選択肢をくれ」

なんとか痛みがおさまってきたころ、彩の機嫌も少しずつだが直ってきたようだ。

「ううっ。こっちだって色々と苦労したんだよ」

身包みを剥いだりとか、身包みを剥いだりとか、身包みを剥いだりとか。

「・・・・・・そう」

ぷいっ。と彩はそっぽを向く。・・・・・・それにしても、彩のドレス姿なんて初めて見る。そもそも、ドレスを着るような所に一緒に行った事が無いから仕方が無いが。

「彩」

「？　な、何よ」

「なんだかんだで彩のドレス姿って初めて見たけど、綺麗だな」

元々美人だし。ドレス姿も似合う。

「っっっ！？　ななな、何を急に言ってんの！？」

「い、いや。率直に感想を述べただけなんだけど・・・・・・」

「うっ・・・・・・そ、そう」

なぜだか解らないが機嫌が直ったようだ。少し嬉しそうな顔をしている、ような気がする。とりあえず、機嫌が直ってなによりだ。

そして、フッ、と会場の明かりが消える。

会場の視線が一斉にステージに集まる。

ステージの下には、城咲財閥の会長と思われる人物が、スタンドマイクの前に立っている。

『え～、このたびはお忙しい中、城咲財閥のパーティにお集まりいただいて、ありがとうございました』

発表が、始まった。

まずは龍神がなんとかしなければいけない。

俺達が動くのは、その後だ。

第十二話　受け売りなんだけどね

愛はステージの裏で、ただひたすらその時を待ち続けていた。発表されると同時に、愛はステージから風人と共に現れる手筈となっている。そしてその肝心の風人は、さっきからステージ裏から姿を消している。

すると丁度その時、コンコン、と軽くドアをノックする音が響いた。ステージ裏の前にはちょっとした部屋のような物がある。そこからのノックなのだろう。

「神戸さん？」

「・・・・・・はい」

「スペシャルゲストを連れて来ました」

「えっ？」

愛が容量を得ない、と言った表情をするのと、ドアが開かれるのはほぼ同時だった。そして外から現れたのは、

「りゅーじん・・・・・・？」

「愛、ちゃん・・・・・・」

愛は目を丸くしている。そしてドアの向こうの風人が「頑張ってください」とだけ言って姿を消した。

どうやら、愛には解らないが、龍神と風人にはなんらかの接点があるらしいと予測する愛。そして、愛の第一声は決まっていた。

「ごめんね。りゅーじん。私、戻る事は出来ないの」

本心は戻りたい。

だけど、戻れない。

「うん。解ってる。愛ちゃんは戻る事が出来ないって事ぐらい」

「・・・・・・うん。ありがとう」

ステージの方から、パチパチと拍手が沸き起こる。どうやら、もう発表が始まるらしい。

「じゃあ、行くね・・・・・・・」

その時。

「まって」

どこか遠くへ行ってしまいそうな愛の手を、龍神がつかむ。

もう、逃がさないと言っているかのように。

「愛ちゃんは行かせない。だから今、連れて帰る」

「・・・・・・りゅーじん？　でも、だから・・・・・・・」

ついさっきと言っている事が違う。しかし、龍神は違わないと言って、首を横に振る。

そして、

☆

妻が死んだ。

それは、息子である風人が十二歳の頃だった。

そこから、なんとか子供達二人を育てようと必死だった。元々、大きくなりつつあった自分の会社。次々と契約を取り付け、いつしか大企業と呼ばれるまでにもなった。

そして、そんなある日。

ある契約先に行った時の事だ。

その契約先の社長は、早くに妻を亡くしたそうだ。大切な人を失ったという点と、子供を必死に育ててきたという点が似ていたせいか、すぐに気の合う仲となった。

つい最近、その社長の娘を一目見せてもらった事があった。

どういう偶然か、その娘は若かった頃の妻に少し似ていた。面影もあった。そして、とても懐かしい気分になった。

そこからは、我ながらとても無茶をしたと思う。だが、それでも、早くに母を亡くした子供達の心の隙間を埋めてやれないかと希望を抱き、その娘と息子の婚約を結ばせた。

これで、自分が子供達に出来る事は出来たのだろうか。

その代償として、親しい友人との信頼関係も崩れてしまったのだが。

しかし、今まで自分が埋めてやれなかった子供達の心の隙間程では無い。

そして、今日、ようやく婚約発表までこぎつけた。

後はその娘の名前を呼んで、その娘が出てくれば全てが上手くいく。

――――ハズだった。

「・・・・・・っ！？」

ステージの上に、誰も出ない。愛の方ならまだ解る。しかし、なぜ風人も出ないのか。城咲財閥の会長、城咲源五郎（しろさきげんごろう）は驚きの表情を露にした。

ザワつく会場。しかし、自分にも何がなんだか解らなかった。

「お父さん」

「・・・・・・風人」

今、ステージに立っていなければいけないはずの風人がなぜか、自分の目の前に居る。

「ごめんなさい。せっかくのパーティを台無しにしてしまって」

「・・・・・・どういうことだ」

とりあえず、理由を聞かなければ解らない。

「お父さんが僕達の為にこんな事をしているのは解ってる。だけど、このやり方は違う」

「・・・・・・」

「それに、お父さんがつきだした条件なら、あの人はちゃんと守ってるよ？」

「どういう事だ？」

それこそ、意味が解らなかった。
そして、風人はにこりと微笑む。

「だってお父さんが言ったのは、『愛さんが婚約から手を引いたら契約を切る』、と言ったけど、『第三者によって無理矢理婚約から手を引かされたら契約を切る』とは言ってないよね？」

「なっ・・・・・・・！」

口をあんぐりと開けたまま固まる源五郎。

対して、風人は悪びれもせずにニコニコと爽やかに笑っている。
源五郎は、その笑顔からとても息子が楽しんでいる印象を受けた。

「こんなとんでもない無理矢理な作戦、実はある人からの受け売りなんだけどね」

☆

「くしゅんっ！」

「風邪ですか？（か、可愛いくしゃみ・・・・・・）」

「・・・・・・ん～。誰か噂してるのかな？」

「祭さんなら誰が噂してるのか把握しきれませんね」

「ん～？　そうか？」

「自覚してください」

「あはは。いつもなんか悪いなあ。明」

「い、いえ・・・・・・」

☆

「相変わらず、祭さんの考える事は豪快だよね」

「・・・・・・うん」

愛は、龍神に手を引っ張られながら廊下を走る。

メチャクチャな理屈なのは解ってる。

ドレスのままだと走りづらいし、本当にこれが正しいのか解らない。

だけど愛は今この瞬間を、龍神の手を、離したくないと思った。

第十三話　また今度

ステージから神戸さんの姿が見えない。
つまり、龍神はなんとか神戸さんを連れ去った（こういう言い方は悪いが）という事だ。
あとは、なんと逃げ切ればいいだけだ。
不確定要素満載の「もうどうにでもな～れ」という声が聞こえてきそうな作戦（？）もなんとかで出しは順調みたいだ。（いや、人を連れ去っておいてなんだけど）

「さて、もうこんな所には用は無い。龍神と神戸の所へ急ごう。あいつ等だけじゃあ逃げ切るのには無理がある」

嵐が言った言葉の通り、もう用はないといわんばかりにざわつく人々のわきを通り、スタスタと会場を後にしようとドアに向かって歩く。
折角こんな所に来た（それまでに何人かの犠牲を払ったが）のだから料理の一つや二つ食べても・・・・・・

「ほら、さっさと行くわよ」

ぐいっ、とドレス姿の彩に引きずられるようにして俺は会場を後にした。
俺が仕方がなく彩に従って移動したのも、何かを食べる前に彩の右ストレートを食す事になるからだ。

☆

『全く、何処に行ったんだ？』

『早く探し出せ！』

物陰から、愛を探し出そうとやっきになっているスーツ姿の男達の様子を、龍神と愛はひっそりとうかがっていた。

「こっちもダメか・・・・・・」

「りゅーじん。この後の展開はちゃんと考えてたの？」

「・・・・・・」

龍神は「うっ」、とだけ小さく呟くと、それいこう何も言わなかった。

愛にはようするに、「何にも考えていませんでした」という事が解った。

「・・・・・考えてなかったんだね」

「ごめんなさい」

龍神は素直に謝った。

正直、何とかして連れ出そうとする事で手一杯だったので、連れ出した後の事は頭がまわらなかった。

「ふふっ」

「？　何がおかしいの？　いや、そりゃ確かに後の事は考えてなかったというのはおかしいけど」

「りゅーじんが後の事を考えてないって、めずらしいから」

「・・・・・・」

龍神は自分でも考えてみると、確かにめずらしい。普段の龍神ならば冷静に、後の展開も考えて動くだろう。

自分でも、どうして冷静にいられないのかが解らなかった。

「確かに、めずらしいね」

龍神はただそれだけを冷静に、呟いた。

（今は冷静にいなきゃいけない。逃げるためにも）

『くそっ。まさか連れ去られるとはっ！』

『社長に迷惑をかける輩は許せん！！　探し出してぶっ殺してやる！！！』

『ヒャッハー！　ぶっ殺しだぜえええええええええええええええええ！！』

（・・・・・・僕の命の為にも）

自分の身の危険を感じる龍神。冷や汗が止まらない。

そして一刻も早くその場を離れようと、愛の手をとって、走り出した。

☆

俺達は会場を飛び出し、とりあえず龍神と神戸さん達を探す。

「まあ、普通の道は通らないだろうな。逃げてるんだし」

「それは龍神も探す方も解ってるだろ。だから普通の通路にはあまり人は配置されてないからな」

「よし、それなら俺達も出来るだけ見つからなさそうな道を探そうぜ」

「いや」

嵐が俺の言葉を遮る。

「だからこそ、普通の通路を探す」

「はあ？」

「相手は見つからなさそうな通路を全てマークしてるだろう？　あっちの方がこのビルの構造には詳しいわけだしな。だからこそ、普通の、逃げている人が通るはずの無い所は手薄になる。今は忙しいパーティの真っ最中だったわけだし、まだそんなに人員も配置されていないはずだ。だったら、龍神はそこを通るだろう」

「な、なるほど」

言われてみればそうだ。さっきから一般客の人達が集まっているような所には追っ手が居ない。

「それにしても、やっぱり慣れないとドレスって走りづらいわね……」

パタパタと彩がいつものスピードとはかけ離れた速さで走る。

「んー。龍神達（あっち）には同じドレス姿の神戸も居るからなあ。ゆっくりとはしてられないな」

今龍神は何処に居るのだろうか。どんな状況にいるのか解らないから携帯は使わない方がいいだろうし・・・・・・

「・・・・・・ってあれ？」

「どうした幸助」

「祭さんと明さんは？」

「？」

振り返ってみると、祭さんと明さんが居ない。

「莉子も居ないわよ」

ああっくそっ！　いつのまに消えたんだあの人達はっ！

「今は探している暇はねえ。とにかく龍神達を探す事に専念するぞ」

その後、俺達は男子と女子に別れ、俺と嵐はエレベーターで一気に一階へと直行した。もしかしたら、もう龍神達は一階に逃げ込んだのかもしれないと思ったからだ。

☆

龍神と愛は、一般客用の通路を通り、なんとか一階まで到達する事に成功した。しかし、不運な事に途中で見つかってしまった。

「愛ちゃん、頑張って」

「・・・・・・うん。あっ」

途中で、愛が転んでしまった。運動神経や体力はそれなりにある方だが、今は慣れないドレス姿での逃走だ。転んでしまったのは仕方の無い事だ。

ただし。

この状況下においては、決して好ましいとは言えない。

「あ、愛ちゃん！」

龍神が愛の体をなんとか支えるが、そのタイムロスが致命的だった。追っ手は、二人の目の前へとやってきてしまった。

（しまった・・・・・・！）

「りゅーじんは先に逃げて」

「・・・・・・嫌だ」

愛をかばうように、龍神は愛の前へと進み出る。

しかし、だからと言って状況が良くなる、というワケでも無い。

それでも、龍神は諦めなかった。最後まで、自分のわがままを通そうとした。

そして、そんな二人の前に、ある二人の少年が現れる。

☆

「見つけた！」

俺は一階のエレベーターから飛び出した直後、龍神と神戸さんを見つけた。しかし、二人の目の前には追っ手が迫っている。

「ちっ。行くぞ幸助！」

「お、おおっ！」

もうとやかく言ってる暇は無い。

こういう時は大きく出た方がいいんだ・・・・・・と思う。

『さあ、見つけました・・・・・・』

「ラ○ダーキーック」

『よおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！？』

嵐が追っ手その一にラ○ダーキック、もとい、ドロップキックを背後からくらわせた。（それはラ○ダーキックとは言わないんじゃないかな）

つーか大きく出すぎだろ！

「ええいくそっ！　こうなりゃやけくそだ！」

俺も嵐にならって背後からドロップキックをお見舞いする。見事

にその追っ手は崩れたが、向こうもプロだ。すぐさま体勢を立て直してくる。

「龍神！　早く行けっ！」

「・・・・・・ありがとう」

それだけ言うと、龍神は神戸さんの手を取って走り出した。
光のさす出口へと神戸さんの手をとって飛び出す。
早く逃げ切ってくれ。龍神。

『おのれら・・・・・・殺るか？』

『ガキの癖に調子にのりやがって・・・・・・』

俺達も早く逝くからよ。

☆

その後は大変だった。
突如追跡をやめた追っ手達に驚きながらも、祭さんが用意してくれた車に乗り込んで（運転は勿論別の人）なんとかホテルまで逃げ切った。
そして、風人が約束どおり『フォロー』をしてくれて、俺達はお咎め無し（襲撃した人達には悪いが）で、神戸さんとの婚約の件も無かった事になった。
それから一日はここでゆっくりと過ごす事にした。
次の日には日本に帰る準備を始め、そして、結局日本に帰国するのは龍神が神戸を連れ戻してから三日目となった。

そして、今日がその三日目。

――――俺達は、空港へとやってきていた。

「皆さん。有難うございました」

ペコリと風人が空港で頭を下げている。

「いや、礼を言うのはこっちの方だよ」

「そうだな。結局はパーティをぶち壊しただけだし」

しれっ、と嵐が言う。

まあ、実際はその通りだ。

「そうそう。こんなバカ共にお礼なんていらないわよ」

「酷いっ！」

「いえ。父と真剣に話せる機会を下さったのは皆様ですし」

「？」

俺にはなんだか解らないが、どうやら向こうは向こうで何かあったらしい。

まあ、俺達に関与する所では無いが。

「あの・・・・・・」

神戸さんが申し訳無さそうにしている。

「ごめんなさいって、貴方のお父さんに・・・・・・」

「あはは。気にしないでください。父も解ってくれましたから」

ニコニコと笑う風人。

ま、コイツのこういう寛大な所は嫌いじゃない。

「そろそろ時間ですね。それでは皆さん、さようなら」

「ああ。また日本（こっち）にも来いよ」

一緒に過ごした時間は少ないが、なんだかんだで『友達』、だしな。

「ええ。また今度」

ニコリと風人が笑う。ええいくそっ。この爽やかイケメンめ。こういう奴だけは内の学園には来てほしくないな。女子人気が独り占めされてしまう。

「ばいばいこーすけ」

「ああ。じゃあな風花ちゃん」

風花ちゃんが俺に与えてくれた心の傷は一生忘れない。

そして、俺達は見送る風人達に向かって背を向け、祭さんと明さんの待つ自家用機へと歩を進めた。

「――――また今度。近い内に、ね」

第十三話　また今度（後書き）

これで「政略結婚編」は大体終わりです。次はエピローグの後にＳＳを挟んで、新章に入ります。

エピローグ

ＮＹから帰国してから、三日後。
莉子は、取材で得た様々な人物とのつながりを持つ携帯のアドレス帳から、ある一つのアドレスを表示させる。そこには、『城咲風人』と書いてある。
電話番号を呼び出し、そのまま風人に向かって電話をする。コール音が二回響いて、風人が通話に応じた。

「もしもし」

「久しぶり、ですね？」

「いいですよ。敬語じゃなくても。それとも、まだ僕は敬語を使うような人にカテゴリされてますか？」

苦笑する風人。対して、莉子も苦笑する。

「そーだね。それじゃ、そろそろ別に敬語じゃなくてもいいかな？」

「そうしてもらえると嬉しいです」

この電話の向こうでは風人はニコリと微笑んでいるのだろうと予想する莉子。その予想は間違っては居ない。

「で、どうして電話を？」

「その事なんだけどね。改めてお礼を言おうと思って」

「お礼はこちらからしたい方ですよ。父と落ち着いて一緒に話す事が出来て、父一人で抱え込まないように出来ましたから」

「ありがとう」

「・・・・・・」

一方的に莉子がお礼を言っただけなのだが、風人は黙った。その一言にどれだけの思いがこめられているのかが解り、それを踏みにじる事はしたくないと思ったからだ。

「んっ。そんで、あとついでなんだけども、『アレの件』は何時になるのかな？」

「ああ。『アレの件』でしたら近々。多分、そっちが夏休みに入った頃にはね。夏休み明けには幸助さん達はビックリすると思いますよ」

「ふっふっふっ。まあそりゃそーだろーね。幸助君は鈍感だから」

「あ、そうだ」

「ん？」

「その、今度、一緒に遊園地、という所に行きませんか？」

「ゆーえんちねえ・・・・・・んー。オッケー☆いいよ」

「ほ、本当ですか？」

「うん。彩達も一緒に誘っちゃうけど、いい？」

風人は一瞬ふっ、と微笑み、そして、

「はい。大勢の方が楽しいですものね」

「そーそー。そんじゃ、それだけ。ばいばい」

「はい」

そして風人は通話を切ろうとするが、莉子のあわてた声が聞こえてきたので、通話を切ろうとするのを止める。

「っと、言い忘れてた」

「？」

「またね☆今度会う時を楽しみにしてるよ」

「・・・・・・っ。はいっ」

それだけ言うと、莉子は通話を切った。

こうして、二人の会話と共に、ＮＹでの出来事は終わりを迎えた。

エピローグ（後書き）

ついに「政略結婚編」が終了！

最後は駆け足でまとめた感がありますが、ご容赦を。

最初はこの章はやらない方がいいんじゃないかと悩んだのですが、この作品の幅を広める、と言った意味でも一応やってみるか、と思ってやってみました。

いきなりの急展開にしてしまってもうしわけありませんｍ（＿＿）ｍ

この章では龍神と愛の関係を少し進展させたのと、二人の新キャラを登場させたという所に意味があります（多分）

それでは、次は恒例のＳＳシリーズ。

まだ何を書くかは決めてないっ！（↑これでいいのか作者）

更新が少し遅れ気味ですが、なんとかついて来ていただければなと思っております。

それでは、また。

出会いの春～言うなればそれがファーストコンタクト～パターン？

出会いの季節、春。

俺はこの春、高校一年生となった。

受験、という物を人生で初めて経験して、地獄を見た（割とマジで）。

志願した高校は、なんでも生徒のやる気を向上させるために色々とイベントを盛りだくさんとしている楽しげな学園で、実際には倍率は高かった。

しかし、親がこの学園の卒業生だったので魅かれなかった、というと嘘になる。しかし俺の成績的にはギリギリで、必死の猛勉強が必要だった。

龍神や嵐、神戸さん、彩はともかく、俺はとにかく必死に勉強しなければならなかった。

いや～。それにしても、人間頑張ればなんとかなるもんだな。彩にこれを聞かれれば「私達のおかげでしょ」とか言って殴られそうだが。

勉強を教えてくれたみんなには感謝だ。特に彩は泊りがけで教えてくれたし。

今、俺はその幼馴染の彩と共に桜並木の中を歩いている。ひらひらと舞い散る桜はまさに幻想的で、俺の、いや、俺達の入学を祝ってくれているようだ。

「ついに入学かあー。なんだか感慨深いな」

「本当に、私達の頑張りが無にならなくてよかったわ」

彩も喜んでるようだ。

やっぱりコイツもなんだかんだで楽しみだったんだな。

「アンタが落ちたら、完全に無駄になる所だったわよね。私達の家庭教師も」

「そこかよっ！」

うん。まあ確かに彩は成績的には余裕だったわけだが。

「そういえば、おじさんとおばさんもこの学園の卒業生なのよね？」

「ああ。互いにこの学園で出会って一目惚れだったそうだ。そして駆け落ちの如く卒業後にボランティア活動に勤しみ始めたらしい」

「アンタの両親見てると、『バカップル』っていう単語がなんだか親しく感じるわ」

気持ちは解る。

何しろ三十六歳となった今でもあの二人はラブラブだ。たまに『彼氏イナイ暦＝自分の年齢』の俺にとって家の中でイチャイチャしているのは非常に腹立たしい。（しかも二人ともそれなりに容姿は若々しいからなおさら腹が立つ）

しかもボランティアばっかりしているし（どうやって収入を得ているのかは桐山家七不思議の内の一つ。俺も解らん）家にあまり帰ってこないのは当たり前だったし、昔彩が俺の両親を目撃出来たのはレアな体験だっただろう。

「朝からラブラブだなあ。お二人さん」

こんなぶしつけな声を背後から急にかけてくるのは、

「嵐か」

「だっ、だだだ、誰がラブラブのバカップルよっ！？　別にイチャイチャなんてしてないからね！？」

「・・・・・・別にそこまでの事は言ってないんだけどな。っと、よっ。幸助、天音」

「直ちゃんは？」

「今朝早くに出てったっておばさんが。アイツの場合は進級だし、一年生を迎える立場にあるからな。入学式の準備とか、色々と忙しいんだろ」

進級、という事は三年生だ。直ちゃんももう受験を受ける学年に来たか。まあ俺と違って受験で苦労する事は無いだろう。結構成績は良いみたいだし。

「と、いう事は来年は後輩か」

「つっても、中学の時とあんまり変わんねえだろ・・・・・・・おっ。龍神と神戸じゃねーか？　あれ」

「おっ。確かにそうだな」

確かにあの入学式初日から手をつないで（拘束されて、という風に見えなくも無い）イチャイチャと（強制的に？）一緒に歩いてい

るのは（龍神の目がやつれているのは気のせいだろうか）確かに龍神だ。

「死ねえええええええええええええええええええええええええええええええ！！」

「やあ幸助。よかった。助かっ・・・・・・ってなぜにドロップキックをしてくるんだ！？」

寸前で龍神はさっ、と回避した。

ちいっ！

「うるせえ！　イチャイチャイチャイチャ！　リア充爆発しろ！」

「イチャイチャ！？　君にはこの僕の痣が見えないのかい！？」

ギャーギャーと龍神が反論してくるが、俺には入ってこない。むしろ目から青春のなんちゃらが溢れて止まらない。

これを涙と認めた時、男は完全に敗北を宣言したような物だ。

俺達の戦いはこれからだ！

結局、その論争をしている内に、学園までたどり着いた。

☆

莉子は、学園の門へと足を踏み入れた。

この学園は生徒のやる気向上の為に様々なイベントを行うらしい。

莉子の将来の夢は簡単に言えば雑誌等のジャーナリストだ。新聞記者でも良い。ただ、自分の得た情報を沢山の人に広めて、役立てて欲しい、というのが莉子の夢だ。

周りの友達はこの学園に入れるほどの学力は無かった為、まだこの学園での友達は居ない。

まあそれでもいいだろう、と莉子は思っていた。

孤独を恐れていては何も出来ない、というのが莉子の考え方だ。

カバンの中には何気にカメラも忍ばせている。

（面白い取材対象にでも会えたらなー）

『新聞部』という所に入ったら、すぐさま記事を書けるように何かネタは無いかなと辺りを見回す。

そして真っ先に目についたのは、

「ったくよお！　中学の時からイチャイチャと！　羨ましすぎるんだよ！」

「だったら君も人の事言えないじゃないか！（羨ましいとかは別にして）」

「はあ！？　俺は『彼女イナイ暦＝自分の年齢』なんだぞ！　お前の目は節穴かっ！」

「・・・・・・なんかさ、『鈍感』って、罪だよね」

「りゅーじんも人の事言えない」

「愛ちゃん？　僕が一体何をしたんだい？」

「・・・・・・別にいい」

「ちょっと待って。龍神。何その哀れみの目？　えっ？　神戸さんはおろか、嵐もどうしてそんな目を！？」

「いやあ。そいつは自分の胸に聞いてみろ、としか俺の口からは言えないな。そうだよな？　天音？」

「い、いいからっ！　ささささ、さっさと行くわよっ！　余計な事言ってないで！」

「？？？」

周りの目も気にせず、ぎゃあぎゃあと騒ぐ五人組。大方中学時代からの友達関係だろうが、莉子にはそれが新鮮に思えた。

（ふふっ。面白い人達。・・・・・・しばらくはあの子達にくっついてみるかな？）

何しろ、鈍感な男の子達に、その気持ちに気づいてもらえない女の子達。中学時代にはこんなに個性的で面白い人達は居なかった。莉子は入学する前から、この学園に来てよかった、と思い始めていた。

（特にあの胸の発育の良いツンデレな女の子☆特に入念に取材しないとね♪）

☆

パシャッ、と、俺と龍神の論争に仲裁を入れるように、カメラのシャッター音が響いた。わざとなのかそうじゃないのか、フラッシ

ュが俺と龍神に向けて光ったので、それが俺達を撮っている写真、だという事が解った。

「あはは。仲がいいねえ。もう一枚、撮らせてくれる？」

と、にこやかに告げるのはカメラを構えた一人の美少女。

初めて見る顔だ。

制服が真新しい事を見ると、この女の子も新入生だろうか。

「誰？　アンタ」

「紙絵莉子。よろしくね☆」

「っ？？？　は、はあ」

一応確認しておくが、俺達とこの紙絵莉子、という子は初対面だ。

・・・・・・それなのになんだ！　このテンションの高さはっ！

「それでは取材開始☆」

「し、取材？」

「そうだよー。だって私、この学校の『新聞部』だもん」

へえー。新入生なのにもう部活動に入ってるんだ。早いな。

「未来の」

「だったら今はただの部外者じゃないのよっ！」

「取材強行☆」

「っきゃあああああああああああああああ！！　どどど、どこ触ってんのよー！！」

「あっはっは☆逃がさないぞお～☆」

今度は彩が騒ぎはじめる番だった。

紙絵さんの取材（という名の胸揉み）は、入学式直前まで続いた。

今思うと、それが俺達と紙絵さんとのあわただしいファーストコンタクトだった。

「ニヤニヤしてないで助けなさいよっ！」

「ぐはっ！」

顔面に真新しいカバンが激突するとは、ほんとうにあわただしい。

ぎゃあぎゃあと騒ぐ彩と、紙絵さん。
まあ、彩にしてはこの反応はそれなりに仲良くなった証拠だろうか。
それに、なかなか良い物も見せてもらったし。

「・・・・・・（イラッ）」

とかなんとか考えてると、顔面にカバンが飛んできた。

「この変態」

そう呼ばれても仕方が無いのでここはあえて黙っておこう。

「変態？」

「ねえ。今、変態って聞こえたけど・・・・・・」

「あの男子よね？」

「そういえばさっきもニヤニヤしてたわよ？」

「恐いわね・・・・・・」

前言撤回。

「いやいやいや！　俺は別に変態でもなんでも無いからな！？」

このままだと俺の学園生活がメチャクチャになってしまう！

それどころか、この学園で彼女が出来なくなってしまう！！

ここは話題を変えよう。

「そそそ、そういえば、直ちゃんももう中学に着いたかな――――――！？」

「ちょっと・・・・・・あの男子今『中学』って・・・・・・・」

「今は入学式の季節だし、まさか・・・・・・・」

「小学校から中学に上がったばかりの女の子を狙う気なんじゃない・・・・・・もしかして」

「ロリコンなんだ・・・・・・・」

ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！

このままでは俺の青春が終わる！　始まる前に終わってしまうっ！！

「ほら、さっさと行くわよ。まずは入学式の前にクラスを確認しなくちゃ」

「待って！　誤解を解かないまま行くのは嫌だあああああああああああああ！！」

ずるずるとそのまま俺は彩によって学園の校舎内へと引きずられていった。

恐らく、俺の花の学園生活は、入学式を終える前に終了しただろう。

女子達のひそひそ話と共に。

☆

「四組か」

俺はなんとか心を落ち着かせて、なんとかクラスの振り分け表が貼り付けられている掲示板の前までやってきた。

俺は一年四組だった。

「嵐と龍神は？」

「俺も四組」

「同じく、だね」

おおっ。中学の時から『同じクラス』という所は全く変動しない。

一種の『腐れ縁』、というヤツだろうか。いや、嵐の時の件で喧嘩三昧の日々をおくった経験があるので、『戦友』、いや、それも少し違う気がする。『悪友』という言葉が良く似合うような気がする。

「彩は？」

「四組よ」

「りゅーじん。私も四組」

これは綺麗に揃った物だ。

「あはは。因みに私も四組でーす☆」

・・・・・・本当に綺麗に揃った物だ。

「・・・・・・そ、そう。よろしく、ね」

彩にとっては厳しい一年が始まるだろう。

気の毒に。ただ、俺には出来る事は何も無い、というか何も出来ない。あんなテンションの女子を俺が止められるわけが無い。

後には入学式が控えている。

そろそろ入学式が行われる体育館に急がなければならないだろう。

――――しかしこのタイミングで、ある事件（トラブル）が起こる事となる。

☆

「・・・・・・」

入学式が行われる体育館は、予想通り人でごった返していた。

俺達がクラスを確認した時点でそれなりにギリギリの時間だったので、体育館前は直前まで子供の晴れ姿を写真に収めようとしてい

た両親や生徒達でいっぱいだ。
しかし、なぜか彩の表情が冴えない。

「どうした？　彩」

入学式の前に倒れたら大変だ。
とりあえず、体調だけでも把握しておきたい所だ。

「ん。何も無い・・・・・・」

「嘘つくな」

即答。
これが嘘だっていう事は、長年幼馴染をやってきた俺にとっては丸解りだ。
そもそもいつものコイツなら「別に何も無いわ」ぐらいに言っているハズだ。

「何よ。別に何も無いって言ってるでしょ！？」

元気に噛み付いてくるようになったが、それでもバレバレだ。
完全に何かを隠してる、いや、言い出せずに居る。

「お前の幼馴染を何年やってると思ってるんだ？　それに、お前が倒れでもしたら困るのはこっちなんだよ」

「・・・・・・別に体調が悪いわけじゃないけど」

これは多分・・・・・・本当だろう。
俺の、幼馴染としての直感だが。

「失くしたの・・・・・・」

「失くした？　何を？」

「えっと、その、それは言えないけど」

「言えない？」

俺に言えない物を失くした？　一体どういう事だ？

「すまん。よく解らない」

「うう～。と、とにかく言えないのよっ！」

こう言い出したらもうその失くした『何か』を引き出すのは難しい。

せめて、形とか、そのぱっと見が何かという情報ぐらいは引き出さなければ探すのは難しい。

「ええっと、せめてどんな形だとか教えてくれないか？」

「うう～・・・・・・アンタに言う時点でかなりギリギリなんだけど・・・・・・ええっと、これぐらいの長さの青い袋よ」

彩が手で表したのは、長さ七センチぐらいの細長い長方形の形だった。

「・・・・・・それ、お前にとっては大切な物なのか？」

「え？　んっと・・・・・・うん。そうよ」

それだけ確認できれば十分だ。

「解った」

「って、何処行くのよ！？」

体育館の逆方向に駆けだす俺を、彩が引き止める。

けど、止まるつもりは無い。

彩の声を振り切り、そのまま走る。

「探してくるっ！」

それだけ言うと、俺はそのまま走り続けた。

ああ、多分入学式は欠席だな。こりゃ。

けど。

――――今の俺にとっては、入学式よりも彩（アイツ）の失くした、大切（おとし）な物（もの）の方が大切だ。

☆

「なあ、明」

「はい？」

「暇だ」

「あの、それは入学式直前に言うセリフでは無いような気がするの

ですが・・・・・・」

入学式開始十分前。

生徒会長、祭盛人は副会長のメイドさんと共に校門の所で桜を眺めていた。

今年晴れて生徒会長を務める事となった祭は、入学式には壇上に上がり、新入生歓迎の挨拶を述べなければならない。

のだが。

「マジで暇だ」

「そろそろ入学式が始まりますよ？」

「暇だ」

「それでは行きましょう」

ガシッ、と無理矢理制服をつかまれた祭は引きずられる形でずるずると体育館へと向かう。

「ああー。今年の新入生はどんなのが入ってくるんだろーなー」

「さあ。ただ、先ほどこの辺りで新入生が騒いでいたようですよ？なんでも変態だとか」

「へえー。そりゃ面白そうな奴等だ。近々家に招待したいぐらいだ」

「変態を家に呼び込むのは止めてください」

「そんな事言うなよー。対話は大切だぜー？　・・・・・・ん？」

祭はふと、地面に『青い何か』が落ちている事に気がついた。
新入生の落し物だろうか、と思って手に取る。中身を見る、なんて無粋なマネはしない。

「？　なんですかそれ」

「落ちてたんだよ。多分新入生だろーな」

「どうしましょう？」

「んー。とりあえず預かっておくか」

と、祭がそう結論付けた瞬間、フッ、と祭とめいの側を真新しい制服に身を包んだ三人の新入生が通り過ぎた。

☆

走っていると、後から嵐と龍神の二人が追いついてきた。

「嵐！？　龍神！？　なんで・・・・・・」

「愚問だね」

「今更お前と何やろうが、別にどうって事ねえよ。入学式に遅れようとな」

「・・・・・・ああ。サンキュー」

落としたのは恐らく、込んでいた正門辺りだろう。
走りながら見渡してみるが、見つかったのは通りがけに見た学生二人。

正門にたどり着いたが、そこに彩の落し物は見つからなかった。

「やべえな。誰かが持っていったのか？」

「いや、もしかしたら別の所に落ちているのかもしれないね」

「とりあえず、探してみるか」

チラリと校舎の時計を見てみるが、もう入学式は始まってるな。
彩のヤツ、大丈夫か？

☆

「んー・・・・・・」

祭は遠目から三人の新入生の様子を観察していた。
どうやら何かを探しているようだ。それはめいにも察しがついたようで、

「もしかして、『それ』を探しているのでは？」

「みたいだなー」

もう入学式は始まっている。
生徒会長の出番はまだ後だからギリギリセーフだが、主役である新入生はもう間に合わない。

しかし、それでも、あの三人の新入生は人生で一度きりの高校の入学式よりも、後で探してもよかったこの落し物を優先したのだ。
すると、その新入生の内の一人が、息を弾ませながらこちらへとやってくる。
そして開口一番、
「すみません。あのっ、この辺りでこれぐらいの大きさの、青い袋を見なかったですか？」
目の前の新入生が手でどれぐらいの大きさかを説明する。それはまさしく、祭の持っている青い袋と同じぐらいの大きさだった。
「もしかして、コレか？　この辺りに落ちてたんだけど」
「それっ！　多分それですっ！　いやあ、よかったあ～。見つかって」
とりあえずその青い袋を渡した所で、祭は一つ質問する。
「なあ、お前、新入生、だよな？」
「？　はい」
「入学式はいいのか？　それぐらい、後ででも探せたハズだぜ？他人の為に、どうしてそこまで必死になる？」
「ああ、はい。それは解ってるんですけど。それに、それは確かに俺じゃない他の人の為でもあるんですけど、俺の為でもあるんです。だって――――」

新入生、桐山幸助はニコリと微笑む。

「これが無いと、元気を失くすヤツが居るんですよ。俺はそいつのそんな顔を見たくない。だから一刻も早く見つけたいじゃないですか」

思わず、「入学式を欠席してまでする事かよ」と、小さく微笑みながら呟いてしまった。

「そうか。だったら早く行ってやれ。そいつも待ってるんじゃないか？」

「はいっ。ありがとうございます！」

後から二人の友人と思われる新入生も追いかけてきた。

三人は入学式が行われている体育館へと続く桜の花びらが舞い散る道を走ってゆく。

「もうすぐ出番か。そんじゃあ明、行くぞっ」

「・・・・・・はいっ！」

明はニコリと優しく微笑むと、祭の後をついていった。

☆

「結局、入学式には遅刻したわね」

「・・・・・・悪い」

あれから結局入学していきなり先生に怒られてしまった。
入学式早々、しかも学園の中にいながら遅刻とは、恐らく学園史上初の出来事ではないだろうか。

「それで、中身はちゃんと入ってあったのか？」

「えっ。うん・・・・・・」

「ふーん。それならよかった」

現在は嵐達とも分かれ、俺と彩は二人きりで家への道を歩いている。彩とは家が近いので、中学に引き続き、大体登下校はこれから一緒になるだろう。

「・・・・・・あの」

彩はぎゅっ、と俺が手渡した袋を軽く握る。

「これっ！」

ずいっ、と、その袋が俺へと差し出された。

「へっ？」

「入学祝よっ！　受け取りなさいっ！」

「お、おうっ」

結局俺への物だったのか、と思いながら受け取る。
入学祝ならばここは素直に受け取っておこう。

「開けていいか？」

「好きにしなさい」

袋の中を開けてみる。中に入っていたのは、イルカの携帯ストラップだ。

「携帯ストラップ？」

「な、何よ。何か文句でもあるの？」

「いや、文句とかそうじゃなくて、これ確か、お前の携帯に付いてるのと同じやつだよな？」

「ち、ちちち、違うわよっ！　ホラ、よく見なさいっ！　私のはピンクでしょっ！　アンタのは青色っ！」

彩が携帯にぶら下がっているピンク色のイルカのストラップを見せる。

つーかただ単に色が違うだけで、結局は同じなんだよな。

「べ、別に一緒のを付けたいとかそんなんじゃないから」

この彩の言葉は嘘だ。

なんとなくそう思っただけだが。

「ありがとな、彩」

「・・・・・・べ、別に・・・・・・」

ぷいっ、と彩はそっぽを向いてしまった。

あれ、俺何か怒らせるような事を言ったか？

とりあえず、俺はさっそく自分の携帯に貰ったばかりのストラップをつける。なかなか可愛いストラップだ。

「んー。それならこっちも何か入学祝をしなきゃいけないなー」

「別にいいわよ。アンタじゃ、たかがしれてるだろうし」

「言ったな!?　よーし、それなら物凄い入学祝をくれてやるっ！」

「・・・・・・自分でハードルを上げるの止めなさいよ。どうせ自爆するんだから」

「う、うるせえっ！（泣）」

俺達は、共に歩を進める。

俺と彩のカバンのポケットに入れた携帯から顔を出したストラップが、同時に春風によってかすかに揺れていた。

まるで互いにお礼を言うように。

――――ありがとう、と。

出会いの春～言うなればそれがファーストコンタクト～パターン？（後書き）

これは一応祭との最初の出会い（ファーストコンタクト）を描いたつもりだったのですが、なぜか最後は幸助と彩メインに（笑）

次からは新章開始です！　乞うご期待（？）

第一話　強制入会

俺達が再び学校に通い始めた瞬間、俺達は衝撃の事実を目の当たりにした。
そもそもその事実というのは、俺達が日本を、いや、学園を離れた時点で事は始まっていたのだ。
現在俺と彩が居るのは、学園の掲示板の目の前。
この学園の掲示板というのは、この学園の様々な連絡事項が掲示される。
そして、その掲示を見て、俺と彩は固まっているのだ。

「何よこれ・・・・・・」

「そんな事は俺が聞きたいんだけどな・・・・・・」

～連絡事項～

本日付で以下の者を生徒会執行部員に任命する。

一年四組

・桐山幸助

・天音彩

・白上嵐

・菅田龍神
・神戸愛
・紙絵莉子

生徒会長、祭盛人

☆

「一体、どういう事ですか」

ホームルームの前の時間を使って、俺達生徒会強制任命メンバーは、生徒会室に抗議しに行った。

そもそも生徒会、なんていう役回りには一年生の俺達には荷が重過ぎるし、正直出来る気がしない。

「ん～？　いやあ、お前達をＮＹに飛ばせる時に欠席扱いにするのも少し可哀想だな～って思ってな。公欠扱いにする為にはこうするしか無かったんだよ。ホラ、生徒会の活動の一環として俺も協力出来たわけだし」

悪気も無くニヤニヤと笑う祭さん。

確かに龍神はそういう事を気にするヤツだからその措置は正しいと思うけど、俺は別に皆勤賞はどうでも良いと思っていたので生贄は龍神だけでよかったのに。

「なんだか今、とても聞き捨てなら無い心の声が聞こえたような気

がしたんだけど」

「聞こえてないなら気のせいだろ」

どうして俺の心の声はこうも駄々漏れなのか。

結局、その後はなんだかんだではぐらかされて生徒会室を後にした。

まあ、生徒会の仕事なんてそんなにする事はないだろう、と思っていたのだが俺の（というより俺達の）意志とは裏腹に、すぐに生徒会としての仕事が舞い込むようになる。

☆

俺達は放課後、一応生徒会の一員として任命されたのでしぶしぶ生徒会室へと赴いた（紙絵さんは『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』の編集で新聞部へと向かった）。

そして、扉を開けるとそこには既にめいさんと、生徒会室のイスに座ってくるくると回る祭さんが居た。その顔はなにやらニコニコとしている。

「ああー・・・・・なんか、これは危険な笑みだな」

「幸助さん。なかなか解ってきましたね・・・・・・」

めいさんが苦笑いをする。

まあめいさんが言うなら俺もそれなりに祭さんの事を解ってきたのだろう。解ってもこの人の前では意味は無いが。

「ふっふっふっ。喜べ新入り共」

「無理矢理ですけどね」

彩がトゲのある言い方をするが、祭さんは気にしない。というより、気にもとめていない。

「なんと！　さっそく仕事が来たぞ！」

「うわあ・・・・・・」

ただの仕事ならいい。別にいい。

そもそも生徒会に入ってた、というだけで経歴として入るからそれはいいのだが、面倒な依頼だけは避けたい。

特に祭さんが喜ぶような依頼だけはなんとしても避けたい。

「なんと！　映画研究会から映画の製作協力依頼が来たぞ！」

☆

そもそもの発端は、俺と嵐の裏工作が元で製作された映画研究会の映画、『消えてゆく友人達』だ。

これは一度公開され、大好評を博し、映画研究会の第二弾の映画の製作が発表された。（因みに映画鑑賞料は有料で、五百円かかる）

「ようするに、『一度作った映画が成功して調子にのって第二弾を作って更に大もうけしちゃおうぜ☆』って話だろ？」

「人聞きの悪い事を言うなっ！」

と、俺に向かって叫ぶのは映画研究会の部長、巴和樹（ともえかずき）だ。

この前は密かに襲撃してしまってすまないと心の中で謝っておこ

う。

「で、どうして俺達に依頼したんだよ。そもそも前の映画はちゃんとお前らだけで製作出来てただろうが。なかなか面白かったぞ」

「その件だが、実は今度撮る映画は、『幼馴染との同居生活』がテーマなんだ」

「「「却下だっ！！！」」」

俺、嵐、龍神が己を守る為に即座に却下を入れる。

こんなドストレートなタイトルは完全に嫌がらせとしか思えない。

「そこを何とかっ！　今回ばかりはキャストが明らかに足りないんだっ！　特にヒロイン！」

巴が頭を下げる。

そういえば前回のキャストは全部映画研究会の部員だったな。あのホラー映画ならヒロインは居なくてもなんとかなっただろうが（それでもヒロインが居ないのは映画としては痛いハズなのによくもまああれだけの反響を呼んだ物だ）、今回のテーマばかりはヒロインが居なくてはどうしようもないだろう。かといってまたヒロイン無しの映画に青春を捧げる野朗共ばかりがキャストではかなりキツイ（特に見る側の男子が）。

「気持ちは解るんだけどな・・・・・」

嵐が渋った顔をする。

確かに前回襲撃してしまった身としては出来るだけ協力してやりたい所だが、さすがに今回のテーマばかりは今の俺達にとって危険

満載だ。
しかもドストレートな分。

「いいじゃん。協力してやれば」

さらりと祭さんが言う。
いや、そりゃ祭さんはあんまり関係無い（事も無いけど）から良いけど、俺達にとってはこの学園の男子生徒全員から命を狙われるかどうかの境目にワザワザ自分達から踏み込む事となる。
出来れば今回の依頼は避けたい。

が。

「よしっ！　決定だ決定！」

「ええっ！？　ちょっ、まだ何にも話し合ってな・・・・・・」

「困った生徒を助けるのが生徒会の仕事だっ！」

祭さんには関係ないようだ。
隣の嵐を見てみると、はあっ、とため息をついている。完全に白旗だ。
それにしても、たまには祭さんも良い事を言うな。

「ワクワクが止まらねえなあ～。映画撮影とか面白そうじゃんっ！」

「あ、ちゃんと生徒会長の出番もあるのでご安心ください」

・・・・・・前言撤回。
やっぱ自分が楽しいからみたいだ。

こうして、俺達が無理矢理入会させられた生徒会での初仕事が始まろうとしていた。

・・・・・・何も起こらなきゃいいんだけどな。

第二話　スタンバイ

結局、依頼を受ける事になり、それから生徒会のメンバーは巴から受け取った台本を読み込むように生徒会長である祭さんに言われた。

明後日から夏休みが始まる。そしてクランクインは夏休み開始同時、つまり明後日からだ。

そして要約するに巴の要求は「明後日までにさっさと台本覚えて始めるぞ」という事だ。

鬼か。お前は。

しかもロケ地（と言うのだろうか）は当日まで秘密らしい。

なんという鬼畜仕様なのだろう。なんでも巴が言うには「ただでさえ時間が無いからな。余計な事を考えないようにする為だ」らしい。

俺としては、『余計な事を考えざる終えないようなロケ地』になるような気がしてならない。

まあ、何はともあれ時間が無い。

と、言うワケで、俺と彩は家に帰宅するなり、夕食の準備を一緒に終えてから（最近では俺も手伝うようになった）、台本を覚えるために猛特訓中だ。

「それにしても、本当にヤバイわね」

「ああ。本当にやばい」

この映画のテーマもそうだが、一番マズイのは、

「「どうして俺（私）達が主役なんだろう．．．．．．」」

という事だ。
俺と彩があせって猛特訓を開始しているのもこの為だ。
そもそも俺は幼稚園の頃からこう言った演劇系（巴が聞いたら怒るかもしれないが）みたいな、『演じる』といったタイプの事が苦手だった。
だから幼稚園でのお遊戯会とかも大体自分から進んで『木Ａの役』とかも自分から進んで立候補していた。
対する我が幼馴染の彩はというと、幼稚園～中学校にかけて大体『お姫様』とかそんな感じの役ばっかりだったような気がする。まあ、要するにヒロインが多かった、って事だ。
よって、今の俺と被って言った彩の発現は間違いと言える。
数々のヒロインをこなしてきた彩がヒロインをするのは当たり前なのだ。

「つーか、彩の場合はなんだかんだでこなせそうだよなー。対して俺はこういう役（しかも主役）なんて初めてだし」

「アンタは昔からやろうとしなかっただけでしょ。ほら、練習続けるわよ」

「へいへい・・・・・・」

☆

「映画、ですか？」

「ああ。ホラ、中学の時にも巴和樹ってヤツが映画を撮ってただろ？　今回はアイツの撮る映画に俺達が参加するって話になった」

「へえー。それは面白そうですね」

直はカチャカチャと夕食後の食器を片付けながら嵐の話に耳を傾けていた。実際、直も中学時代には嵐や幸助達と共に時折公開される和樹達の映画を見た事があった。一応、嵐達を通じて和樹とも面識はある。

「そういえば中学の時に見た映画も凄かったですもんねー。映画が出来たら見せてくれるのでしょうか？」

「何言ってるんだ？　お前も参加するんだぞ？」

「へっ？」

きょとんっ、とする直に、嵐は苦笑しながら続ける。

「なんでも、お前にも参加してほしいそうだ。何しろキャストが足りないって嘆いてたからなー」

「そ、そんな事急に言われても・・・・・・」

「ちゃんと役まであるんだぞー。何でも、俺がお前の彼氏役だってよ」

「え、ええ――――！？」

つまり、直は嵐の彼女役だ。

衝撃の役を与えられた直は、へなへなと床に崩れ落ちた。

そして悩んだ末、引き受ける事にした。

（かかか、彼女・・・・・・あ、嵐さんの彼女役・・・・・・ううっ。今から緊張してきました・・・・・・）

☆

「りゅーじん」

「何？」

夕食を終え、リビングで読書に勤しんでいる龍神に、台本を持ってちょこんと龍神の隣に座る愛。

「この役なんだけど・・・・・・」

「ああ、その役の事か」

龍神は少し苦笑いをする。

と、というのも、その台本に書かれた役のせいでもあった。

・菅田龍神　長瀬藤次（ながせとうじ）役。村野の彼氏。

・神戸愛　村野明美（むらのあけみ）役。長瀬の彼女。

「なんて役を放り出してきたんだ・・・・・・巴は・・・・・・で、愛ちゃん。それがどうかしたの？」

「この役に意義を申し立てたい」

「えっ？」

以外だな、と龍神は思った。

そもそも、愛の場合は「私達にピッタリの役」とかなんとか言ってくるのだと龍神は思っていたからだ。それが、この役に意義を申し立てるとは思わなかった。

そして、龍神が何か言おうとする前に愛が言葉を紡ぐ。

「この『彼氏役』、『彼女役』の部分を、『夫役』、『妻役』に変えるべき」

「そこ!?　気にしてたのそこなの!?　明らかに違うでしょっ!?」

しかし、愛は真剣な表情をしていた。

「あれだけの事があったのだから今の私達の愛は夫婦と呼べるぐらいに育まれ「わーわー!!　それは無し!　あれは忘れて――――!!」・・・・・・りゅーじんの分からず屋」

龍神は「何が分からず屋なの・・・・・・」と言いながら、顔を真っ赤にしていた。今思うと、あの時の自分はどうかしてたと思う。

（でも・・・・・・）

チラリ、と龍神は台本を眺めてブツブツ何か言っている愛の方を見る。

（連れ戻せて、愛ちゃんが側に居てくれるようになって、良かった、かな）

そして龍神は、読みかけていた本を閉じ、手元に置いてあった自分の台本を手に取った。

☆

翌日。

俺達の学園は、終業式を迎えた。

クラスメイト達とは夏休みの間はお別れだ。

しかし、俺はのんきに夏休みを楽しむ暇は無い。（そもそも、夏休みがあるのかどうかも解らない）。

学園の売店では、新聞部の特設スペースで紙絵さんが元気に『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』を売りさばいている（裏アンケートはなんでも最近ｗｅｂ配信にしたらしい）。

紙絵さんは新聞部の仕事もこなしながら台本を覚えて映画の撮影だなんて、スケジュール的に大丈夫なのだろうか。

俺は購買により、『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』を一部購入した。

「毎度あり～☆」

と、紙絵さんの元気な声を背に、新聞を開く。

一面には大きく『今年度の映画研究会製作映画第二弾タイトルは『幼馴染との夏休みの同居生活』に決定！！　一部では期待の声も高まりつつある』と、デカデカと赤い文字が紙面上で踊っている。

こうして見てみると、本当に映画を撮るんだなあ、という実感もわいてきた。

しかもご丁寧にキャストで俺達生徒会のメンバーも書かれてある。

これは多分紙絵さんの差し金だろう。

『監督からのコメント』という欄があったので、見てみる事にした。

～監督を務める巴和樹さんからのコメント～

今作は、前回よりもキャストを豪華にしてお送りします。前作はヒロイン不在というとんでもない映画でしたが、今作は学園でも評判の美少女キャストを取り揃えておりますので、楽しみにしてくださっている方々も多いと思います（笑）

スケジュール的にはかなりキツイですが、この夏休みからクランクアップして、なんとか始業式後の上映に間に合わせたいと思っております。

皆さんのご期待に添えるようにキャスト、スタッフ一同、励んでいこうと思っております。

と、監督である巴さんは意気込みを語った。

前作を超える質の映画を製作する、と張り切っている。

映画研究会の新作に期待しよう。

また、生徒会全員の参戦とあって、生徒会長の祭盛人生徒会長の参加も明らかになっている。

これはますます目が離せない。

この記事を書いた人の名前は明らかになっていないが、これを書いたのは恐らく紙絵さんだろう。

俺は高校生が製作したにしてはクオリティの高い学園の新聞をくしゃっ、と思わず力強く握り締める。

「・・・・・ハードル上げすぎだろ」

自然と、ため息と共に言葉が漏れた。

「何してるの幸助。早く帰るわよー」

と、俺の現在の心境を知ってかしらずか、彩が校門の前で元気に手を振っているのが見えた。

☆

映画製作初日。

記念すべきクランクアップ当日の集合場所は、なんと祭さんの家だった。

しかも今回は祭さんが機材等の援助をしてくれているそうで、使う機材も本格的だ（というより本当に映画製作で使ってる物なのかもしれない）。

そして、俺達以外にもキャストは居た。

『彼女イナイ暦＝自分の年齢』のむさくるしい男子集団、『男の友情は永遠だぜ！」のメンバーの長谷川、小林、竹川だ。

「あれ？　お前ら、確か五人組じゃなかったか？」

と、俺が疑問を投げかけると、

「は？　五人組？　何ワケの解らん事を言ってるんだ」

「俺達は元々三人組だしぃ？　ただのトリオだしぃ？」

「幸助。お前幸せ過ぎて記憶障害でも起したか？」

どうやら他の二人はめでたく卒業したみたいだ。

因みにこいつ等の役柄は『イチャイチャする人達を妬む役』らしい。

こいつ等は映画（フィクション）の中でも現実（ノンフィクション）の自分達を演じなきゃいけないのか。

最早哀れすぎて泣けてくる。

「よーし、全員揃ってるな」

巴が帽子にメガホンといういかにも監督だ、というような姿で祭さんの屋敷（いえ）の庭で指揮を取る。

「それじゃあ、準備、始めるぞー」

巴の合図と共にそれぞれの準備を始めた。

ついに、映画製作がスタートする。

・・・・・・俺達の共同生活がバレずに無事に乗り切れるのかが心配だ。

第三話　クランクイン！

ついに、映画製作が始まった。
最初のシーンは、俺が演じる主人公である『幸田圭亮（こうだけいすけ）』と、彩の演じる圭亮の幼馴染の『早河香（はやかわかおり）』が、屋敷の庭を歩くシーン。
これはどういう経緯でこのシーンになっているのかというと、どうやら祭さんの演じる天才生徒会長（演じる、というよりそのままの役）の家に招待されて、庭を一緒に歩いている、という事らしい。

「行くぞ～」

巴が俺と彩に呼びかけている。
行く、というのは解ってはいるが解っていても緊張自体は止まらない。
対して、隣の彩はというと「こんなの慣れてるから」といった感じで、凛としている。
コイツも『映画製作』という事は初めてのハズなのだが、やはり『木Ａの役』ばかりしてきた俺とは今までの経験（キャリア）が違う。

「よ～い、アクションッ！！」

巴の合図と共に、ついに最初のシーンが始まった。
カメラがまわっているのを意識しつつも、台本どおりに演じる（正確には演じようと努力した）。
まずは、香（彩）と共に庭を歩く。
・・・・・・今ふと思ったのだが、『幼馴染との同居』がテーマなのに最初が散歩シーンはどうかと思う。

「ねえ」

彩がセリフを言ってきた。っと、次は圭亮（こっち）の番だったな。

「なんだ？」

オーケーオーケー。出だしは順調。

「き、今日、ひ、久々に、ッ」

・・・・・・あ。噛んだ。

「カット！　カット！　どうした天音？　いきなりＮＧなんて」

「う、うるさいわね。ちちち、ちょっとミスしただけよ！」

それをＮＧと言うんだけどな。

紙絵さんがあははと笑う側で、彩が台本を片手に再びセリフを再確認する。

（う～・・・・・・だめだ・・・・・・幸助（コイツ）がこんなに近くに居るなんて・・・・・・！　間が保たないっ……！）

彩が顔を真っ赤にしている。

どうやらさしもの彩も映画撮影ともなるとやはり緊張するらしい。

内心、緊張してたのは俺だけではなかったようだとホッ、とする。

そして、テイク二（ツー）。

「ねえ」

「なんだ？」

ここまではオーケー。

さて、次は彩はちゃんとセリフを言えるのか？

「今日久々にアンタの家に行ってもいいかしら？」

おおっ。さすが彩。すぐさま修正してきたか。

「？　ああ、いいけど」

因みにここで「？」と、首を少し傾げるのがポイント。

自分で言うのもなんだが、それなりにこの辺りは良く出来ていると思う。

そして、彩がまた次のセリフを言おうとして口を開こうとした瞬間――――

「「「死にさらせえええええええええええええええええええええええええ！！」」」

「ごふうっ！？」

彩のセリフの代わりに、『男の友情は永遠だぜ！』の三人組（トリオ）のドロップキックが俺の腹部に飛んできた。

なぜに！？

「カット！　カアアアアアアアアアアット！！　お前ら！　まだ出番は先だぞ！？」

「うるせえ！　止めるな巴！」

「もう我慢ならねえ！」

「イチャイチャイチャイチャ！！　もうこれは殴るしかねえだろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「ちょっと待て！　これは演技だろうが！　映画製作だろうがああああああああああ！！」

結局、その後は三バカトリオを鎖で縛り付けて、物置に閉じ込めてから撮影が再開された。

☆

撮影は、最初の三バカトリオの暴走以外は順調に進んで行った。
そして、次は嵐と直ちゃん達のシーンだ。
この二人は恋人という設定。
今から撮るのは一緒にデートをしているシーンだそうだ。

・・・・・・羨ましい。

「何デレデレしてるの」

「してねえよ。ただちょっと役の違いを悔やんでいただけだ」

「へえ。そんなに私と一緒に演技するのが嫌だったの？」

「？　違うって、だから・・・・・・え？　ちょっと待って。なんでじりじりと近づいてくるの？　それにその拳の意味は？」

とかなんとかしている間に、撮影が始まった。
場所は祭さんの屋敷の前の道路。
この辺りは、普段は日曜日ですら一通りが少ないので撮影に支障は出ないだろう。
因みに三バカトリオは未だに物置に封印中。
こんなシーンを撮ると聞いたら必ず暴走を始めるだろう。女子に飢えた男達は本当に恐い。

「よ～い、アクションッ！！」

もう何回も聞いて聞きなれたその撮影開始の合図が響き渡る。
同時に、嵐と直ちゃんの撮影がスタートした。
因みに嵐が演じるのは『藤岡篤(ふじおかあつし)』。直ちゃんが演じるのは『森(もり)岡奈津美(おかなつみ)』という役だ。

「なーちゃん。今日は何処に行く？」

「あ、あーちゃんは何処が良いですか？」

うわあ．．．．．今なら三バカトリオの気持ちが解るな。
なんかこういうバカップルって端から見てると、独り身の俺としては物凄くぶちのめしたい。（気のせいか物置からドンドンと激しく三バカトリオが暴れる音が聞こえる）
しかも名前で！　しかも『あーちゃん』とか『なーちゃん』とか！　聞いてるこっちがむずがゆいわっ！！
嵐は何事も無く淡々とセリフを言い続ける。

「そんじゃ、とりあえずは一緒に遊園地にでも行くか？　デートしようぜ」

「ひゃいっ!?　でで、でーと!?」

・・・・・・あれ？　こんなセリフあったっけ？

「カット！　ちょっと直ちゃんさん。セリフ、間違えてますけど」

後輩なんだから『直』とか『直ちゃん』とかで良いのに、ワザワザ『さん付け』ですか。

「でーと・・・・・・でーと・・・・・・でーと・・・・・・でーと・・・・・・」

どうやら巴の言葉は直ちゃんには届いてないらしい。

「・・・・・・直？」

「はうっ!?」

嵐に名前を呼ばれて、ようやく直ちゃんが我に帰ったようだ。
そして顔を真っ赤にして、

「ごごご、ごめんなさいっ！」

と、丁寧に頭を下げた。

☆

その後なんとか嵐と直ちゃんの道路でのシーンを取り終え、今度は龍神と神戸さん達のシーンだ。

今度のシーンは龍神と神戸さんが一緒にお昼ごはんを食べるシーン。

台本を見てみると、思わず台本を握りつぶしたくなるほどのイチャイチャっぷりだ。というかこのシーンは本当に必要なのか、と疑問を常に持ち続けている。

恐らくこの映画が無事に完成しても、男共のギリギリという歯軋りぐらいしか聞こえないではないのだろうか、と思いたくなる。

場所はまたもや祭さんの屋敷だ。因みに屋上。

祭さんの家の屋上は学校の物とあまり大差無い。だから十分、学校で撮った物だとごまかせるだろう。

本当は学校の屋上に行って撮りたい所なのだが、その場合機材の持ち運びに時間がかかる。それに今行っている撮影と平行して準備等を始める事が出来る。

「よ～い、アクションッ！！」

巴の元気な声が青空に響き渡る。

屋上の床で龍神と神戸さんが仲良く並んで座っている。その目の前にはお弁当箱。

これは神戸さんの演じる明美の作ってきた手作り弁当、という設定なのだが、実際には神戸さんが作った弁当だ。

なんでも神戸さんが自分から「作りたい」と言ってきたらしい。

「そ、それじゃあ、そろそろお昼にしようかな？」

龍神は少し警戒気味に神戸さんの方を見る。

「私、お弁当作ってきたの」

そう言って、神戸さんがパカッ、とお弁当箱のフタを開ける。

中に入っていたのは、豪華なおかずの数々。神戸さんの気合の程がうかがえる。それにおかずだけじゃなくて、その見た目を綺麗だった。

これを神戸さんが作ってきたのを龍神は知っているハズ（まあ同じ家に住んでるんだし）なので、それだけにこの弁当のクオリティに少し目を見開いた。

「すごい。美味しそう」

これは台本のセリフと同じだが、龍神の本心だろう？

「本当？」

神戸さんがいかにも嬉しそうな表情を見せる。

「うん」

「じゃあ、食べさせてあげる」

・・・・・・チッ。おもしろくねえ。

「はい。あーん」

「あ、あーん」

神戸さんの持つ箸によって、龍神の口にエビフライが運ばれる。

ぱくっ、と龍神はそのままエビフライを咀嚼する。

「美味しい？」

「う、うん。美味し・・・・・・・」

チッ。気に食わないが、まあなんとか珍しく順調に終わって・・・・・・

「――――りゅーじん」

「・・・・・・あ」

・・・・・・・あ。

「はいカットおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！　神戸さん！　駄目だよ！　本名を言っちゃあ！」

「どうして？」

「どうしてって・・・・・・・ちゃんと台本に書いてあるじゃないですかっ！」

「でも、りゅーじんはりゅーじん」

「・・・・・・いや、だからそういう事じゃなくて・・・・・・」

「？」

「・・・・・・いや。やっぱもういいです」

結局、特別に龍神と神戸さんの役名は二人の本名そのままにした。

しかし、なんだかんだで、撮影初日は順調な滑り出しとなった。

ま、この調子で今後も上手く撮影が進めばいいんだけどな。

第五十部記念ＳＳ　龍神ＶＳ莉子！？（前書き）

祝、第五十部達成！

今回のＳＳは第一章の第二話と第三話の間の話です。

第五十部記念ＳＳ　龍神ＶＳ莉子！？

現在、龍神は授業前だというのにも関わらず、廊下を走っていた。
走り去る側で何人かの生徒が野球部が部室に打ち上げ花火を溜め込んで怒られていたとか、昨日駅前に有名タレントが居たとか、そんな他愛の無い会話をチラリと聞きながら、ひたすら走り続ける。
その理由として、今朝、愛と登校してきた龍神だったのだが、かくかくしかじかで愛と手をつないでいた龍神と愛の姿を、莉子に撮影されてしまった。
これでは恐らく学園の新聞の記事にしたてあげられてしまう。
よって、それを阻止するために龍神は莉子を追っている、のだが・・・・・・

（は、早すぎるっ！！）

正直、龍神は運動が苦手、というワケではない。中学時代の喧嘩の日々でそれなりに体力と走力は鍛えられていた（喧嘩、と言っても主に逃走が重視だったためだ）。
そのおかげか、脚力もついていて、運動にはさほど困らない。
しかし、目の前のカメラを持ってキラキラとした瞳で走る莉子に一向に追いつけない。それどころか、どんどん引き離されている。

（ど、どうして僕の周りにはこんなハイスペックな女の子達しか居ないんだっ！！）

心の中でグチを零すも、龍神はひた走る。
なぜならもしもあの写真が次の『ＴＨＥ・ＮＥＷＳ』の一面に載った暁には、もれなく学校中の男子から命を狙われるという副賞がもらえるからだ。

そもそも、愛は学校中の男子から人気が高い。隠れファンも大勢居る。手を繋ぎたくても繋げない普段から殺気を溜め込んでいる純情野朗共にしてみれば、すぐにでも龍神を抹殺したくもなるだろう。

それを防ぐためには。

（紙絵さんの行く所は解っている・・・・・・だったら新聞部の部室に先回りしてやればいい・・・・・・！）

現在走っているのは二階の廊下。新聞部の部室は校舎の外だ。現在、莉子は龍神の前を走っている。

どうにかして先回り出来ないかと策をめぐらせていると、龍神が行動を起す前に、莉子が行動を起した。

「ほいっ！」

「ええっ！？」

莉子は何の迷いも無く、『窓から飛び降りた』。

唖然として見守る龍神だったが、莉子はストンッ、と華麗に地面に着地した。

「成功☆」

「っていうか、制服って確かスカートだよね！？　そこは女の子としてどうなの！？」

「大丈夫大丈夫☆　見られても減るもんじゃないし、気にしない☆」

「そこは気にしてよ！　女の子として！」

「あはは！　心配してくれてるんだ☆　因みに、中はスパッツだから大丈夫だよ☆」

綺麗にウィンクして、そのまま莉子は走り去ってしまった。どうやら足に異常は無いようだ。

「っ！　こ、このっ・・・・・・！」

イラッときたのは否定しないが、今はそんな事を気にしている暇は無い。

「ええい！　くそっ！」

龍神は覚悟を決め、だんっ！　と窓から飛び降りた。

地面に飛び降りたと同時に地面を転がって、なんとかして衝撃を逃がす。

足に痛みや異常は無い。

（よし。足は問題無い・・・・・・！　痛いけど・・・・・・）

龍神はじんじんと痛む足を押さえながら、莉子を追いかける為に、走り出した。

☆

「龍神、行っちまったな」

「まあ当然だろうな」

確かにあんな写真を撮られたら龍神でなくとも追いかけるだろうな。
さて、嵐も落ち着いてきたようだし、疑問解消作業に入るとしよう。

「それにしても嵐、お前朝から様子が変だぞ？」

「（ピクッ）な、何が、だ？」

「んー。なんか、『絶対にバレてはいけない秘密を隠してる』、みたいな感じがする」

「・・・・・・勘が良すぎるだろ、お前・・・・・・」

「？」

「いや、なんでもねえ」

まあ、『絶対にバレてはいけない秘密』、ならば昨日俺もできてしまったのだが。
はあっ。彩との共同生活が紙絵さんにバレたら、俺も龍神みたいにしなきゃいけないんだろうな。
と、その時。
一時間目を知らせるチャイムが鳴った。

「「あっ」」

結局、龍神と紙絵さんは一時間目の授業には間に合わなかった。

☆

「はあっ、はあっ、はあっ」

龍神は新聞部の部室へと向かっていたが、結局莉子は既に見失っていた。

「こ、このままじゃ、ま、間に合わないかも・・・・・・」

莉子の入稿を防ぐのにはどうすればいいのか。

それだけを頭の中で考える。

（どうすれば・・・・・・多分距離的にまだ部室にはたどり着いていないハズ・・・・・・でもあの脚力ならもうすぐ入稿される・・・・・・あんな写真を撮られたんだから、また別の事件でも起きなきゃ・・・・・・）

ふと、何かが引っかかる。

そして。

それはあつ一つの答えへとつながる。

（そうだ・・・・・もっと何か別の事件を起せば、紙絵さんの足はそっちに向く？）

思い出したのは今朝聞いた生徒の会話。

そして、龍神はすぐさま野球部の部室へと行き、ドアを開けて、（鍵はかけていなかった）中から花火セットを引っ張り出した。

そして焼却炉の炎から打ち上げ花火に火をつける。

打ち上げ花火は全部で十個。それが、学園の上空に打ちあがった。

☆

新聞部の部室の中でパソコンのキーボードを叩く莉子。
そしてふと、学園に響き渡った轟音。
その音のした方角に、七色の花火が打ちあがっていた。

☆

莉子が打ち上げ花火の上がった方向に向かっていると、目の前の角から龍神が現れた。

「ふ～ん。なるほどね。怪しいな～とは思ってたけど、やっぱ菅田君だったか☆」

「知ってても来るとは思ってたよ。全く。まさか授業を休むはめになるなんて・・・・・・」

「んー。欲しいのはこれでしょ？」

莉子は手の中のＳＤカードをもてあそぶ。

「・・・・・うん。出来ればそれを渡してくれると助かる」

今思えば、どうやって莉子からデータを取り返すのかを計算してなかった。
そもそも、素直に莉子が渡してくれるのかどうかも解らない。

「いいよ？」

「そうだよね。駄目だよね。でも、・・・・・・えっ？」

「いいよー？」

「・・・・・・えっ、あ、そう。それじゃあ・・・・・・」

龍神が莉子の手の中のＳＤカードに手を伸ばすが、その手を莉子はすっ、と避ける。

「でも、一つ答えてくれるかな～？」

「・・・・・・何？」

「あはは☆　ま、そう警戒しないで☆　質問はいたって簡単だから☆」

「・・・・・・で、質問って？」

龍神が思うに、莉子が出すのは『簡単な質問』でも、『えげつない質問』に来るに違いない。

「愛ちゃんの事、どう思ってるの～？」

（やっぱりえげつない質問だ・・・・・・）

そもそも、龍神は愛の事をどう思っているのかが解らない。

ただ一つだけハッキリしているのは・・・・・・

「僕は愛ちゃんの事をまだどう思っているのか解らない。だけど・・

・・・・」

「だけど？」

「――――とても大切な人、という事だけはハッキリしている」

莉子がニッコリと微笑む。

「なるほどね～。それじゃ、約束通り、これね」

「っ」

ひゅっ、とSDカードを投げる。そして龍神はそれをキャッチした。

「それじゃ、私はさっさと戻りますかねっと。授業もあるし？　それに、欲しい物ももう撮れたしね」

そういい残しながら、莉子は校舎の方へと戻っていった。

何か腑に落ちないで居る龍神を残して。

☆

放課後。

龍神は愛と共に下校していた。龍神は朝の追跡で体力を消費していた為か、少し疲れが溜まっている。

「りゅーじん。大丈夫？」

「うん。なんとかね」

そう言って龍神は苦笑いを浮かべる。

「そういえば、朝花火が打ちあがったんだけど、りゅーじんも見た？」

「・・・・・・うん。結構近くで見たよ」

よりいっそう苦笑いが広がる龍神。

その後、ふらふらと龍神は自分の部屋へと上がっていった。そして愛は、一階のリビングで龍神が二階に上がった事を確認すると、携帯のメールボックスを開く。

莉子から来たのは二通のメール。

一通目には、今朝の莉子が撮影した龍神と愛のツーショットが収められていた。

これは今朝、新聞部の部室からパソコンでこっそり莉子が送ってきてくれた物だ。

そしてもう一通には、

「そういえば愛ちゃん。言い忘れてたけど今日の晩御飯は・・・・・・」

『愛ちゃんの事、どう思ってるの～？』

「・・・・・・え”っ？」

「りゅーじん？」

「愛ちゃん・・・・・・それは・・・・・・」

『僕は愛ちゃんの事をまだどう思っているのか解らない。だけど・・・・・』

「今朝、莉子が送ってきてくれたの」

今朝の会話が、愛の携帯から流れ出ていた。
実はあの時莉子は、会話を携帯で録音（というより盗聴）していて、そしてそれを愛に送ったのだ。

「私が莉子に頼んだの」

『だけど？』

「わーわーわーわーわーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

なんとか龍神は愛から携帯を取り上げようとするが、

「ていっ（ビシッ）」

愛の反撃により逆に意識を失ってしまった。

「りゅーじん・・・・・・寝顔が可愛い」

『――――とても大切な人、という事だけはハッキリしている』

テーブルに置かれた携帯から、愛の大切な人の大切な言葉が、リビングの中に響き渡っていた。

第五十部記念ＳＳ　龍神ＶＳ莉子！？（後書き）

第五十部までなんとか続け来られてきました！

みなさんありがとうございます！

第四話　あーん

午後一時。

撮影は一時中断し、昼休み休憩となった。

そして、肝心の撮影の進行状況はと言うと、まだ二十分の一程度らしい。

しかもワンシーンワンシーン、ＮＧが入ったりする時もある上に、場面等の都合上、『朝だけ撮れるシーン』とか『昼だけ撮れるシーン』とかもあったりするので、その限られた時間の中でどれだけ進む事が出来るのかがカギだ。

よって、昼の休憩もそんなに長くはとってられない。せいぜい小一時間程度だろう。

しかし、次は撮影場所を変えるそうなので、一応進んでいる、という事だろうか。

因みに、昼食の弁当は映画研究会の費用でまかなわ・・・・・・れない。

確かに前回、映画研究会は大成功を収めたのだが、前回は無料の上映だったので、結局は赤字。よって、節約しなければならないのだ。

結局は、各個人個人で昼食を持ってくるように言い渡されている。

「ああ、腹減った・・・・・・」

俺と彩は主役（これも未だに納得していないが）なので、当然その出番も多い。それに加えて、『木Ａの役』ベテランの俺からすれば精神的疲労も半端では無い。

とりあえずは、みんなでそのまま祭さんの屋敷（いえ）の庭で昼食をとる事となった。

明さんが用意してくれた物凄く広いレジャーシートの上に俺、彩、

嵐、直ちゃん、龍神、神戸さん、紙絵さん、祭さん、明さんの計九人で座る。
三バカトリオは依然として物置に封印中。
映画研究会はなにやら次の撮影の準備に余念がないらしい。
一度昼食をとったらどうかと勧めてみたが、断られた。まあ、あいつ等はあいつ等で楽しんでいるようなので、そっとしておこう。

「彩」

「ん？　何？」

「その～・・・・・・昼食、は・・・・・・」

俺はボソボソと周りに聞こえないように彩に小声をかける。
そもそも、共同生活の事を知っているのは俺、嵐、龍神だけだ。
女子メンバーは知らない。なので、一応は警戒しつつ声をかける。

「はい、コレ」

「さんきゅっ」

出来るだけ見られないように、こっそりと弁当を受け取る。

が。

「あれ～？　彩、今幸助君に何を渡したのかな～？」

目撃者が居た。
しかもよりにもよって好奇心旺盛で、新聞部部長という厄介な肩書きを持つ紙絵さんだ。

状況的には、とてもヤバイ。
とてつもなく、ヤバイ。
どんな些細な事がキッカケで紙絵さんに俺達の事がバレでもしたら、瞬く間に新聞に書かれて、確実に俺は学校中の男子達に命を狙われる羽目になるだろう。
そうなれば俺の命は明日まで保つか解らない。
・・・・・・もしも本当にばれたら、嵐と龍神のヤツも道連れにしてやろう。

「り、莉子!?　べべべ、別に何も渡してないわよ?」

「ホントかな〜?　今、絶対渡したよね〜?」

駄目だ。今の紙絵さんの追撃を振り切る事は不可能か?

「とうっ!」

「うおっ!?」

いきなり俺の方を向いたと思ったら、すぐさま俺の手から弁当箱を奪い去る。
し、しまった・・・・・・・!

「お弁当箱?　ふっふっふっ。そういう事かあ。まさか、」

ば、バレた・・・・・・・?

「彩が幸助君にお弁当を作ってあげてたとはね〜☆」

・・・・・・一応間違いでは無い。と、いうより、それだけ、か?

「ちちち、違うわよっ！　こ、コイツがどうしてもって言うから作ってあげただけよ！」

「なあっ！？　俺は自分で作るって言ったじゃねえかっ！　ただお前が作るっていうから作らなかっただけで・・・・・・」

そもそも、朝食だって昼食だって夕食だって、俺が作ろうとしても彩が「私が作るから」という理由で彩が俺の家に来てから俺は今まで作らせてもらっていない。

「ほほう？」

紙絵さん。そうやって顔をニヤニヤするのは止めてくれ。

彩が余計に凶暴化するから。

「誰が凶暴よっ！」

「やはりっ！？」

右ストレートが俺の顔面に綺麗にヒット。

嗚呼（ああ）。どうして俺の心はこうも読まれるのだろうか。

☆

結局、プンスカと怒り、何処かへ行ってしまった彩を俺は追いかける羽目となった（勿論弁当は手放さない）。

諸悪の根源の紙絵さんは「頑張れ～☆」と言ってニコニコ笑顔で送り出していった。

「おっ。やっぱりここか」

結局、彩を見つけたのはさっき撮影をした、屋上だった。

「彩」

「・・・・・・何よ」

俺は屋上で一人黄昏ている彩の後ろ姿を見つめる。

「・・・・・・どうしてここが解ったのよ」

「ん？　えっと、彩って怒って居なくなる時は大抵高い所に行くから今回もそうかな～？　って」

「ふ、ふーん。そ、それが？」

「それが、って・・・・・・お前が聞いてきたんじゃねえか」

そして彩はくるっ、とこっちを振り返る。

「で、何しに来たのよ？」

俺は手に持っている弁当をすっ、と差し出す。

「昼飯。まだ食ってないだろ。一緒に食おうぜ」

「・・・・・・解ったわよ」

しぶしぶ、と言った様子で俺の所に来る彩。そのまま二人で屋上の床で弁当を広げる。
そこで、彩は俺のある重大なミスに気がついた。

「・・・・・・ねえ」

「ん？」

「アンタが持ってきた弁当って、一つだけ？」

「・・・・・・あ」

俺は彩を追いかける際に、普通に、俺だけの弁当を持ってきてしまった。
無論、彩の分の弁当を忘れてきたのだ。
俺と彩の間を挟むようにして、ちょこん、と弁当が一つ置かれている。

完全に俺のミスだ。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

一瞬の沈黙。

「あー・・・・・・俺、下まで行って彩の分の弁当、持って来るな」

どうせ彩は下には戻る気無いだろうし。

「待って」

立ち上がろうとする俺の手をぎゅっ、と彩の手がつかむ。

「別に・・・・・・いい。このままでも」

ストン、と立ち上がろうとする俺は彩がつかむ手によって座る事となった。

「そ、そうか・・・・・・」

今も彩は手をつかんでいる。

彩の手はなんていうか、こう、温かい。

これが人のぬくもり、というヤツなのだろうか。それになんか小さくて可愛らしい手だ。女子だからだろうか。やっぱり男の物と比べるとなんだか華奢で、やわらかくて、やっぱり温かい。

なんていうか、ドキドキ、する・・・・・・？

「・・・・・・っ！」

彩があわてて手を離す。

・・・・・・なんかこっちも照れくさい。

今思えば、幼馴染として長年一緒に居たけれど、手を繋ぐ（この場合は繋ぐとは言わないのだろうが）という事は随分久々だったような気がする（拳ならよく当たってるけど）。

あれ？　いつからだったっけ？

「そういえば、最後に手を繋いだのって、いつだっけ？」

「え、えええっ！？」

いかん。なんとなく頭に思った事がつい口に出てしまった。
なんか今の彩だと怒りそうで恐い。
まもなく右ストレートｏｒドロップキックが飛んでくるだろう。

「わ、悪いっ！　つい口に出てしまっ・・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・・た？」

あれ？　何も、無い？

「・・・・・・小学校一年生ぐらい、かな・・・・・・・」

「？　そ、そうだったかな・・・・・・」

そうだ。思い出した。確か、幼稚園の時と同じような感じで一緒に手を繋いでいると、クラスの男子共にからかわれたんだっけ。
よくある話だ。
結局、それ以降同じく小学生のガキだった俺と彩は照れくさくて手を繋ぐ事は無くなった。
とは言っても、別に何か変化があった、というワケでは無い。
そもそもその時手を繋いでいたのだって、集会後の教室までの道のりで、学校中の生徒が廊下で混雑している中、はぐれないように手を繋いだだけだ。
特にこれと言った理由は無い。ただ、それだけだった。

と、いう事は、本当に久しぶりだったんだな。彩の手を握るのって。・・・・・・・なんだか、温かかったけど。というより、彩もよ

くそんなに昔の事を覚えているな。

「って、こ、こんな事をする為に居るんじゃないでしょ。早くお昼食べちゃわないと、時間が無くなるわよ」

「お、おお。そうだったな」

そして床に置かれた弁当箱に手を伸ばす。

直後、同じく手を伸ばそうとした彩の手がぶつかりそうになった。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

思わず手を止めてしまった。

いや、いつもならこんな事でためらったりはしないのだが、なんか、久々に手を繋いだからだろうか。

――――思わず、本当に思わず、止めてしまった。

俺がためらっている側で、彩が少しぎこちなく弁当箱を広げ始めた。

「は、早く食べなさいよ」

「お、俺!?　いや、あ、彩が食べろよ。元々忘れたのは俺だし」

それに今は落ち着こう。とりあえず落ち着く事が大切だ。うん。

「私!?　いや、私が勝手に飛び出して行ったんだし・・・・・・」

ええいくそっ！　どうして今日に限ってこんなに素直なんだっ！　いつもならもっとこう、「当然よ。アンタが忘れたのがいけないんだからねっ」とかなんとか言いそうなのにっ！

「・・・・・・だ、だったら・・・・・・」

「？」

「い、一緒に、食べる？」

「・・・・・・い、一緒？」

イマイチ要領を得ない俺をよそに、彩がやはりぎこちなく箸を持って、適当なサイズにミニハンバーグを箸で切って、一つつまみする。そしてミニハンバーグをつまんだ箸をそのまま俺に向ける。

「ほ、ほら。食べなさい、よ・・・・・・」

「・・・・・・！」

ぐあああああ！　止めてくれ！　今の俺にそれはヤバイ！　かなりヤバイって！　しかも元が可愛い分、上目遣いの威力が半端ない！　なんか、こう、理性を失うっ！

「・・・・・・お、おう」

「はい、あ、あーん・・・・・・」

そのままミニハンバーグを口の中に持っていかれ、咀嚼。

「お、美味しい・・・・・・？」

これは冷凍の物ではなくて、彩が朝作った物、なのだが、緊張感が最大にまで到達していてもはや味が感じられない。

「あ、ああ。お、美味しい・・・・・・」

美味しい、ハズだ。

さっきも言ったが、味が感じられない。

というか、どうしてこんなに俺は緊張しているんだ？　彩と二人きりでご飯を食べる、なんて今まで何度もあったし、そもそも最近は朝食と夕食なんかずっと二人きりじゃねえかっ！

落ち着け！　俺！　手を繋いだだけで緊張するなんて、どんだけ純情なんだよっ！！

「も、もう一つ何か、食べる？」

「もう一つ！？」

いや。ヤバイ。もうただでさえ緊張感がＭＡＸ状態なんだ。ここでもう一撃受けるのは状況的に良くないって！

な、何か言わねえと・・・・・・！

「い、いやっ！　今度は俺が食べさせるからっ！」

・・・・・・ん？

「え、えええっ！？」

あれ？　俺今なんて言った？

「そ、そ、そ、それなら・・・・・・」

彩が箸を弁当箱の上に置く。

・・・・・・これって、まさか、やっぱり・・・・・・

・・・・・・失言だ。

「お、おお」

もはや「お」しか言葉が出ない。

俺は箸を持ってさっき彩が半分にしたミニハンバーグをさらに半分にして（女子ならこれぐらいのサイズだろうか）箸でつまむ。

「じ、じゃあ、行くぞ・・・・・・」

「う、うん・・・・・・」

何やってるんだろ。俺。

「あ、あーん？」

もうこれは言わなければならないのだろうか。

そのまま彩の口に箸を運ぶ。

彩は顔が真っ赤だったが、真っ赤になりたいのは俺の方だ。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

もくもくとゆっくりと彩はそれを咀嚼するが、その間の俺はというともう正座して固まっている状態だ。

・・・・・・正直、今の俺はどうかしてる。

なんか、いつもと明らか違う。彩だっていつもより数倍素直だ。

なんだ？　コレ。なんなんだ？

「そ、それじゃあ次はまた私が・・・・・・」

と、彩がまた箸を手にしようとしたその時、屋上のドアがバンッ！　と開いた。

「幸助ー。天音ー。そろそろ時間だぞー？」

巴が、撮影の準備を終えたのか、屋上にやってきた。

た、助かった・・・・・・正直これ以上続いていれば俺の頭は完全にどうかしたのかもしれない。

「ごめんねー。彩。行かないようにって言ってたんだけどね。どうしても聞かなくってさ」

巴の後に続いてやってきた紙絵さんを皮切りに、ぞろぞろと屋上に撮影メンバーがやってきた。

「ったく。巴のヤツも空気読めよな・・・・・・ってどうした幸助。やけに疲れた顔をしてるが」

「・・・・・・気のせいだろ」

そのまま、俺と彩は急いでミニハンバーグしか減らなかった弁当箱を片付けてみんなと一緒に下に戻った。
途中、チラリと彩の顔を見てみたが、なんだか真っ赤に染まっていて、うつむいていた。

☆

「それじゃー次の撮影場所を発表するぞー」

「「おー！」」

と、元気良く言っているのは紙絵さんと祭さんだ。
こっちは心なしか疲れてそれどころではない。
というかもうさっさと発表してくれ。
海でも山でもどこへでも……

「次は主人公とヒロインの同居のシーンだから……幸助の家だなっ！」

なん……だと……？

第四話　あーん（後書き）

そろそろ五十話も越えた、という事なので、幸助と彩の仲を少しだけ進展（？）させてみました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3728v/

俺と幼馴染みの共同生活

2011年10月11日08時06分発行